

產政塾

XV



產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が溢れる心の叫びを綴ったものである。

目次

- 産政塾XVの発刊によせて
 (財)中部産業・労働政策研究会
 小田桐 勝 巳
- 「わたしの過去から現在、そして『殻』との付き合い」
 刈谷市役所 池田 真生
- 「一步を踏み出す」
 名古屋鉄道労働組合 石原 英児
- 五 円 玉 アイシン精機株式会社 海野 孝宏
- 「拘りを持って」 松坂屋労働組合 越 田 弘 幸
- 産政塾を振り返って アラク株式会社 大河原 宏 樹
- 『殻』は破り続けるもの、それが私の人生 全トヨタ労連組合連合会 大 橋 一 之
- 第15期産政塾を振り返って 豊田市役所 片 山 伸 子

45

39

31

23

15

9

1

● 変わりゆく自分 53

中部電力労働組合本部 倉沢 範行

● 産政塾で得られたもの 61

アイシン労働組合 洲崎 浩一

● 「一期一会」の精神 67

豊田合成労働組合 洲崎 晃嘉

● 「何事も経験」 73

トヨタ車体労働組合 千田 路征

● 殻を破れたかどうか 81

トヨタ自動車労働組合 立松 学

● 「産政塾」名前を付けて保存 89

株式会社松坂屋 棚橋 克成

● 産政塾活動を振り返って 97

トヨタ車体株式会社 奈須 克昭

● 日本人であることの再認識 105

株式会社豊田自動織機 野々垣 一

● 産政塾を振り返って 111

豊田工機労働組合 早矢仕 環

● 自分を取り巻く“殻”について 119

アスモ株式会社 原 誠治

● 2004年に思ったこと	中部電力株式会社	藤 牧 知 広	127
● 「やれ！」と言われれば	丸栄労働組合	別 宮 健 一 郎	135
● 「そつ啄の機」	デンソー労働組合	水 越 宏 明	143
● バレーボールと私	トヨタホーム株式会社	山 浦 宏 行	151
● 愛知のお国自慢 ～私の思いと感想～	株式会社デンソー	山 添 勇 人	159
● 35年間の人生を振り返って	全ユニー労働組合	山 本 浩 晃	167
● ～人生の変化点～	豊田自動織機労働組合	吉 川 浩 二	175
● 殻とは？	トヨタ自動車株式会社	吉 本 雅 教	183
● 裏方からみた産政塾（産政塾を運営して）	中部産政研主任研究員	竹 川 智 雄	189
● 産政塾活動記録			195
● 歴代卒業生			211

産政塾XVの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第十五期の活動を修了し、今年も二十五名の塾生が卒業いたしました。

産政塾は、異業種の若者二十名あまりにご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。セミナーといつても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルとは異なり、参加したメンバー達が自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向いて体験や教えを請うといったプログラムを組み、その中で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを改めて検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができるとなり、産政塾は言わば「自らを磨く道場」というようなものであります。

今回も産政塾への参加者は三十才前後の若者達であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。

人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活躍する時期であります。このような若者が集う産政塾は、今期も塾生がお互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そして一年近くにわたる活動を終え、このたび修了いたしました。

第十五期にあたる二〇〇四年の活動では、塾生は各企画をよく練り上げ、「創造性」「獨創性」「チャレンジ精神」に富んだ実のあるものにしてくれました。このセミナーを通して、参加者一人一人が新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第十五期生が産政塾での様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加対象も限定されたものではありませんが、こうした冊子を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

最後に、これまで産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係各位の皆様にご感謝を申し上げます。また同時に産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いです。

塾長 小田桐 勝 巳

「わたしの過去から現在、 そして『殻』との付き合い」



刈谷市役所

池田真生

<プロフィール>

いけだ まさお (31歳)

- 1973年 6月 刈谷市生まれ
- 1998年 4月 刈谷市役所入所
総務部資産税課配属
- 2003年 4月 企画部企画政策課配属
現在に至る

<家族> 独身

<趣味> 卓球、少々のアルコール

さてさて、前頁の写真は産政塾開塾式の日撮影されたものである。ちよつとふつくらしているな
ゝ・いやいや、緊張感と不安で全く余裕の無い硬い表情である。それもそのはず、「殻を破る」と
いうテーマは自分にとって苦手以外の何物でもないからである。かといつて齡30過ぎの男がいい年し
て逃げるわけにもいかず、覚悟は決めたつもりであったのだが……。果たして「殻」は破ることは
できる（できた）のだろうか。

△プロフィール▽

まずは、1月27日に迎えた開塾式。最初の難関は「自己紹介」であった。社会人になって、事ある
ごとに自己紹介は行ってきたはずなのだが、今回は趣が違った。だから準備もいつもより入念だった。
さて会場に到着後、受付にて名簿を見ると、あいうえお順なのか自分が一番上に載っていた。「多分、
自分が最初の発表者だな・・・」と覚悟し、会場の席も迷わず、一番前に陣取った。大体こんなこと
を考えている時点で「殻」の塊である。とはいえ、これは自分にとってはかなり画期的な行動であつ
たように思える。そうこうするうちに、自己紹介タイム・・・。

当時は自分を印象付けるために必死であつたが、産政塾の活動も残すところ、この卒論提出のみと
なつた今、拙い文章力ではあるが、自分の人生を振り返ってみたいと思う。そして、これからの人生
のなかでこの産政塾の経験がどう位置付けられるかを考えてみようと思う。

△誕生〜幼少期▽

自分の母子手帳を見るのは何年ぶりだろう。1973年6月14日、午後7時55分、池田家の長男として生まれる。体重2050g、当時としては未熟児だったらしいが、ぜんそくのおかげで体は弱く、外で遊ぶことを制限されていた。そこで普通の幼稚園に通うことが出来ず、運動量の少ない私立の幼稚園に通うことに。当時は何とも思っていなかったのだろうが、これが後々、最初の殻となっていく発端に。

△小学時代▽

やっと近所の子が誰であるかを知ったような気がする。しかし、幼稚園時代からの付き合いが無く、当時ぜんそくも完治していないこともあって、子供の特権である「遊び」が満足にできなかった。そんな中、運動能力の低さは否めず、良くいじめの対象にされた。人と比べられる（比べる）機会が多くなってくる時期、何枚もの殻を作ってしまったのはこの頃からであろうか。さらに、我が家では、他の家庭では許されているのに、自分（だけ？）は許されないといい制約が多々あった。しかし、子供は、「人と同じことをしたい」のであって、このことでよく怒られたものである。このストレスも当時としては、殻作りに少なからず影響を与えていたと思う。

△ 中学時代▽

中学生になると、他の小学校からの生徒が集まるので、一学年11クラスもあった。さすが中学校ともなると生徒間の競争関係を助長する尺度が増えていた。テストでのクラスや学年順位の発表、部活動など。この頃にはぜんそくも完治していたので、今までの分を取り返すべく、部活動には人一倍取り組んだ。当時卓球部には50人近くが入部。この中でレギュラーになれるのは6人。運動部に入った以上、レギュラーにはなりたい。さらに、小学校時代の悔しさを挽回するため、勉強にも力を入れた。とにかく、人の上に立ちたい、それだけである。やはりそこはまだまだ中学生。まわりの競争意識が弱い分、成果は如実に現れ、校内でもヒーロー的存在になれた。振り返ってみると、「努力」という言葉が一番似合っていた時期でもあった。そういう意味では、「殻」をどんどん破っていたとも考えられるが、今にして思えば何か違っていたような気がする。

△ 高校時代▽

中学校時代の集大成ということで、西三河ではトップレベルといわれる高校に入学できた。ある意味、目標を達成してしまった。しかし、ここでどん底を味わうことになる。さらに競争関係が激しくなり、これまでの3年間など吹っ飛んでしまうくらい、周りに圧倒された。歯車が少しでもかみ合わなくなると、何をやってもダメ↓過去（中学時代）の栄光にとらわれる↓自分を見失う……。加え

て、自分のモチベーションとは反比例して増大する周囲の自分への期待感。ますますスパイラルは猛スピードで加速していくことになる。「自分」という枠が小さくなつていくのがはつきりと分かった。また、殻の生産が強化され、困ったことに破る術を見出せなかった。

△浪人そして大学時代▽

まさか、2年も浪人生活を送ることになるとは思っても見なかった。一度、考え方が後ろ向きになつてしまつたら、現状維持が精一杯でなかなか成果を生むことが出来なかった。また、2年目の浪人生活が決まつてからは、親からの管理を離れるきつかけにもなり、学費など金銭的な援助も無いという条件付きで、大学を受験し、学生生活を送ることになった。ここからは同居とはいえ、自己責任で生きていかななくてはならなかった(大げさかもしれないが、当時、それくらいのプレッシャーを掛けていた)。大学に受かつてからは、勉強したい科目もあり、卓球もやりたい、遊びたい、その前にお金も稼がなくては・・・といったように一日一日が目まぐるしい日々であった。しかし、どれ一つとっても全力で取り組めたと今もなお、胸を張って言える。おかげで精神的には健康を取り戻すことができたが、「殻」はどうなったのだろうか?自分の事で手一杯のため、他人を見る事があまりなかったせいも、考えるゆとりがなかったのであろう。決して、「殻」が無くなった訳ではなかった。

△ 社会人そして産政塾へ▽

とにかく、いろいろドタバタ劇はあったものの、ここまでの人生で最大目的である「就職」が叶った（結婚は？という声も聞こえそうだが・・・）。この24年間で、自分は一体どんな人間に形成されたのだろう。まじめ、誠実、大人しい、積極性がない、など「殻」を破るにはほど遠い言葉で表現される。自分でも人の目が気になる、先のことを心配しすぎて慎重になるということは自覚している。しかし裏を返せば、まんざら悪い事とも思わないから、ついつい治そうともせず、拳句の果てはそれを貫こうとする。そんな中、産政塾第15期生募集案内が手元に来たのである。あまり「殻」については漠然としかイメージできていなかったが、それを「破る」ということはさらに考えてこなかった、いや、考えようとはしなかったから、参加についてはかなりのプレッシャーとなった。こうして、産政塾の初日を迎えることになった。

△ 殻を破った!?▽

数ある産政塾の企画の中で一番記憶に残り、殻の外を覗く事が出来た！と実感できたのは、6月の「保父体験」だった。私は昔から子供は好きな方で、甥っ子などの遊び相手をしていると、よくどっちが遊んでもらっているのか分からないと言われるくらいである。とはいえ、そんな子供を相手にしていたのは自分も子供の頃の話。加えて噂では、第15期生の中で数少ない独身であったことから、0

ゝ2歳児の担当になると聞かされており、逆に心配の種となつてしまつた。

当日、朝、園児との顔合わせ。緊張のあまり堅さが出ていたのか、なかなか、園児がなついてくれない。かといつて保育園の一日は忙しく、どうしたら良いかなどと考えているゆとりは無かつた。しかし、プール遊びのときである。ある子が水鉄砲を撃つてきた。そこからは夢中になつて、何も考えず遊んだ（やはり自分も一園児と化していた）。おかげで、帰るときには抱きついて離さない子もいれば、人一倍人見知りする子も「パパ!」（?）と言つてくれたりして、無事に研修を終える事が出来たという安堵感と、何よりも「殻」を破るといふ体験が出来た。

△産政塾そして「殻」とは▽

過去、産政塾に参加した先輩から耳にしていた話や、入塾式で顔を合わせた面々の自己紹介を聞きながら、凄い人たちが来ているのだなと圧倒されました。自分が公務員という事もあつて、民間企業の方と名刺交換することはあつても、あくまでもそれは仕事上でのこと。さらに立場を超えて本音で話し合える人に出会えた事は、これからの人生で大きな財産となりました。さらに、また、各企画については何れも新鮮で自分の事や市役所の事、生き方など色々考えるきっかけにもなり、良い経験をさせてもらいました。そういった意味では、産政塾の本旨の一つはクリアーできたと思う。

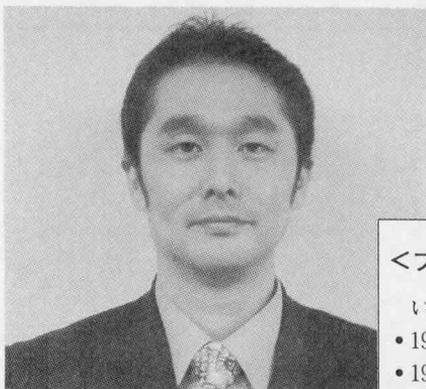
では、「殻」とは一体何であろうか。それは「比較する」ことで生じるものではないだろうか。生きていく中で「比較する」こと自体はどこへいつてもついて回るものである。対象は人や経験、考え

方など多種多様であり、それらに対するマイナスの意識の強弱が殻の厚みを左右するのではないだろうか。では、どうすればこの「殻」を破る事が出来るのか。方法は二つあるように思う。一つは、「殻」そのものをあたかも無かったかのようにすることⅡ「考えない」か「比較する対象を消してしまふ」こと。特に対象を消してしまふという行為は、今もなお、世界各地で起きている戦争や争い事になって現れるのではないか。人は、自分に無いもの（宗教、人種、資源など）を持っている者に対して妬みを持ってしまふと、最終手段として、こういった行動を引き起こす。ではもう一つはと言うと、対象を受け入れ、自分の生き方・考え方をプラスにしようとすること、要は自分という枠を広げることではないだろうか。よく人は自分の弱点は見えているが、強みや良いところというのは見えていない事がある。そこで弱点ばかりを意識し過ぎず、長所を再確認し、さらに伸ばしていこうとする意志を持つ事が「殻」を破る最適な手段であろう。

△最後に▽

この産政塾を通して、この時点で成長できたかは定かではないが、これからの人生のヒントや物事を前向きに考えていくきっかけみたいなものを得る事が出来たように思う。最後に快く産政塾へ送り出してくれた職場の皆様、また今回が縁で知り合う事ができた第15期生の皆様、そして何よりも竹川様を始めとする事務局の皆様へ感謝申し上げます。ありがとうございました。

「一歩を踏み出す」



名古屋鉄道労働組合
石原英児

<プロフィール>

- いしはら えいじ (36歳)
- 1968年4月26日生
 - 1987年4月1日 名古屋鉄道入社
同日 名鉄住商工業株式会社に出向
鳴海工場に配属
 - 1997年4月1日 工場移転に伴い
舞木定期検査場に配転
 - 1998年9月 労働組合専従
現在に至る

<家族構成> 妻、子供2人(長男、長女)
家族サービスが今一番の喜びと感じている。

はじめに

「殻の外へ飛び出そう」をテーマに、集まったみんなが半年間試行錯誤した。「殻」とは何か、そこから外に飛び出そうというテーマに匹敵するものは何か、同じ目標を持った面々がその達成に向かつて試行錯誤すれば、当然、仲間意識も高まりよりいいもの（企画）を作り出そうと努力する。限られた時間の中でのこの経験はとても貴重なものだったし、これは塾生すべての認識だと思う。

殻とはなにか

「殻」をテーマに議論を重ねるうちに、自分の中で中学入学当時の授業風景がよみがえった。自己紹介のとき、担任が「自分から率先して発言ができる者」と発言を即すが、誰も手を上げる者がいなかった。担任は、反応がない生徒達を前に、遠くに目をやり呆れた素振りを見せる。自分としてその態度が気に入らず、担任に対してあまり好意の持てる存在ではなかったのを思い出すが、しばらくしてこの担任が、「大人になつたらなかなか自分から率先して発言できなくなるぞ」と言った。率先して発言できないのは恥ずかしい気持ちがあるからで、その気持ちは大人も子供もないのではないか。子供であろうとも、こういう場で率先して発言することはなかなかできるものではない。そう思った自分はこの言葉の本当の意味が分からなかった。しばらくして担任がこう続けた。

—— 自分の意見を素直に表に出せるように ——

その意味について、

—大人になると、いろいろな場面に遭遇する。社会人になると、自分が目立とうとするならば、そのことが良く見られない状況にもなりかねず、自分の中で周りを意識し発言ができなくなる——だから、この時期こそ自分の意見をはっきり述べて、自分の思い通りに行動しなさいと言うのだ。

—目立つことで周りを意識するのは子供の頃のほうが強いのでは—— 当時はそう思っていた。担任はそのことを知った上でこう言ったのだと今となって振り返るが、周りの状況に捉われず自分を表現することは、簡単なようではなかなか難しい。だからこそ、いの一番に手を上げる人間は称賛できる。大人になればそういう人間になりたいと思つたし、それができると思っていた。しかし、本当の意味は違う。周りの状況が気になるから手が拳がらないのではない。まして恥ずかしいからでもない。

——何事にも自信をもって行動しなさい——
ということなのだろう。何の変哲もない授業風景だが、脳裏に焼きついている。未だに誰が率先して発言するのかを意識している自分に気付くたびに、「大人になればできる」と思っていたあの頃の自分を思い出しているからだろう。

↳ “自信”に気付いた瞬間↳

自信をもって取り組むことは、そのこと以上に自分の中で得るものがあると思う。

自分は幼少期のころから絵を書くことが好きだった。中でも小学校の写生授業のとき、遠近法の描き方を教わった後で描いた風景画が、自分が思っていた以上にうまく描けたことを覚えている。またその喜びは忘れない。次のステップを意識して、父から“木”の描き方を教えてもらい、さらに納得

ができる絵が描けた喜びも覚えている。

目標を持ち、それを達成したことによる喜びは更なる自信に繋がる。絵を描くことへの持論であるが、単に画用紙に上手に描くだけでは欲求は満たされない。目で見たものを如何に自分の表現で描ききるか、また、脳裏に残る映像を自分自身の想像力でどれだけ納得できるものに表現できるか、これが絵を描く上での欲求を満たす原点だと思っている。

その頃はそこまでの意識はなかったと思うが、より良いものをめざして、人に認められるものを描きたいと子供ながらに思っていた。その結果が誉められ、それが自分の欲求を満たし、更なる自信の向上にも繋がる。

また、このことで得た自信は、これまでの人生の中で大いに役立つものであった。自分の欲求を満たすことは、そのことでのみの能力を上げるだけではなかったことを強く感じている。

バスケットボールクラブでの思い出も、自分の人生の中で大きな収穫となっている。

小学4年のころ、単に背が伸びたいという思いだけで入部したのだが、ある練習試合で覚えたばかりのセットプレーが完璧にできたとき、顧問が「よし！そうだ！」と体育館に響きわたるほどの大きな声を発した時、鳥肌が立つほどの喜びを感じたことは忘れない。これはバスケットを続ける中で確実に自信となり、それがバスケットを好きになったきっかけとなったことを今でも鮮明に覚えている。

このような経験は誰にでもあることだと思う。しかし、顧問の厳しさが普通ではなかったことが、自分の中で顧問の存在を大きくし、その大きな存在から誉めてもらえたことが、一層の「自信」に結びついたのだと思う。思い返せば、それだけ認められたことへの喜びが衝撃的だったといえる。多かれ少なかれ、誰でも人に認めてもらうために努力する。それを認められたと実感できたとき、それが

自信となる。あのころは、日々の練習の厳しさが顧問の存在感を日々大きくしており、それだけに認めてもらいたいという気持ちが強かったのだろう。

余談になるが、練習の厳しさは尋常でなかった。夏休みは恐怖の合宿練習も含めほとんどバスケ漬けで、夏の暑い体育館では（当然冷房完備されていない）反吐を吐く者が続出。往復ビンタは日常茶飯事で、今の時代では考えられないが、親たちはその厳しさを指示するかの如く顧問を信頼していたの思い出す。しかし厳しいのはバスケのときだけで、授業ではやさしく、生徒達にも信頼されていた。自分が6年生の時の担任だったが、「こども人間が変われるものなのか」と子供ながら思ったくらいで、しかし、自分にとって怖い存在に変わりなかった。

賛否両論だと思うが、経験者としてこういう教育が悪いとは思わない。殴ることで怖い存在だと思わせようとする教育は絶対に悪い。自分自身、怖いと思ったきっかけが殴られることであることだったことは否定しない。しかし、なぜ怒られているのが理解できたとき、その怖さは大きな存在感に変わる。だからこそ、「本当に怖い」存在でなければならぬと思う。そのことで、誉められることが「大きな喜び」となれば、誉められよう（認められよう）と努力するのだと思う。

成長期である小学校時代に、先生に認められようと必至に努力しなければ、大人になって自ら真剣に努力しようとすることができるのか。この時期にこそ努力した結果を認められ、誉められる喜びを味わうことが必要だ。

そんなことを思うと自分の子供には、いろいろな経験をして欲しいし、やってみることはできる限り経験させたい。裏を返せば親として精一杯誉めてやれる機会を子供につくって欲しい。その経過では親として厳しく接していききたいし、目標達成に向けた努力を自ら立てられるよう仕向けながら、

その達成への喜びを知ってもらいたい。できればその喜びをいつまでも脳裏に焼き付けられるインパクトのあるものを経験してもらいたい。このことは、教科書以上に大切な教育だと確信している。

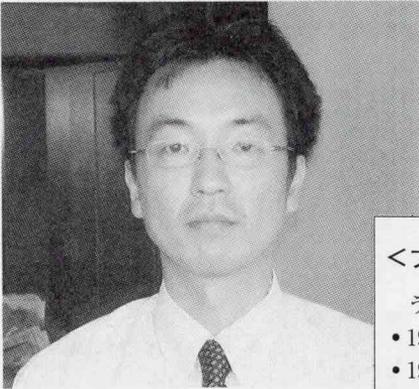
く 一歩を踏み出すく

自信を持って行動すればなんでもできる。「経験しなければ自信が持てない」のでは、いつまでたっても「殻」の外へ飛び出せない。これまでの経験を如何に応用できるかが自分の中の永遠の課題だ。

国際化の流れに伴い、日本社会は急速に変化し続けている。これまで聖域として手をつけられなかった、つけなくても良かったことまで変化を求められる時代となっている。事の善し悪しを見極め、最善のタイミングで決断することが必要である。

自分のおかれた立場においても、めまぐるしく変わる環境の変化に対し機敏な対応を迫られる場面が多々ある。時間は解決してくれない。手を拱いては、手遅れになりかねない。流れに巻かれることなく、今すべきこと“を的確に把握し、最善のタイミングで決断ができる精神力を築くためにも、失敗を恐れず、まず「殻」の外に飛び出すための一歩を踏み出す。子供に対する期待とともに、自身にあらためて活を入れていきたい。

五 円 玉



アイシン精機株式会社

海野 孝宏

<プロフィール>

うんの たかひろ (36才)

- 1967年 三重県四日市市生まれ
- 1990年 生菓子製造販売会社へ入社
- 1998年 半導体開発製造販売会社へ入社
- 2003年 アイシン精機株式会社へ入社
人材・安全衛生部 配属

<家族> 妻・長男(9才)

<趣味> スポーツ観戦、読書

子供の頃、おばあちゃんと近所の神社にいくと、おばあちゃんのお賽銭は決まって五円玉であった。「ご縁（五円）がありますように」ということらしい。ただ、少年時代の私は「ほんとうはおばあちゃんのお小遣いが少ないからではないのか」とか

「お賽銭をケチって、神様が怒りはしないか」など、妙に心配したものである。（もちろん、そんなことはなかったのだが）

産政塾に参加することになった時の私と言うのは、まだ入社11ヶ月頃である。というのも、私は2回目の転職、現職のアイシン精機は自身3社目の会社であり、まだ慣れるのにやつとの状況だった。産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」ということなのだが、「殻」というものを全く意識できないような精神状態ではなかった。最初、感覚的に「自分のような入社間もない人間が行くところではないのではないか」とか「お断りした方がよいのではないか」などと思っただけだ。

しかし、周囲から勧められるうちに、こう思い直した。「アイシン精機に入社できて、こんないい機会を得た。第一、知り合いが増える（ネットワークが広がる）ことは全く幸運の上ない。以前、どこかの大統領で『知恵は優秀な部下から借りるので、大丈夫です』と言った人がいたらしいが、こういう借入先（知り合い）だったら、いくら多くてもいいだろう。自己破産することもあるまいし」と。

いざ、開塾式の段になると、やはり心配が先に立つものであったが、メンバーにもめぐまれ、すぐに打ち解けた。いや、正確にいうと「打ち解けた」というレベルのものではなく、まるで、「古い友人」と久しぶりに会ったような感じであった。メンバーの方々のおかげで、何とも好スタートを切っ

たと実感した。

産政塾では、勉強する企画を班のメンバーで考えなくてはいけない。私の所属するC班で、メンバーの一人が「自分が聞いて、とても感動したカリスマ体育教師の話を是非みんなにも聞いてもらいたい」と熱く語っていたのに、びっくりした。「自分はここ数年素直に物事を考えたことがあっただろうか」と自問自答した。最近何かテクニカルなことばかり考え、自らの思いというものを考えたり、表現したりすることがなくなっていたせいだろう。

ちなみに、私もある企画を考えたのだが、その過程は前述の彼とは随分趣きの違うものである（考えた場所は産政研に向かう愛知環状鉄道の中だった）。自分が企画を進めることになったときのことを考えると「土地勘やツテ（友人）がある方が楽だ。」と考え、そうなる。「自分が学生時代を過ごし、親友のいる「神戸」しかないだろう。」「やはり神戸なら「地震」だな」と。テーマはなかなか重いとところにたどり着いたが、自分の企画をどうしても実現しようという意志は全くなかった。まるで夏休みの宿題を8月の終わりごろに、何とかしのごうとしている小中学生時代と変わりなく、全く不純な心構えである。

こういうとき、熱意に勝るものはない。C班は「カリスマ体育教師」の話を伺うことになったが、講師のスケジュールと費用が問題となった。「そんなときは、地震保険でいきましょう」という私のオヤジギャグはまったく不謹慎であったが、結局のところC班の企画は、講師のスケジュールの関係で、この地震保険給付を受けることとなった。

段取りになると、確かに、私が神戸の親友から地震に関するいろんな施設の紹介を受け、その中か

ら「人と防災未来センター」をメンバーに紹介したが、結局私は言い出しただけで、実際のところ、メンバーの方々にいろんな手配をしていただいた。本当にこんなに頼りっぱなしでいいのか、少々心配になったが、結局、私は自分に都合よくメンバーに勝手に感謝し、当日の懇親会にそのエネルギーを温存することにした。私がよくやる心の整理法であり、常套手段である。(実際の懇親会は、某労働組合のY氏と私がエネルギーを温存しすぎてしまい、塾生の皆さんの空気を考えるとかなり暴走気味となったが、何となく皆さんが楽しそうだったので、まあこれはこれでよかったものと、これまた勝手に解釈し、自画自賛している。よく他人から「おめでたい」と言われるのは、このせいかもしれない)

当日は、私以外のメンバーの尽力と事務局の方のご支援により、つつがなく行程を終えた。センターで聞いた被災者の体験談には、グッと来るものがあつた。というのも私は学生時代4年間神戸の御影というところで過ごしたが、震災によって、私の知っている御影は消えた。震災後、しばらくして友人から震災時の様子と混乱振りを聞いた。友人は「自分は戦争というものを知らないが、戦争ってこんな感じなのかと思った。たぶんお前が御影のアパートに住んでいたら、死んどつたやろう」と……。センターでの被災者との話を聞きながら、友人の話が重なってくる。センターでの被災者の話で特に印象に残ったのは、被災者同士での助け合いの大事さである。具体的には仮設住宅に住んでいる人の表札をかまぼこ板でつくり、仮設の人に感謝されたことで、心の張りを少しずつ、取り戻していくというものである。自分が誰かの役に立っているということ、またそう感じられることが、自らの心のキズを少しでも癒してくれる妙薬となるのだ。人間というものが、いかにちっぽけなもので、

またそうであるからこそ人との関わりがいかに重要かを「震災」という自然からの強烈な試練の中から、この人は見出だされたのだろう。

また、企画の中でディスカッションの時間があり、様々な意見が出された。私が強く感じたのは、その意見の中身というより、人によって感じ方は千差万別だということだ。これは後の企画でも思うのだが、思考や感覚というのは人によって、本当に違うのだ。例えば、他の班の企画で北海道・雪印乳業を見学した際、厳しい会社状況とそれに伴う対策について、伺った。塾生からは「事件前の会社の風土やその体制の不思議さ」や「会社の見通しの甘さが信じられない」などといったコメントを聞いた。しかし、私は以前の会社では通信（IT）業界で厳しい会社対策も経験してきたせいかな信じられないというより、何となく感覚的にわかることが多かった。（特に通信業界でITバブルがはじけることを見通した人は、いなかったと思うので）

よく人は「普通」なのに、あの人は・・・と口にする。概ね、他人の噂話をするときに使う常套句である。私も例外ではない。しかしこの「普通」に、何か根拠はあるのだろうか。自らの人生で得た数少ない経験とかなり狭いネットワークから何となく「普通」と思っているだけではないか。確かに社会生活をする上で一定の常識は必要だろう。しかし「普通」Ⅱ「常識」と決めつけることは危険だなと感じた。なぜなら「普通」は人によって違うのだから。けれども、実際の自分の行動はというと、「普通」が違うということを他人に知られるのが恐くて、「この人の話はちよつと違うよな」と思っても、とりあえず微笑とともにわかったようなわからないような顔をして、話を合わせてしまっている（YESでもNOでもない）。これが処世術なのだと自分を勝手に納得させている（処世術と

いうものをすっかり勘違いしているのだろう。私は)。これまで過ごしてきた人生が全く違うのだから、意見が違って当たり前なのに、ムラ社会的日本人の悲しい性かもしれない（ムラ八分の恐さと言うのでしょうか）。しかしグローバルな視点が求められる昨今である。日本の「普通」でさえ狭いではないか。やはり自分にとって「普通」でない感覚を堂々と受容すべきなのだ。違うことを認めるといった方が適切かもしれない。自分と違ったある感覚を知ったとき、それを一つの出会いと捉え、自らの感覚を広げていく。膜がどんどん広がっていくような感じで……。

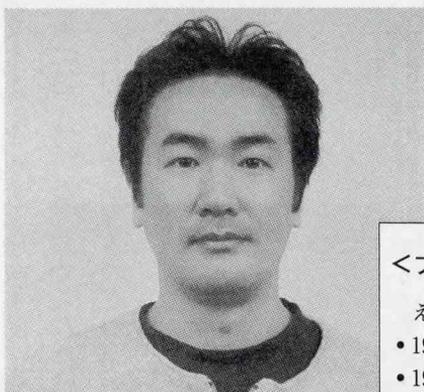
かくのごとく考えると産政塾のテーマである「殻の外へ……」の「殻」は、この「普通」ではないだろうか。閉塾式の際のディスカッションでも感じたことだが、1社に10年勤め上げた人の感覚と私の感覚は何となく違う。具体的に示すことは困難であるが、私が感じたことのない、同一企業風土の中で繰返し積み重ねてきた強い思考、感覚というもの、それを本人自体は「殻」のように感じているのは確かなことのようなのである。私には感じ得ないものである。

振りかえってみて、今、自分は会社の中で「普通」が違う存在かもしれない。それを周囲の上司、同僚の皆さんの度量、あたたかさによって、カバーされていることに、自分は全く気づいてこなかったような気がする。自分では、自分が周囲に気を使っているような気分になっただけで、本当は全く周囲の感覚を受容してこなかったのではないかと反省している。不遜ここに極まれりといったところである。それに引き換え、周囲の方々には私の違った「普通」を受容していただいている。そう思うと周囲の皆さんの方が日々「殻」を破っているのかもしれない。これからは私も、日々、周囲の方々、ご縁のあった方々に感謝をしつつ、「殻」を破りながら、同時に自らの知識を高めていかなければ

ればならないだろう。人間は、感覚が千差万別な他人と関わって、社会を形成し、生活している。当たり前と言えば当たり前のことだが、私は人間が暮らしていく上での原則をすっかり忘れてしまっていた。これは違った感覚を認め合った上でベスト（あるいはベター）な解を求めていく、というかなり難しい課題があることも同時に意味しているのだろう（人間関係の難しさに通ずるかもしれない）。この原則を「産政塾」という機会、ご縁をいただいて、気づかせていただいた。そんな機会を作っていたいただいた会社、上司、同僚はもちろんのこと、事務局の方々のご尽力に感謝の気持ちでいっぱいである。そしてこのご縁は、いろんな偶然のご縁が積み重なった上でのものであり、その「偶然」を与えていただいた神様にも感謝とあったところだろうか。

今度、家族といっしょに、近所の神社にお参りに行くことにしよう。お賽銭は、もちろん「五円玉」である。

「拘りを持って」



松坂屋労働組合

越田 弘 幸

<プロフィール>

- えちだ ひろゆき (34歳)
- 1970年 山口県生まれ
 - 1993年 (株)松坂屋入社
四日市店家具・インテリア・家電売場配属
 - 2001年 名古屋店スポーツ用品売場に異動
 - 2003年 松坂屋労働組合名古屋支部書記長 (専従)
現在に至る

「家族構成」妻、長男 (5歳)

「趣 味」スポーツ (その割に体重が増え続け、着る服がないのです)

いよいよ産政塾の卒業論文ともいうべき「産政塾誌」を作成する時期である。しかし、そのときには既に「提出期限」が目の前に迫っていた。与えられた原稿の量は「4000字」もあった。ところで「4000字」ってどのくらいの枚数になるのだろうかとまじめに考えた。パソコンであればA4で2枚半。「なんだ！思っていたより多くないな。」

(私が事務局であれば) だったら、早く書きなさい！

△はじめに▽

「殻の外に踏み出そう」という産政塾テーマから私がイメージしたことは、「今までの自分の世界・発想から、大胆に踏み出す」ということであった。しかし、自ら「殻」を破ることができる人はよほどの人物であり、おそらく私を含む多くの人は職場や生活環境の変化など外的要因によってな影響を受け、変わっていくのではないだろうか。その中で、一度自らの34年間を振り返ってみて、どのような環境変化で今日に至っているのか見つめ直してみることにした。また、産政塾のテーマとして自ら掲げた「拘りを持つ」ということに対して整理してみようと考えたのである。

△幼年期の拘り▽

幼稚園の頃までの記憶はあまりないが、何かに拘って没頭するタイプではなく、極めておっとりし

ていたとのこと。運動会の徒競走でも常に最後尾をのんびり走っている子供だったようである。また、体もあまり強くなく、どちらかという内向的で家の中で遊んでいることが多かったらしい。(現在長男は5歳であるが、幼稚園に行くことが楽しくて仕方がない。遊び疲れて家に帰ると気絶したかのように寝ている。妻に似たのだろうか。)

しかし、小学生になって間もなくして、父親に買ってもらった「野球のグローブ」が、結果として大学4年まで運動漬けの毎日を送るきっかけとなり、少なからず今日までの人格形成に影響していると思っている。

△少年期の拘り▽

小学校に行き始めると、内向的だった性格も好きな野球を通じて外向的・積極的なものに変わっていった。なぜなら、野球というスポーツは一人ではできないからであった。必ず友達を見つけては外で遊ぶようになり、毎日10人以上の「がきんちよ」が日暮れまで校庭で遊んでいた。(今はそのような光景をあまり見かけないので、寂しいですね。)また、好きな野球のためなら、場をわきまえず乗り込んでいった。当時、家の前が高校のグラウンドで、そこで高校生が体育の授業でソフトボールをやっていると、グローブとバットを持って仲間に入れてもらった。今思い出すと恥ずかしいですし、迷惑な話である。

このように野球好きであったので、当然地元の少年野球チームに入団した。しかし、このチームは

上下関係もなくアットホームなチームであったが、とにかく弱かった。今思うと、好きな野球だから継続できたし、自分なりに努力・練習して精一杯頑張ったと言い切れるが、負けて当たり前前のチームの中で勝負に対しての「拘り」を持つことはあまりなかったような気がする。このことは現在においても何らか引きずっている気がしてならず、産政塾の入塾に際して、自らのテーマを「拘り」として掲げ、その「殻」を破るために参加させていただいたことをあらためて思い出している。

その後、中学2年半ばになって、私の人生の中で「転校」という大きな転機を迎えることになる。父親の転勤に伴って住み慣れた場所（当時神奈川県）から三重県四日市市へ引っ越すことになった。今思えば、愛する妻との出会いや、現在勤務する会社との接点に繋がるものとして、重要な転機になった訳である。

∧ 学生時代の拘り ∨

四日市市に引っ越してからは、学生時代、独身時代をここで過ごすことになる。

高校は幸いにも第1希望の地元県立高校に入学することができ、当然のように野球部の門をたたいた。この野球部は過去に夏の甲子園で優勝した輝かしい実績のある野球部である。しかし、一応進学校と呼ばれるだけあって授業のレベルについていくことも大変であった。「文武両道」という言葉をよく聞くが、2つのことを同時に頑張ることができない私は、おのずと野球の方に偏っていった。3

年間の結果は県ベスト8が最高であり、残念ながら甲子園への道は遠かったのである。

高校野球も一区切りつき、いよいよ大学受験である。ここであることをまじめに考えた。この時点において、大学でも4年間野球をすることはあらかじめ決めていた私は、本来の大学受験にむけた練習台としてスポーツ推薦に応募し力試しをしてみようと思ったのである。その結果幸いにも「合格」し、当初からの希望校の一つでもあったのですんなり入学することを決め、私の大学受験は10月であっけなく終わってしまったのである。

大学に入学すると野球と少しの勉学に励む傍ら、中学・高校と「坊主頭」だった反動からか、遅咲きながらファッションに興味を持つようになった。皆さんも例外でないと思うが、「DCブランド」を求めて毎日アルバイトに明け暮れたのである。ここでの興味が後に「百貨店で働きたい」という思いに繋がっていった。名誉のために言っておくが、決して「女性が多いから」という理由ではない。

△社会人としての拘り▽

配属先は家具・インテリア・寝具・家電などのリビング全般であったが、幅広いアイテムの商品知識を学び、それを生かして接客することは緊張感もあり楽しかった。百貨店に関わる者として当たり前のことであるが、接客を通じて自分を頼りにご来店下さるお客様を持つということは、何事にも増して嬉しいものであり、10年間の売場経験は現在の組合専従としての業務にも大いに役立っていると思う。

そんな私も現在、労働組合の専従になり1年が経過した。きっかけは入社して間もなくしてお世話になっていた先輩から、「自分も執行委員をするから、お前もやれ」といったあたりがちな話である。当時はお恥ずかしながら組合活動がどのようなものかまるで知らなかった。そんな中で専従を受けるにあたって、父親に報告した際にもらった言葉が印象に残っている。「今までお客様のために頑張ってきたことを、これからは組合員のために精一杯頑張らなさい。」という言葉であった。この言葉のとおり、組合専従という今の立場が私の職業人生の中で有意義なものになるよう、「組合員のために」という言葉に「拘り」を持って職務を全うできればと思っている。

△産政塾後の拘り▽

ここまで簡単ではあるが、私の経歴における「拘り」、今後の職業人生の中の「拘り」について記してきた。

しかし、参政塾に参加したことで考え直すものもあった。その一つが、私たちのグループが企画した「保父体験」時にはママの気持ちになつてゝ」である。その中では、保育園を訪問し、私の長男と同年齢の園児と話をしたり、遊んだりした。常に5〜6人のかわいい子供達に囲まれ、自分もまんざらではないと思っていた。しかし、よくよく話を聞いてみると「パパがあまり遊んでくれない」という子供達の話や聞く中で、その反応で私たちと必死になって遊んでいるのではないかとも感じた。今までも家族の時間、子供との時間は大事にしてきたつもりであったが、あらためて反省の余地が

あると思う、「家族への拘り」として何ができるのだろうかと思ひに考えた。「幼稚園のお迎えは無理だが、疲れて寝てばかりいないで朝の送りの回数を増やそう」と決めた。まあ、そんな小さな事からであるが頑張ってみよう。

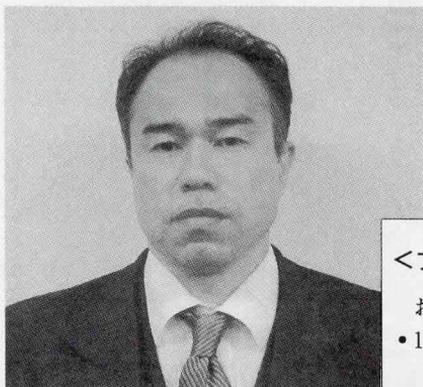
気がついてみると、いつの間にか「4000字」を超えていた。

塾長および事務局の方々、15期生の同期の皆さん大変お世話になりました。また、各グループの企画におきましても、この場では書き綴れない様々な気付きの場を与えてくださいました。この場を借りて御礼申し上げます。

「あっ！」一つ重要なことを忘れていた。今月の私たちEグループの定例懇親会の幹事であることに気がついたのです。早速ペンを置き、受話器を取らなければ。

というわけで、このメンバーの付き合いはまだ始まったばかりなのである。

産政塾を振り返って



アラコ株式会社
大河原 宏樹

<プロフィール>

- おおがわら ひろき (38歳)
- 1965年11月 東加茂郡下山村生まれ
('05年4月に合併で豊田市)
 - 1993年2月 アラコ(株)入社
 - 2003年4月 人事部配属 現在に至る
 - 2004年10月 トヨタ紡織 人事部人事総括室
に配属 現在に至る

<家族構成> 妻、長男、次男

<趣味> スポーツ全般+観戦、ドライブ、宝くじ

閉塾式のときに塾長がテーマについて、いろんな話をして頂き、正直私自身にとって「この2〜3年は本当にその重要な時期に当たる」と感じている。人生の転機とは、そうあるものではなく、通常なら進学・就職・結婚、そして子供誕生、やがて定年を迎えるという人生であろう。

しかし、今回更なる転機が訪れ、正直とまどいと不安が先走った。10月1日で所属していたアラコ株式会社が、車両部門がトヨタ車体と統合し、内装部門（部品）がトヨタ紡織として豊田紡織とタカニチと合併した。私は、部品の方を選択させて頂き、トヨタ紡織にお世話になることになった。（昨年度中にわかつていたが、いざ時期がくるとバタバタ状態が現実である。）

今、まだ新天地で1週間しかたつておらず、勤務先と仕事内容も変わり、まだ慣れない環境の中で不安を抱きながらこの文章を書こうと思う。やはり、今、殻を破る一番の近道は、環境に慣れて仕事に自信が持てる事だと思う。しかし、現状ではまだ、時間がかかるだろう。

今回、産政塾に参加して「殻を破れた」とは言わないが、自分の中では、人生の極わずかな半年間であったが、貴重な経験・財産を得られたというのは紛れもない事実である。

その思いを産政塾に参加してからの事を振り返りながら語ってみたいと思う。

はじめに

1965年11月三河の軽井沢と言われる「下山村」で生まれ、中学までは、常に野山を駆け巡り、

足腰が自然と鍛えられていた。その結果、小中学校と「校内運動会の徒競走とマラソン大会」では、負けたことがなく、それだけは誇れる自分でいた。しかし、それとは裏腹に勉強は、全くせず、親を呆れさせて、必然的に行く高校（三好体育コース）は決まってしまった！高校では、意外や意外に、3年間1回も宿題が出たことがなく、居心地のいい学校生活を送っていた。しかし、ここからが、人生の奈落の底か？今の自分が存在する。

そしてアラコに入社して10年（途中5年間は、三重県にある某企業に在籍し、陸上付けの生活）経ったが、その間、趣味の延長戦上である陸上部を7年、以後、福利厚生半年、豊田市議選筆応援半年、技能系教育を担当し、昨年、12月に産生塾の話を上司よりいただき、一体何なの？何をする塾なの？と疑問に思いながら、参加することになった

当日、かなりの緊張と不安を抱きながら参加し、メンバーの顔を見たときに、引っ込み思案な自分がここにいると感じた。後に自己紹介があり、皆さんの「紹介ぶり」を伺い、圧倒され、良くこまで隠し事なしに「自分の事をおもしろくおかしくPR出来るな」、何と言う恐ろしい「口達者な集団だ・・・！」と、あつげに取られたことが今でも鮮明に思い出される。

その後、どういう事を実施するか？判るにつれ毎回参加し、全員と交流し、必ず自分を覚えてもらうぞ。と強い思いを持ち、開塾式を終えた。

△第2回▽「阪神・淡路大震災記念館・人と防災未来センター」

実際に今でも1995年1月17日の当日のことは鮮明に覚えている。自宅（三好）で寝て起きる寸前に、今まで体験したことのないくらい大きな揺れであった。震源地では、すごい悲惨な状況になつてゐるとは想像もつかなかつた。体験者の方のお話で、「備えあれば憂いなし」いざという時の為に、枕もとに防災グッズを置いて寝ているが、それでもいまだに恐怖に怯えることがよくある。この言葉が、とても印象的であつた。最近、天変地異が起るほど地震が多く、この体験により、自分の地震に対する心構えが変わつたのは事実である。

△第3回▽「地元のお国自慢」（愛知万博・中部国際空港セントレア）

まだ2会場とも完成前（7割方完成）の状態を拝見させて頂き、この不況な時代に万博を誘致し、名古屋空港（国内・国際）があるのに更に新しい空港（最新の設備が整い、見学するだけでも1日楽しく過ごせる施設でもある）を作る財政豊かな愛知県に在住する我々は、幸せだと感じた。ただ一つ気になるのが、万博開催にあたり、県職員の方の話やパンフレット等の内容で、テーマや目的がはっきりしていない事が気掛りである。

△第4回▽北海道の地域活性化の取組み（札幌ドーム・雪印乳業・北海道庁）

この企画が実現出来るかどうか？心配したのは、参加者全員の気持ちであつたのではないか？

1日目…札幌ドーム最新鋭の施設（野球とサッカー併用球場の維持管理）説明を受けながら見学し、さらに日本ハム誘致のプロ野球裏話を聞けて、ラッキーと思つたのは、私だけではないと思う。

2日目…雪印乳業の再建の苦労と生々しい話と北海道庁職員の丁寧な対応と観光に頼らざるを得ない経済状況を聞き、そして移動中にタクシーのおじさんが、「どこから見えた」↓愛知県です。「いいね」、日本で一番恵まれた所だね」と言われたことが、自分の中で一生、忘れられない言葉となった。

△第5回▽保父体験（ママの気持ちになつて）

これは、わがEグループが企画した内容である。男性ばかりのため、片山さんの一声が起爆剤になり「是非、男性の皆さんに貴重な体験を！普段では味わえない子供たちとの触れ合い保父さんの立場で体験してみるのはいかが？」で話は、まとまった。

この企画を実現するにあたり、現地（竜神保育園）に伺い、3回程グループで事前打合せを実施した。当日、園児（0～6歳）を目の前にし、実際に触れ合う中で、園児との接し方（実際、独身の方も見え、オムツ替え・授乳体験、一緒に遊ぶ）で普段とは違い、かなりの神経を使い、疲れ果てたのは私だけではないでしょう。しかし、子供と正面からぶつかり、同じ目線で対等に誠意を持つて接することで子供に対する認識が変わつたのではないかと考えるほど貴重な体験であったことは言うまでもないはず。（小学校1年の子供がいるが、妻に任せっぱなしで、今日のような接し方をしていれば、もう少し素直な子に育つたかな、と痛感した）

トヨタ自動車の保育施設である「ブルーブランド」を見学し、やはり、最先端を行っている企業のあり方（女性の仕事と子育ての両立）を感じ取ることができ、参考になったのは、皆さんが共通の認識ではないか？そして打ち上げ時にEグループのメンバーでお疲れさんといひ乾杯したときの安堵感の表情は、今でも鮮明に覚えている。

△第6回V明治村の………

実は、業務の都合で最初から参加出来ず、当初に決めた目標が途切れ、ショックであった。途中参加で会場へ向かう時にアクシデント（竹川さんの電話が……）があり、ダブルショックとなったのは、第6回参加者の皆さんが、ご存知のとおりですが……！

△第7回V閉塾式

今回、閉塾式に参加して皆さんの顔を見て感じたことは、「これでもう最後か？」とすごく切ない気持ちになった。業務の都合等もあり、全員の顔が最後に揃わなかったが残念であった。全てが終り、帰る時にすごく寂しいな、と思うと同時に最後にこの塾誌のことを考えると憂鬱に思ったのは、私だけではないと思う。

△最後に▽

塾に参加し、15期メンバーと知り合えたことは、私の中で貴重な財産である。今後も1回／年くらいは同窓会を開き、顔を拝見したいと思う。(決して、「ハゲ」ましてあげる!とは、言わないで下さいね)

今回のテーマで自分自身「殻を破る」ことは、難題であったが、塾で企画し、体験する中で自分なりに物の見方・考え方が、いろんな業種の方と接し、触れ合う中で変わってきたように思える。今、自分は環境の変化という大きな節目にいる。これを機会に新たな自分を発見できる可能性の高い時期であり、いろんな事にチャレンジして行きたいと思う。今年で39歳、来年はやはり「不惑の40↓殻を破った!」と、言えるような自分でありたい。

このような貴重な体験の場を与えて頂いた産政塾の塾長・竹川さん、私を人選して頂き、快く送り出して頂いた職場(旧アラコ人事部)上司・同僚の皆さんに心から感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。



家族は、私にとって、大切な存在であり、明日への力の源である。挑戦しつづけます!!

『殻』は破り続けるもの、 それが私の人生



全トヨタ労働組合連合会
大橋 一之

<プロフィール>

おおはし かずゆき (34歳)

- 1970年9月 刈谷市生まれ
- 1991年4月 豊田紡織(株)入社
- 1991年7月 経理部配属
- 2002年9月 全トヨタ労働組合連合会へ派遣
現在に至る

<家族> 妻・息子1人

<趣味> ゴルフ (今後熱中予定?)

【はじめに】

今回産政塾に参加させてもらい、普通の社会人生活では出来ない貴重な経験・体験をさせてもらいました。テーマである「殻の外へ踏み出そう」については、私自信今までの人生を振り返るよい機会でもあり、更に今後、私の人生にも繋げらればと思望んで取り組んできました。そういう意味では普段慣れ親しんでいる職場の中からのスタートではなく、今回の産政塾と言う新たな集団で取り組んでいくことは、始まるにあたり大きな不安もありましたが、その分今回のテーマには適していたのではないかと思います。(数人ではありましたが今の仕事を通じての知り合いがいたことは心強かったです) 今期塾生二十五名を五つのグループに分け、企画を立案、実行していく上で、まずは自分たちのグループでの論議、交流を図り、最後には二十五名の結論が出せるよう取り組んできました。

【私の「殻」】

第一回目の産政塾(開塾式)に望むにあたり、私の「殻」は何だろうと考えました。勿論「殻」が見えるものではないですし、個人によってさまざまだと思いますが、私なりに考えてみました。自分の過去、性格などいろいろ振り返って考えてみると学生の頃を思い出しました。あまり本を読むことをしなかったせいか、読解力・表現力に欠けていて、なかなか人前で話しをすることを得意としませんでした。普通に友達と会話をする時には大きな声でいつまでもしゃべっているのに、改まった場所

では出来なかつたような気がします。人それぞれの性格はあると思いますが、私の中ではそんなことがどこか引つかかるものがありました。そしてその引つかかりは、いまでも存在しています。その他にも社会人になつてからも気付いたことがあります。それは自分に關係すること、例えば担当している仕事、趣味、最近の話題などの話については、相手の言うことはよく分かり、自分の意見も相手に主張するが、自分に關係がない、興味がないとしゃべらないで引つ込んでしまう、またその場を去つてしまう自分がいることが頭に浮びました。

そのようなことを思い出し考えてみると、私にとつての「殻」とは、人前で話すことや人とのコミュニケーションと言つたところにあるのではないかと感じました。

【「殻」を破るには】

「殻」を破り人間的に大きくなりたい、成長したいと思ひますが、そう簡単には出来ません。ただ重要なのは私の場合、私自身の気持ちにあることです。ですがその気持ちは身近にあります、大変大きなものであります。

前述にもありますが、私の「殻」を破ろうとするなら、今からあらゆる情報を頭に叩き込んで知識を高め、どのような状況でも、誰とでも会話出来るようにすればよいですが、そんなことは出来ません。そんな問題にぶつかった時に、昔職場で仕事をしていた時のことを思い出しました。上司へ提出する資料が百点の出来だつたとすると、更に二十点分の仕事は自分の情報として持つていたことです。

勿論上司とのやり取りの中で必要であれば説明をしましたが、不要の場合もありました。でも全く違う場面で使うような場合もありました。言い替えれば、必要なことは自分が納得できるまでとことんやり理解する。そうすれば思わぬ場面でその身に付けたことが役に立つとこともあると言うことです。まずはそういうことから始めてはと感じ、今後意識していこうと思いました。あとは自分の意識喚起だと思えます。この思いだけあれば、相手の話しを聞いていけば、少なくとも自分の意見は言えると思えます。ただやっぱり第三者の方と始めましてといった場合は、会話、コミュニケーションを図るには知識、慣れ、センスと言ったものがある程度必要あるのではないかと思います。そういう意味では、最初の「殻」は破れにくいかもしれないが、あくまできっかけに過ぎないと感じ、また、一度破れば終りと言う訳でもなく、それから薄い「殻」かもしれないが、何度でも破り続ける必要があるのではないかと私は思います。

【いろんな「殻」】

誰もが自分自身についての「殻」を考えたと思いますが、振り返ってみると今回の企画の中にも、ある意味、あれは「殻」を破ったことなんだと気付かされたことがあります。

それは雪印乳業で説明を受けた時です。その中で食中毒事件、牛肉偽装事件を起こした際に、企業信頼の回復を図るため、社外の視点を受け入れることや、全社員へのアンケートや家族への手紙など勇氣あるあの行動は、ある意味雪印乳業にとって「殻」を破ったのではないのでしょうか。その懸命な

努力があつた結果、企業再建を果たし、現在に至つてゐるのだと思ひました。

【労働組合に必要なこと】

私は二年ほど前に自分の会社から縁あつて全トヨタ労働組合連合会へ派遣されてきました。勤務地、仕事の内容、職場の人達が全く一転してしまい、ある意味「殻」を破らざるを得ない状況にあつたのではないかと思ひます。今となつては破れたかどうかよく分かりませんが、日々仕事に励み、職場の仲間と仲良く過ごすことが出来ているような気がします。ただ言えることは、前の職場と違つて今の職場は人と接することが多く、その接することが重要な職場であることです。それも相手は加盟組合の委員長であつたり、場合に依じては会社側の社長であります。それ以外にも仕事で付き合いのある業者の方など様々な人達と話す機会があります。そう考えるとやはり先ほどの話にもありますが、「殻」を破り続けていかなければならないのだと感じています。

私の中では、人生「殻」を破り続けていくものであり、その「殻」は仕事以外にもプライベートや家庭などどんなところにも、どんな形にも存在するものであると感じました。結局そう言つたことに自分自身が縮こまらず、生き生きと接し過ぎていくことが「殻」を破る、破り続ける事ではないでしょうか。そして人間に成長して行くのではないかと思ひました。

【最後に】

企画全般を通じて感じたことは、なかなか全員参加ができなかったことです。二十五名が一度に揃うことはなかなか難しいことだと思えますが、産政塾の塾生となったからにはしっかりと企画に参加してもらいたい経験・体験した方がよいと思えます。第十六期の企画の日程設定時は十分配慮して実施していただきたいと思います。(なかなか全員参加は難しいですがお願いします)

最後になりますが、第十五期産政塾の企画に付き合っていたいただきました小田桐塾長、事務局の竹川さんに、感謝しています。本当にありがとうございました。〃産政塾バンザイ〃

第15期産政塾を振り返って



豊田市役所

片山伸子

<プロフィール>

かたやま のぶこ
愛知県名古屋市生まれ

- 1994年4月 豊田市役所入庁
環境部環境水質センターに配属
- 1997年4月 環境部環境政策課に配属
- 2000年4月 社会部子ども課に配属
現在に至る

<家族> 夫

<趣味> おいしいものを食べること
コンサートに行くこと

運良く、私は第15期産政塾の全ての方に出席することができました。この塾誌のレポートをもつて、自分にとつての産政塾の活動を振り返つてみたいと思います。

◆ 第1回 開塾式

苦手意識のある自己紹介……。私は緊張しながら小さい声で話すのが精一杯でした。他の塾生のみなさんは、さすが各企業や団体から代表としていらつしやつた方ばかり。みなさん堂々と、個性豊かに上手に自己紹介されるのに、すっかり感心した初回でした。

各グループで今後の企画を相談した後、企画案の発表がありました。他のグループも興味深そう企画ばかりで、今後の活動がとても楽しみに感じられました。

◆ 第2回 防災とボランティア

被災者ボランティアガイドの方のお話が心に残っています。お話の最初に、深く頭を下げ、「震災のときは、ボランティアや物資など全国の皆さんから多くのご支援いただき、本当にありがとうございます。」とおつしやつたことが忘れられません。80歳超とは思えないお元氣な話し振りで、現役でボランティア活動をしていらつしやるとのこと。「ボランティア活動をするることによって自分自身が助けられているんです。」という言葉に、ボランティアの意義について考える機会となりました。

私たちの住む地域では、東海・東南海地震の発生が予測されています。自分や家族、身近な人のいのちを守るため、個人個人が、災害への備えと心構えを持つことが大切であると学びました。また行政の立場の人間として、災害が発生して何千何万人という被害が出たとき、行政の限られた力の中で、緊急時の対応や復興への取り組み等は最大限どこまでできるだろうかと切実に考えさせられました。

◆第3回 身近な大事業

2005年愛知国際博覧会と中部国際空港セントレアは、どちらも地域の一大事業。最近TVや新聞等でもよく取り上げられるようになりました。その建設最中の様子を見られるという貴重な企画であり、自分の目と足で実地を見学したことで、地域の一大事業をとっても身近に感じられるようになりました。

いよいよ開催が近づいてきた国際博覧会の会場は、施設等の建設が本格化しており、完成して来場者が入ったときの様子を思い浮かべてみました。開催期間中にはぜひ何度か足を運んで、今の風景と開催中の景色とをこの眼で比べてみたいと心に決めました。博覧会の開催は、これをきっかけに日本や中部地域の魅力を広く世界に発信するチャンスであり、地元として大いに盛り上げていきたいです。セントレアは、魅力的なネーミングや、建設にあたって費用を抑えた事例等、アピール点がたくさんあると感じました。この空港が稼動すると、中部地域と世界が非常に近くなって、中部産業経済にとって大きなチャンスとなるという実感を強く持ちました。

◆第4回 地域の特徴

札幌ドームでは、他に類を見ない構造の芝のシステムや寒い気候の中での天然芝の管理、プロ野球のフランチャイズ球団誘致のお話等を伺いました。関心を持っていた話題でもあり、最前線のご担当者のお話は、とても興味深いものでした。

雪印乳業では、厳しい会社の状況の中あたたかい対応をしていただき、非常に熱意あるお話をお聞きました。企業におけるコンプライアンスの意義を、自分の職場での仕組みと比較して理解することができたと思います。

北海道庁では、広い北海道における産業活性化の新たな取組みについて、幅広くお話を伺いました。北海道で様々なことを見聞きし、改めて中部地域の特徴というものを再確認することができたと思います。文化の異なる外国に行つて、自分の育つた日本という国の文化や歴史について改めて知ることがありますが、これと似た感覚でした。

また、直接行つたからこそ聞くことができた話がたくさんあつたと強く感じた企画でもありました。

◆第5回 子どもは社会の宝

わがグループの企画です。子どもたちが持つ未来へのエネルギーからは必ず何か感じることがあるという期待を持って望んだ企画でした。私は現在保育園幼稚園関係の事務を仕事で担当しており、実

際には事務仕事がほとんどで園児と接する機会はありませんが、自分の仕事と深く関連した企画になりました。

当日の竜神保育園では、私はカメラを持って全てのクラスを見させていただきました。各クラスで園児と接する塾生のみなさんの表情は、明るく楽しそうでした。次第に園児と仲良くなり、園児と一緒に水遊びする姿、大切そうに乳児を抱きあげる姿、たくさんのかわいい園児たちにかじりつかれている姿は、みなさんとても素敵で、企画グループの一員として大変うれしく感じました。

少子化の進行が懸念される現在、子どもたちの将来や社会の将来について考える機会になりました。受け入れてくださった竜神保育園とトヨタ自動車ぶうぶタウンの担当者のみなさん、そして何よりも子どもたちの真っ直ぐな瞳と明るい笑顔のおかげで、よい企画内容を実現できたのではないかと思います。

◆ 第6回 新しい視点

博物館明治村では、制約がある中で様々な新しい取組みをしていることをお聞きし、来場者回復を思う所長の前向きな熱いお話に感動しました。所長のお話を通じて、またミーティングでの塾生のみなさんとの意見交換を通じて考えた「自分が経営者の立場で考えてみる」という視点は、日頃あまり実践していないことだったので新たな発見でもあり、いろいろな立場で考えることの重要さを実感しました。

明治村へお邪魔するのが久し振りだったこともあり、貴重な文化財が集められた県内でも誇りとなるような博物館であることを再認識しました。

◆ 第7回 閉塾式

産政塾の期間は1月から8月の期間ということで、塾の開始前は比較的長い活動期間のように思っていました。が、いよいよ閉塾式を迎えてみるとあつという間に過ぎた気がしました。最後の活動日となるのが残念な気持ちでした。

◆ 産政塾を振り返って

5つの企画はそれぞれに心に残る感動があり、全ての回に参加することができたのはとても幸運でした。

産政塾の方針である「こちらから出向いて、直接会って話を伺う」ことによって、直接でなければ得られなかった感動や、直接だからこそ聞くことのできた話を何度も経験することができました。様々な情報をインターネット等ですぐに手に入れることができる便利な時代ではありますが、直接会って話すことの重要さを認識しました。各企画でお会いできた方々に深く感謝します。

産政塾への応募の際、私は申込みの動機の欄に「職場の枠を越えて交流することのできる貴重な機会と考え応募したい」と書きました。活動を終えた今、当初の自分の期待は100%実現できたと感じています。

産政塾の活動を振り返って、自分なりの表現で産政塾の特徴を挙げるとすると、

- (1) 異業種の同世代のメンバーと交流できる
- (2) 普段の仕事や日常生活では体験できない貴重な企画を経験することができる
- (3) 各グループで協力し合いながら、自ら企画を計画し、関係者への依頼、実施をするという経験をするができる

これから産政塾に参加される方がいらつしやるようなら、これらの点から、積極的に参加されて、ぜひたくさんのことを得ていただくようお勧めします。特に、女性の参加が増えるよう期待します。

私が現在の仕事に入って10年弱経ちました。市役所の仕事は社会の中でも特殊な立場の仕事であり、自分が職場的な考えに染まっているかもしれないと感じることもあります。塾生のみなさんや各企画での出会いを通じて、また多くの意見交換をした経験を通じて、自分の現在の立ち位置（仕事の面で、人生の中において、いろいろな意味で）というものを再確認することにつながったと思います。自分の中でのバランス感覚を維持していく一つの「ものさし」になっていく気がしています。

今回はなかなか得難いチャンスをいただいで、市役所という立場から産政塾へ参加することができ、このような貴重な機会を与えてくれた職場に深く感謝します。産政塾での経験は、自分の今後の仕事

の中で直接的、間接的に生きてくると思っています。ぜひとも継続して市職員が産政塾へ参加できるように願っています。

今回、産政塾へ私を快く送り出してくださった職場のみなさん、またサポートしてくださった人事課担当者の方、どうもありがとうございました。

塾長、事務局のみなさん、第15期の同期塾生のみなさんとは、楽しく充実した時間をともに過ごさせていただき、ありがとうございました。そして、これからもどうぞよろしく願います。

変わりゆく自分



中部電力労働組合

倉 沢 範 行

<プロフィール>

くらさわ のりゆき (35歳)

- 1969年 3月 長野県東筑摩郡山形村に生まれる
- 1987年 4月 中部電力(株)入社
長野支店松本営業所配電運営課配属
- 1988年 8月 長野支店松本営業所配電計画課勤務
- 1989年 8月 長野支店篠ノ井営業所配電課勤務
- 1992年 8月 長野支店茅野営業所配電課勤務
- 1994年 8月 長野支店長野営業所配電課勤務
- 1998年 8月 長野支店営業部配電課勤務
- 2000年 6月 中部電力労働組合 本部常任執行委員 現在に至る

<家族> 妻、娘3人

<趣味> ゴルフ、溪流釣り、格闘技観戦、
飲酒

△はじめに▽

第十五期産政塾のテーマはこれまで同様「殻の外へ踏み出そう」であった。

平成16年1月から8月までかけて行われた産政塾における各種イベントを通じて、「殻の外へ踏み出すこと」とは「自分が変わることに仮定したうえで、そのことにどんな意味があり、なぜ必要なのかを問いつづけてきた。

そんな自問自答のなかで私なりに至った考え方について、これまで経験した私自身のターニングポイント（そんな大それたものではないが）を例にして、少しでも確認してみたいと考える。

△幼年期・小学校時代▽

1969年3月、倉沢家の長男として生を受けた私は、初孫だったこともあり祖父母も含めた周りの人たちから大変愛されて育ったが、裏を返せば甘やかされて育てられており、保育園では3月生まれということも手伝って、女の子からいじめられるタイプの子供であった。

その傾向は小学校に行き始めてからもあまり変わらなかつたが、4年生になったときクラス担任の先生が変わったときに我が人生1回目のターニングポイントが訪れた。

その男の先生の頭は既にほぼ真っ白になっていたものの、ものすごいバイタリティーの持ち主で、声も大きく、当時はまだ珍しかった海外研修などにも頻繁に行かれており、インドネシアのコインなどを生徒たちにお土産として配ってくれたりしていた。

純真無垢な我々がその先生に惹かれるのに時間はかからなかった。

そんな先生の口癖が「男は男らしく、女は女らしく」であり、時折授業のなかで聞かせてくれるこれまでの先生の武勇伝（大学時代散々けんかしてきたらしい）にも刺激され、私はその年の学級委員長選挙に立候補した。

思い起こすに、言いようのないパワーが体の中から湧き上がり、「俺がいくぜ!! 勇気リンリンフルパワー!!」といった気持ちになっていたと思う。

同様に刺激された男子生徒も私の他に2名おり、3人で争うこととなったが、僅差で私が学級委員長に選ばれた。

これまでの人生における数少ない輝かしい思い出の一つであるが、この一件を通じて、夢と勇気があればなんとかなるということが、少し分かったような気がした。

△ 中学校時代▽

中学校時代の私は、特に不良に走ることもなく、小学校から続けていた野球をそのままやっている、どちらかというともじめな少年であったように思える。

そんな私が少しずつ変わってきたなと自分でも思えるのは、中学3年の野球部としての最後の大会が終わった頃からだったと記憶している。

どのように変わってきたかという点、今まで人と争うことなど大嫌いだった私が、強い男になりたくてなりたくて仕方なくなつたことであつた。それは思いだけではなく、実際に早起きして腕立て伏

せをしたり、ランニングをしたりもして、自分なりに体も鍛え始めた時期でもあった。いままで見向きもなかったプロレスのTV中継も見ようになり、特に長州力率いる維新軍団の活躍が毎週楽しみであった。

ここだけ話せば「なんて男らしいやつなんだ。おじさんも若い時には危険な頃があったんだよ。男にはそんなときも必要なさ。その気持ち分かるなあ。」と思われる真に武闘派のお父さんもお見えになるかもしれないが、私の場合はそんな格好のいいものではなかった。理由を話せば、同じ中学校の一つ年下の女の子が好きになり、全く振り向いてもらえないものだから、「強くなればおいらに惚れてくれるに違いない！そうに決まっている！」と単純でジャンボリーな田舎の中学生は考えたからであった。

しかしいくら田舎の中学校であっても、そんなにうまくいくはずがないのが、世の常の習いである。体を鍛え始めて数ヶ月後、自分でもかなりストロングになったのではないかと思えるようになってきたことから、意中の女の子に、思い切って打ち明けてみた。昼休みのホールを歩いていた彼女を見つけて、追いかけて打ち明けたのだ。「俺と付き合ってくれ！」唐突に切り出した私であった。自分ではこの言い方も考え抜いた末のものであり、男らしさを全面的に表現しているものと勝手に思い込んでいたし、当然彼女からは「うれしい」とか「よろこんで」なんていう返事がくるものと思っていた。が、次の瞬間彼女の口から出た言葉は思いもよらぬものであった。「やつだ、きらいなんだから！」そう吐き捨てたかと思うと一目散に階段をかけ上がって逃げてしまった。秘孔を突かれたように呆然とその場に立ち尽くす私があった。さすがにその日はショックを隠し切れなかったが、翌日には自分でも不思議なくらい晴れ晴れとした気分であった。「やるだけの事はやったさ。」という充実した

思いと「もつと自分を鍛えて、もつとカワイー彼女を作って、あいつを見返してやる。」そのとき俺を振ったことを後悔しても遅せーからな。」という若干ひねくれた思いが一つになって、大きな希望に変わっていたような気がした。

彼女に振り向いてもらうためにはじめてトレーニンングであったが、振られたあとも止めることはなかった。これまで数ヶ月間努力してきたことがもつたいなくなつたのだ。

中学校の卒業と高校への進学が見えてきたこの頃になると、高校に行ったら柔道部に入部することを密かに決意している自分がそこにいた。

△高校時代▽

工業高校（女性は全体の1/40しかいなかった）に進学した私は、中学生のときに決意したとおり柔道部に入部した。

これまでやってきた野球とは違い、なによりも体格がものをいう世界であった。

これまで少しばかり腕立て伏せをやってきたからといっても、柔道未経験のうえに60kgそこそこの私は、70〜100kg級の先輩たちに、入れ替わり立ち代り、くる日もくる日もぼろ雑巾のように投げ飛ばされていた（余談だが、投げられた時に軽い脳震盪を起こし、その日起こったことがしばらく思い出せないこともしばしばあった）。

また、新入部員も6人いたが、他の5人は柔道未経験者ではあつたものの、いずれも「おいどんは限りなく0.1t級でござす！」といった体躯の持ち主であり、私が最も弱いのは誰が見ても明らかだっ

た。

高校に入って最初の夏休みが終わったタイミングで、柔道の段を保有していない1年生全員が昇段試験を受けた。

結果は私以外の全員が初段に合格した。私はただの一勝もできなかった。

柔道場のなかでただ一人白帯を付けている自分が惨めに思えて仕方なかったが、「今度こそ」という気持ちに動かされて精一杯汗を流した。

そんな時、若干無理をしてしまったためなのか、練習中に腰をいためてしまった。

腰の治療をしながら、痛みを堪えつつ再度昇段試験を受けたが、やはり落ちてしまった。

試験の帰り道、くやしさもあつたが、腰の痛みの方が大きく、おじいさんのように体を折り曲げて、辛うじてバスに乗り込み、家路に着いた。

バスの中で「もう柔道はだめかな。」と思った。

家に着くと母がいた。「柔道をやめたい。」と母に言った。苦痛に顔を歪め、腰をさすっている私をみて、母は賛成した。体が心配だとも言った。

その夜父に柔道をやめたいことを話した。しかし父は断固許さなかった。「今後社会に出ればもつと苦しいことがある。一生おまえは白帯でもいいから、柔道が続けろ。」と言い放った。

結果して母も父の考え方に賛同するしかなかった。

こんなに苦しんでいるんだから、当然父は許してくれるものとはばかり思っていたため、正直面食らったと同時に、むしろように腹がたつたことを覚えている。

その一件以来、「そこまで言うなら分かったよ！体がどうなっても柔道をやりつづけてやる！」と

いう意地と怒りが私を奮い立たせたように思える（いまでもそうだが、こんなとき私の頭の中では「パワーホール（長州力の入場テーマ）」が鳴り響いている）。

それからというもの、隣町で我々の高校柔道部のOBの人がやっている柔道場に通い始めた。昼間は整骨院を開業していることもあり、柔道の稽古が終わると、腰の治療もしてくれるのだ。治療しながらOBの先生は、腰は筋肉が炎症を起こしているだけであり、骨には異常がないこと。腕力だけ鍛えるのではなく、背筋も徐々に鍛え始めれば、早く完治することを教えてくれた。教えてもらったとおりのトレーニングを私は実行した。

そのかいあって、約半年ほどで私の腰は完治し、これまでも増して柔道に専念するようになった。学校の部活動が終わると、その足（自転車）で隣の道場にいつて汗を流し、ついでに晩御飯をご馳走になったあげく、道場に泊まらせてもらったことも数え切れない（後に訪れる私の結婚式の際、柔道部の顧問の先生がエピソードとして語ってくれました）。

私にとっては3回目となる次の昇段試験で念願の初段に合格した。

その後、高校を卒業するまで柔道をやりつづけ、二段も取得することができた。3年生になったとき一緒に入部した6人の同期は、2人になっていた。また一番弱かった私が主将になっていた。

退部していった4人はそれぞれに理由があったのだろうが、私から見ればどれも大した理由とは思えなかった。

「俺ほど苦しんで、俺ほど努力したやつは他にはいない。」というのが本音だった。

△自分が変わるといふこと▽

私自身のターニングポイントと思える事柄を、恥ずかしげもなくつらつら書き綴らせていただいたが、少なくともこれまで記載してきた出来事が、私という人間を形成するのに大きく関与していることは間違いないと考えられる。

自分が変わるとき、いつも内からふつふつと湧き上がる「なにか」がある。あるときは夢であり、あるときは恋心であり、またあるときは怒りであると思う。

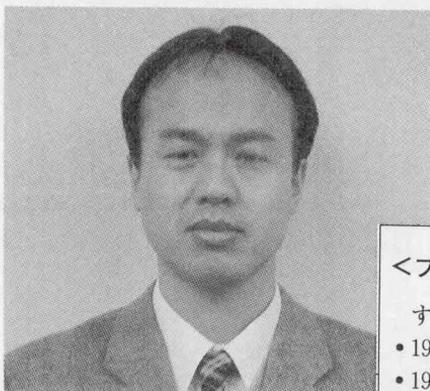
それはその時々で違うのが当たり前であるが、大切なのは自分の心の中の出来事を、どこまで正直に行動に移せるかであると思う。

今後の我が人生、いろいろな出来事が待ち受けていると思うが、少々子供くさくなくても、その都度自分の心に正直に耳を傾けながら生きていきたい。それがきっと私に合った魅力ある歳の取り方になると思えて仕方がないから。

最後に、こんな大切なことを考える機会を与えてくださった産政塾の事務局のみなさん、ならびにすばらしい第十五期塾生の仲間のみなさん、本当にありがとうございました。

以上

産政塾で得られたもの



アイシン労働組合

洲崎 浩一

<プロフィール>

すぎき こういち (35歳)

- 1969年 9月 名古屋市生まれ
- 1992年 4月 アイシン精機(株)入社
9月 同社 自動車部品浜松営業所配属
- 1997年 2月 同社 新豊工場原価チーム異動
- 2002年 9月 アイシン労働組合執行委員
現在に至る

<家族> 妻1人 娘1人 息子2人

<趣味> 読書

△第1回 開塾式V2004年1月27日

「どんな参加者が集まるのだろうか？」そんな期待感からか、初日の会合に向かう足取りは軽やかでした。イメージしていた以上に、幅広い業種からメンバーが集まっており、「産政塾での出会いと経験が、きつと自分にとって良い財産になるだろう」と、なんとなく予感させる1日でした。

△第2回 阪神・淡路大震災記念館V2004年3月25日

第2回会合日は私にとって非常に素晴らしい1日となりました。04年3月25日は、父の命日となりました。震災記念館で午前中の視察と被災者の方の体験談を聞いた後、午後は欠席させていただき、一人一足先に神戸から名古屋へ、そして、名古屋から実家のある一宮へ、そのまま実家近くの病院の父のもとへ駆けつけました。

父は、02年の11月に大手術をしましたが、基本的には治ったものだと、本人も家族もそう思っていました。翌年の9月の終わりに、「治る見込みがない状態にある、短ければ年内に最悪の事態も」と聞かされていました。一進一退を経て、新しい年を迎え、そして新しい春、桜の花が咲き始めたその日、最期を迎えました。

亡くなる時間まで半日の間、家族と共に父と過ごすことができ、病院の窓から、木曾川堤の桜を遠くにながめることも出来ました。神戸で産政塾のメンバーと別れたその時から、非日常的な時間が流

れ始め、そして、葬儀・初七日などが終わるまでの数日間は、一瞬のうちに過ぎ去っていったような、これまでの人生で味わったことのない、特別な時間でした。特に3月25日は一生忘れられない1日となりました。

△第3回 愛知万博長久手会場・中部国際空港V2004年4月22日

この日は碧南方面での社会貢献活動があり、産政塾は欠席せざるを得ませんでした。残念……。

△第4回 北海道庁、雪印乳業(株)札幌ドームV2004年5月27日・28日

いよいよ我がグループの企画。北海道へ行こう！から始まった第4回産政塾の訪問先は、〃道庁〃雪印乳業〃札幌ドーム〃の3カ所。伝統ある一流・巨大企業であつても見失いかねない「企業倫理」の問題。そして、プロ野球のチームの合併・消滅・誕生等によるリーグ再編問題。まさに時流を先取りしたプログラム。大変有意義な内容になりました。

02年日韓共催のワールドカップも行なわれた札幌ドーム。Jリーグなどの試合時は「天然芝移動式サッカーフィールド」ホヴァリングサッカーステージ」がエアで浮いて屋内に移動。野球の時は屋外に運び出され人工芝が敷かれるという、野球・サッカー共用のフランチャイズスタジアムです。世

界初のドームの天然芝。素人には同じにしか見えない芝生も、種類・特徴は様々。札幌ドームに適した芝を選定するまでには様々な試行錯誤が、気候条件の厳しい北海道での維持管理・育成の苦勞、相
当な神経とエネルギーが注がれていました。設備部の皆さんが時間を忘れて語ってくれた真剣さには、
芝生への愛情が感じられました。「仕事に心を込めること」について改めて考えさせられました。

スタジアムの一角では、「ファイターズ移転に伴う経済効果」をテーマにミニ講演会を開催。ワールドカップ誘致には成功したものの、その後の運営においては、維持管理コスト吸収など、難しい問題が残ったようです。これを打開すべく、プロ野球の球団誘致に大胆かつ地道に取組んだこと。球団が日本ハムに決まるまでの経緯。新庄選手獲得効果。これらについて裏話も交えながら語っていただきました。企業の出会い・縁を生むには、誠意や情熱、信頼関係がいかに大切であるか等、多くを感じることができました。事業部長直々の登場に驚きましたが、ドーム立ち上げの際、名古屋ドームにも学んだという過去のいきさつからか、愛知からの訪問者に親しみを覚えたとのこと。ここにもまた縁を感じた私たちでした。

雪印乳業では、消費者重視経営を目指した「新生・雪印乳業」に向けた取り組みについて学ばせていただきました。2000年の食中毒事件、02年の子会社による偽装事件という2つの経緯。1500名規模の企業がわずか数カ月で解散に追い込まれるという、消費者の信頼を失うということの怖さを改めて認識しました。塾生も「明日は我が身。対岸の火事ではない」と気の引き締まる思いに。

資料館、牛乳工場見学の後、コンプライアンス部長さんからお話をうかがいました。社員アンケー

トなどのヒアリング活動、企業倫理委員会などの社外からの提言等、社内外からの声を真摯に受け止める中で、新企業理念・行動基準を策定し、取り組みを進められてきたとのこと。「社外の視点による経営」として、社外取締役の招聘や、お客様センター・モニター、酪農家との対話の推進。「現場主義」の徹底。トップの重要課題としての「リスクマネジメント」、「企業倫理の取り組み」、これらの粘り強い取り組み状況について、踏み込んだ内容まで語っていただき、全員が熱心に聞き入りました。「行動基準」を読んだ社員が99.5%。意識と行動の変化を実感した社員が86.5%に至るまで浸透したという状況には、産政塾の討議の中でも「羨ましい」という声があがりました。組織の行動基準や方針を、全体に浸透させることの難しさは、企業・労組・自治体どこの世界でも同じだと感じました。

各訪問先では、学ばせていただく立場である私達に対し、大変丁寧に誠実な対応をしていただきました。また、厳しく悩ましい状況にあっても、何とかして向上していこうという希望を持ち続けることの大切さを学びました。一時は断念かと思われた、我がグループの企画ですが、行って良かったと本当に思える1泊2日となりました。

△第5回 保父体験V（竜神保育園、トヨタチャイルドケアぶらぶらランド）2004年6月24日

是非是非参加したかった企画でしたが、この日も社会貢献活動があり、欠席せざるを得ませんでした

た。残念・・・。

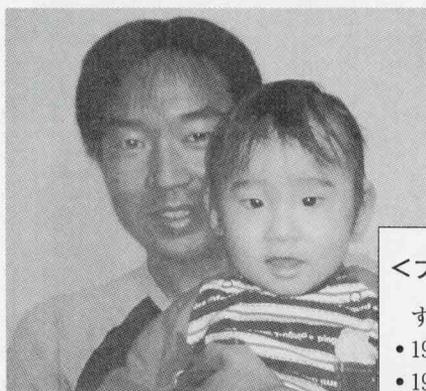
△第6回 博物館明治村▽2004年7月22日

レジャー客の気分になって、客観的に明治村の楽しめる点、不満な点を観察させていただきました。産政塾の討議においても、遠慮無く意見を言わせていただきました。明治村は小学校の遠足以来。大変暑い1日でした。

△第7回 閉塾式▽2004年8月27日

「産政塾での出会いと経験が、きつと自分にとって良い財産になるだろう」という予感はやはり当たっていました。訪問先、産政塾、および派遣していただいた私の職場、周囲への感謝の思いを抱いた一日でした。

「一期一会」の精神



豊田合成労働組合

洲崎晃嘉

<プロフィール>

すさき てるよし (30歳)

- 1974年4月 愛知県に生まれる
- 1999年4月 豊田合成(株)入社
7月 材料技術部配属
- 2003年9月 豊田合成労働組合
常任執行委員
現在に至る

<家族> 妻、長男(1歳)

<趣味> 子供と遊ぶこと

今、自宅の台所でパソコンに向かっている。テーブルの向かいには妻が座っており、1歳2ヶ月になる息子が、パソコンに興味を示し、私の足につかまり、よじ登ろうとしてくる。かわいいけれど、今はそつとして欲しい・・・産政塾誌の原稿を書こうとしているが、全くイメージが湧いてこない。どうしよう、神様助けて下さい!と思っていたら、ふと自分の机に置いてある名刺入れが目に入った。現在、労働組合専従という身であるが、その前は一応技術者で、ゴム製品の材料開発をしていた。その頃に頂いた名刺である。数えてみると195枚もあった。過去に何十枚かは捨てているが、多くの人に出会っているなあと感じた。眺めているうちに、非常に懐かしさを覚えた。そしたら、なんだか頭にイメージが湧いてきた。あまり飾らず、自分の気持ちを素直に書いてみよう・・・

私は、1974年4月10日、名古屋にて産声を上げる。3歳のとき小牧市に引っ越し、結婚する28歳までずっと住み続ける(今は一宮市)。その間、地元の小・中・高に通い、普通の学生生活を送る。自慢できることは、4回頭をぶつけ血を流した事。そして、小学五年生のとき、今は亡き、「天才クイズ」という番組で天才賞を取ったことぐらいか!

そんなことはさておき、その後名古屋の大学に進学し、初めてアルバイトの経験をする。周りのみんなは、時給3000円もする家庭教師をしていたが、私は接客業がしたく、時給が1000円にも満たない、カラオケボックスのアルバイトを選択した。当時の私の欠点は、いやなことを頼まれたとき顔に出してしまうことである。そのことで母親とよく喧嘩をした。しかし、接客業はそんなことは言ってもらえない。いやな客でも、笑顔で接することを心がけた。最初は、心の中ではちくしょう!

思っていたが、その内自分の中で何かが変わっていた。笑顔で接することを心掛けていたら、自然に明るく、そして前向きに考えるようになっていた。いやな仕事も、進んでこなす自分がいた。この時人間はちよつとしたことで変わるのだと感じた。このアルバイト経験は、その後の自分に影響を与えている。今ではいやなことを頼まれても、ほとんどいやな顔せず、快く引き受けることができる。(ちなみにカラオケボックスのアルバイトは、飽きずに5年もやった)。

私は、大学院に進学し、実験・研究・アルバイトを中心とした生活を送る。在学中、「父の死」を経験した。小さい頃は、普通に仲の良い親子であった。しかし、成長するに従い、特に理由はなかったが、父に接する態度がぎこちなかった。就職が内定したときも、父は大変喜んでくれたのにもかかわらず、私はそつけない態度をとってしまった。その直後、元氣だった父が、突然立てなくなり、そのまま入院した。手術を行ったが、入院してわずか20日で亡くなった。あまりにも突然すぎて、最初は父の死を受け止めることはできなかった。しかし、時が経つにつれて、死を受け止めると同時に、父の偉大さを感じてしまった。よくある人がいなくなった後で、初めてその人の良さが分かると言われるが、まさにその通りである。この人生で、一番後悔していること、それは父に対し、やさしく接するべきであったことである。残念なことに、父が亡くなって初めて気づいたことであり、今でも父のことをよく振り返る。

人に限らず、ある出来事が終わった後に、人はこうすれば良かったと、後になって新たに気づき、よく後悔する。それはそれで勉強だという考えもあるかもしれないが、もつと「気づく力」を養って

いきたいと感じた。そのためには、常に身の周りの事に対し、「観て、考える」ことを意識し、次の行動に移すことが重要であると感じた。今は、一ヶ月に1回以上、父のお墓参りに行くことを継続している。

志望動機は何はともあれ、現在勤めている会社に就職することができた。会社に就職して数ヶ月が経った頃、私にとって運命の出会いが訪れる。私の会社の同僚が、その友人と会わせる機会をセツティングしてくれた。当時を振り返れば、二人は乗る気ではなかったが・・・しかし、会話をし、電話をし、直接会ったりしているうちに、付き合うことになった（その後、私の妻となる）。

その当時、彼女は某豆腐料理屋の接客業という仕事に就いていた。その店のモットーは、「一期一会」である。映画のタイトルにも使われ、意味もなんとなくは知っていたが、その言葉に対し、特別な思いはなかった。ある日、彼女と一緒にその店に食事をする機会があり訪れたが、対応の良さに大変驚かされた。玄関から、部屋への案内、料理のもてなし、そして最後のお見送りまで、何から何まで徹底されていた。料理はもちろんおいしかったのだが、それ以上に店員のお客に接する態度が、何から何まで行き届いていたのだ。これはすごいと思い、早速、国語辞典で一期一会の言葉の意味を拾った。「一期一会とは（茶の湯で）すべての客を、一生に一度しか出合いの無いものとして、悔いの無いようにもてなせという教え」と記してあった。そのとき、その言葉のすばらしさと、実際にその言葉のとおりに行動している店に、感動を覚えた。もし、ある人に一生に一度しか出会う機会がなかったら、どう接するのか？二度と会わないから、適当に対応してもいいと思うのか、一度しか会わ

ないからこそ、きちんと対応しようと思うのか、大きな違いである。もしかしたら自分の中では、前者の考えがあったかもしれない。しかし、その店を訪れてからは、完全に後者の考えを意識するようになった。その考えを改めて意識した出来事を、最近経験した。

約一年前、労働組合専従になったが、最初に与えられた大きな役割として、衆議院議員選挙の専従という任務が与えられた。私は、組合役員を経験していなかったため、労働組合については全くの素人であったし、ましてやそんな者が選挙の専従をするなんて、と思った。何はともあれ、選挙事務所に入り、活動を行った。私を含め、労働組合からの専従者は四名であった。また、選挙事務所には専属スタッフとして何名か訪れていた。最初はお互い顔も知らなかったが、候補者を何としても当選させるという一つの目標に向かって、スタッフが一丸となって活動に取り組んでいた。活動自体は大変ハードであったが、メンバーと一緒にその目標に向かって取り組んでいるうちに、いつの間にか辛さ以上に嬉しさや楽しさを感じた。選挙終了後の翌日、最後の片付けが終わり、メンバーは元の職場に戻っていった。車の中で、選挙活動に取り組んできたメンバーとは、おそらくその機会を共にすることはない、また大半の方にはもう会うことはないかなあと思ったとき、思わず涙をこぼしてしまった。それだけ、充実感や達成感、そして短い時間ではあったが、多くの方と知り合うことができたことに大変満足できたのだろう。これからも一度きりの出会いであると分かっていたとしても、私は、自分の最大限の誠意を持って接していこうと思う。

さて、今回産政塾に参加させて頂くにあたり、志望動機を提出しているが、その中に書いてある目

標が達成できていないか読み返した。おっ！一部ではあるが達成できていないか。「社外の方たちとの触れ合いにより、様々な刺激を与えていきたい。」という内容である。今回産政塾メンバーの皆さんは誰もがすばらしい方ばかりで、特に共に企画立案に携わった四名の方には、多大なる刺激を与えて頂き、感謝の念でいっぱいである。産政塾メンバーの方とは、今後多くは会う機会はないかもしれないが、産政塾という、貴重な時間を共有できたことに大変嬉しく感じている。

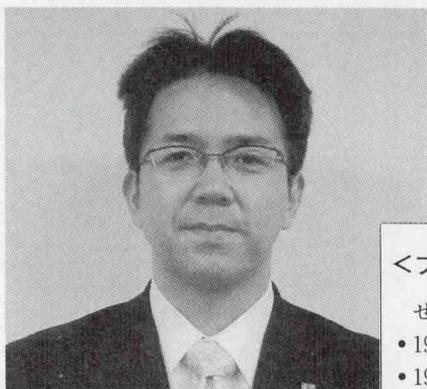
私は現在、当労組内で産政塾に似た活動「生きがい創造委員会」の事務局を任せられている。若手九名が「創造力習得・行動力習得・視野拡大」等を養っていくために、必死に活動を行っている。私が入組の産政塾で学んだエキスを、一つでも多く彼らに伝えればと考えている。

最後に、小田桐塾長・竹川さんそして産政塾の皆さんに対し、お礼と感謝を申し上げます。

何とか文章を書き終えてほっとしている。時間はいつの間にか真夜中を大きく過ぎ、妻と息子はすでに眠っている。誰かの言葉で、「家族を犠牲にしてまで必死に会社のために働いてきた」と聞いたことがある。しかし私は、「家族を必ず幸せにする」ことを目標とし、これからの人生に向かって進んでいこうと思う。最後に、目の前の冷蔵庫に貼ってある言葉がすばらしいので、皆様にお送りします。

人の不幸は人と人が逢うことから始まる　よき出逢いを　みつを

「何事も経験」



トヨタ車体労働組合

千 田 路 征

<プロフィール>

せんだ みちゆき (34歳)

- 1970年11月 東京都に生れる
- 1989年4月 トヨタ車体株入社 F組立部第二組立課配属
- 1990年4月 F工務部動力課へ異動
- 2002年9月 トヨタ車体労働組合 専従執行委員
現在に至る

<家族> 妻、娘2人、息子1人

<趣味> 下手だがゴルフ、カラオケ

△産政塾に参加して▽

テーマである「殻の外へ踏み出そう」という言葉の通りに自分自身が、殻の外へ踏み出せたかと言うと不甲斐無い結果になってしまったように思います。まず今回参加しようと思ったのも、自分自身人見知りをするタイプの人間と自分では分析しており、そういったところを改めたいこともあり参加したつもりでいました。しかし、第1回〜第7回までの間で全て参加する意気込みでしたが、第4・6・7回を欠席する事になりました。特に、第6回については自分達のグループの企画でもあり、グループの皆さんには、大変ご迷惑をお掛けしたことを、書面をお借りして、再度お詫びします。

冒頭人見知りをすると書きましたが、私の事を良く知る人から見れば、何を言っているのだろうと思われるかもしれませんが、私が労働組合の専従執行委員になろうと決意したのも、そういった人見知りを克服するために、人前に出て話をする事により度胸をつけられると思ったことも、執行委員になろうとした理由の一つです。一番の理由は、やはり職場を良くしたい、会社を良くしたい、と思う気持ちが一番ですが・・・

タイトルを「何事も経験」と付けましたが、よく聞かれる言葉であります。現在、私は労働組合で仕事をしており、まさに普通に現場で働いていては経験（体験）のできない事を、経験させてもらっています。労働組合だから特別という訳でもありませんが、自分の感覚で言えば凄いいことだと思っています。どんな時においても経験もしていないことに対して、自分の感覚だけで発言することは、大変危険であると思います。良く職場の中で言われる現地・現物がそのものであって、職場で何が起きているのか、どんな問題が発生しているのか、自ら体験・経験しないことには、判らないことは、

たくさんあります。

今回の産政塾で得たものは、大変貴重な財産になると思います。いろいろな人との出会い、いろいろな経験・体験こういったものの積み重ねにより、人は成長していくのだと改めて感じました。数年後また数十年後、この産政塾の第15期生として参加した事が、良い思い出だけでなく、自分の殻を破ることへの第1歩となっていることと確信しております。

△各活動に参加して▽

①第2回「あなたの自覚は…？阪神・淡路大震災の教訓をあなたはどうかかす！」で体験した内容であるが、このレポートを書いている前夜に、地震規模という阪神・淡路大震災級の地震が、新潟県中越地方を震源地とする大変規模の大きい地震が発生し、被害も大変大きいようだ。

私自身、第2回の活動に参加して、実際に被災された方のお話を聞き、大変な時に、寝室にはベッドを囲むように家具が置いてあり、もし寝ている時にこの家具が倒れてきては大変と、寝室に有った家具をすべて別の部屋に移動させ、転倒防止の処置も行った。被災者の語り部の方が言っていたが、近所付き合いが無く、実際に地震が発生したときも、隣近所に誰が住んでいるか知らないため、建物の下敷きになっていても気づかれず、救助が遅れ、亡くなられた方が結構多いという話を聞き、改めて近所付き合いが必要だと思うが、普段、家になかなか居ない私にとって、ご近所さんとのコミュニケーションをどのように取っていくか課題が残った。しかし、いろいろと考えさせられ、良い経験が出来たと思う。

②第3回の「愛知のお国自慢」で体験した内容であるが、2005年3月から開催される愛知万博の会場視察と中部国際空港セントレアの視察で、はじめに行った万博会場ですが、ようやくパビリオンの建設に着手した段階での視察であったこともあり、オープンまでに間に合うのかなと少し心配。労働組合としても、はじめて万博に参画することもあり、大いに盛り上げて行きたい。今回の万博のメインテーマでもある「自然の叡智」とあるように、万博閉幕後の建物の再利用や自然に優しい工夫があちらこちらに折り込まれており、これまでの万博では地域経済の発展が大きな狙いの一つだったと思うが、今後の万博の在り方を全世界に訴える良い機会だと思う。

次に行った中部国際空港ですが、大変に広い敷地に圧倒されました。今後、中部経済が発展していくためにも、大変重要な所になると改めて認識しました。万博の開幕に合わせての建設となり急ピッチで工事は行われておりましたが、主要部分の建物の外観は、ほぼ完成しており、空港を利用する日が待ち遠しいです。

今回の活動で得たものですが、多くの人を集める為には、企画力にあるかと思えます。私どもの労働組合でも、いろいろ組合員のコミュニケーションの場としてイベントを企画しますが、なかなか人が集まらないのが現状です。いかに多くの人に参加してもらい、満足して頂くか、そういった意味でも、今回の活動は大変参考になった活動でした。

③第5回「保父体験く時にはママの気持ちになって」で、体験した内容であるが、実に変な1日であった。豊田市にある竜神保育園にて、1日保父体験という内容である。子持ちの私にとって、ある意味、家庭の中での子育て自体でも、右往左往している状態で、ましてや他人の子供の保育なんぞ出来るのかなと半信半疑で参加しました。はじめに全体での紹介があり、一人一人園児の前で紹介

されたが、実に恥ずかしい限りであった。続いて担当のクラスを紹介された。私は、5歳児のクラスの担当となり、比較的扱いやすい年のクラスでほっとしたのもつかの間、屋外での運動でサッカーをすることになった。園児たちは、大変元気で朝っぱらから凄いテンションが高く、ついて行けなかった。真剣にサッカーしても、大人げないので多少手加減していたが、いつのまにかこちらが真剣になつていったが、気づいたら、子供達は他の遊びをしていた。

今回の保父体験で一番大変だったのが、食事の際での、保父の争奪戦であった。「ここで一緒に食べよう」と誘われると、他では、「ここで一緒に食べるの」と、いつの間にかケンカが始まり、こんなにモテモテは嬉しい限りだが、なだめるのに大変苦労した。

こんな体験を妻に話すと、家でもしてくれるといいねと子供達と・・・妻に言わせると外面が良いのよね、家の事何にもしてくれないのに、以後反省し協力的になつたつもりではあるが。

いずれにせよ、今回の体験を通して、子育ての大変さがよく身にしみて感じ取る事ができた。家庭を預かる妻に感謝感謝・・・で逃げるつもりは無いが。

最後に保育士の方々と意見交換を行ったが、その中での話で、「愛情を一杯掛ければ掛けるほど信頼関係が築かれる」と言われた。当たり前のようなことだが、いざ自分の子供にそう接しているかという反省する所ばかりである。

今回の活動も、大変有意義な時間を過ごせることができた。

△今後の自分▽

今回タイトルで付けた「何事も経験」について、今一度自分の人生を振り返ってみると、幼少の頃は小児喘息で苦しみ、毎月必ずと言っていいほど発作が出ており、夜が眠れない日々が続いた。人見知りになったのも、こんな幼少期の病弱な時代のせい、学校をよく休みがちで、友達とのコミュニケーション不足が原因かも。

次の経験は、高校受験での出来事で、私の通っていた中学校の約6割の生徒が受験する高校に、私も受験した。結果、掲示板には私の受験番号は無かった。約6割の生徒が受験する事もあって、合格発表は揃って見に行く事が慣わしであった。合格した生徒は、その場に残り入学の手続を行うが、不合格の生徒は、そのまま帰宅となる。その帰り道に、受験した高校の生徒より「こんな時間に帰るやつは落ちたやつだな」と言われ大変不愉快な気持ちにさせられた。しかし、この受験で落ちたことにより、私立の高校に行く事になり、中学の担任からはお前が行く高校のラグビー部は大変強く全国大会出場経験もあり、どうだと勧められ、高校でラグビーを始めるきっかけとなった。これまでの人生を振り返るとあの時に言われた言葉に奮起し、高校でラグビーを始めなかつたら、今の会社にも居なかつたかもしれない。

小学校時代は野球、中学校時代はバレーボール、高校時代はラグビーといろいろなスポーツにチャレンジし、その時々で一生懸命に取り組み、スポーツを通していろいろな事を学んだ。

今の自分があるのも、高校時代のラグビー部の監督から言われた一言がなければ途中で挫折していたかもしれない。ラグビー部に入部して3ヵ月あまり経った時、厳しい練習に耐えかねて、監督にラグビー部を辞めたいと申し出た時の監督の言葉である。「お前は知らないかもしれないが、3年生の先輩で片目が見えない者がいる。しかし、こいつは他のやつらに負けないぐらい一生懸命練習をして、

今はレギュラーで頑張っている。お前は五体満足な体に生れて、恥ずかしいとは思わないのか・・・」
と言われた時に、自分はなんて情けないことをしているのだろうと思い、辞めるのを留まった。それ以来厳しい練習にも耐えて、2年生の時にはリザーブ（補欠）に選ばれ、一步一步レギュラーへ近づいてきたやさき、高校のラグビー部OBとの試合で左腕前腕を骨折するケガをしてしまった。

このケガ以来、また辛い日々が続いた。骨折した所がなかなかくっつかず、半年あまり経過して、医者判断として骨盤からの骨移植をすることになった。また、この手術の痛さは、言葉では言い表せないレベルの痛さである・・・これも経験。しかし、骨移植後とんでもない事になった。移植したところの骨が盛り上がり過ぎて痛みを生じるようになり、また変な経験をすることになった。今度は、盛った骨を削るという手術をすることになった。手術はいたって簡単、盛り上がりすぎた骨をノミのような器具を用いてカナヅチでとんかんやる簡単な手術だが、される身にとっては、とんでもない事である。麻酔はしているが、局部麻酔で骨の髄に響くこと、これも言葉に表せない痛さである。前前で、言い忘れたが骨盤からの骨移植をすること、これは患部周辺の剃毛を行わなければいけない。この後の話はご想像にお任せしますが、これも経験である。

最後に「何事も経験」は、この頃から始まっているのかもしれない。今後の自分に対して何事にも前向きに、チャンスがあれば、どんな事にも積極的にチャレンジしていきたい。
それが殻を破って外に出る事につながる・・・まちがいない。

殻を破れたかどうか・・・



トヨタ自動車労働組合

立松 学

<プロフィール>

たてまつ まなぶ (42才)

- 1962年9月 名古屋市生まれ
- 1981年4月 トヨタ自動車(株)入社
第2実験部熱実験課配属
第2車両実験部第2熱・燃費実験室勤務
- 2003年9月 トヨタ自動車労働組合 執行委員
現在に至る

<家族> 妻、長男、長女 4人家族

<趣味> 草野球、その他球技

△はじめに▽

私がこの産政塾に参加するに当たり、まずはこんな文章が目飛び込んできました。それは産政塾が30才前後の若者が集い、「殻の外へ踏み出そう」をテーマに人材交流する場と言う文章です。30才前後？若者？自分ではないのではないかどうかどうしても気になってしかたがありませんでした。

最初に産政塾という言葉を目にした時には、「塾」か、何かかなり昔にしか経験していない言葉だな、いったいどんなことをするのだろうか。募集概要に目を通して見ると、さすがに「塾」という名が付くだけに少々堅苦しい印象を受けたが、産政塾の基本のテーマである「殻の外へ踏み出そう」という言葉がいったいどういうことなのだろうか、今までにない何かを少し感じた。しかしながら、特に現状に不満があるわけでもなく、入社以来大変ではあったが大きな病気・ケガもなく順調に会社生活を送ってきました。また早くに家庭を築き子供にも恵まれるなど順調な時を過ごしてきて、自分を変えるという発想はありませんでした。

そういつた中で、自分自身気持ちには若いが・・・実年齢は・・・そんな不安を抱きつつ産政塾への参加の動機、殻を破るとは何かを考えながら産政塾が始まる時を待っていました。

内心こういつた活動は少々堅苦しく、苦手であるという気持ちやどこかにあつたのかもしれない。そこで年令のことをいい事に何か言い訳しようとする自分があつたが、誰でも参加出来る訳ではなく、現状よりも、もうひとつ上のレベルに自分を引き上げるためには何かが必要であり、参加することによって「何か」を見つけられるのではないか？自分が選ばれ貴重な体験をさせてもらえるのだと！言い聞かせることからこの産政塾が自分の中でスタートをしました。

参加するからには自分自身の考え方や、視野を広げる意味で充分意味があるものだと前向きに捉えながら、自分自身の思いや考えについて、これを機会に再認識できればと感じました。

話が変わりますが、残念なことに開塾式には参加することができず、グループ討議にも参加ができませんでした。グループの皆さんの推薦により？リーダーを任命されたことをまずは最初に報告いたします。しかも、トップの企画を担当、最初は何かなるかと安易に考えていましたが、時が経過するにつれ気持ちはあせり、なかなか決まりませんでした。グループの皆さんの協力により「あなたの自覚は・・・？阪神・淡路大震災の教訓をあなたはどうか活かす！」をテーマにした防災に対する認識を深め企画のトップをきることが出来、滞りなく終わることができました。

この原稿を作成している時に、新潟方面で大きな地震が発生しました。今一度Cグループの企画で聞いた、震災体験者の教訓を再認識し、防災について備えをしつかり整えなければと思っています。

△今までの経験を振りかえって▽

会社へ入社して以来、既に20年以上の月日が経ちました。あつという間、本当に早いものです。特に結婚をして子供が生まれてからというもの一年一年があつという間に過ぎて行ってしまった感じですね。そんな中で、今まで自分自身が何を考え、何をやってきたか、これを機会に一度振り返りかえられればと思います。

会社へ入社する前の冬の大きな出来事として、母親を病気で亡くしました。中学、高校と毎日部活

で頑張る日々が続き、疲れた時や不満があると、言いたいことを母にいつも言っていて困らしていたような気がしています。またそれを受け止めてくれました。「孝行したい時に親は無し」、その言葉の意味を身を持って痛感しました。

最初に、湿っぽい話しをしてしまいましたが、まずはその時に自分自身の中で何かが変わったような気がしています。具体的に何かと言われても何かは分かりませんが、その事が自分を成長させていくひとつの転機（第1の殻を破る）になっていたかとも思っています。それまでの自分は何に對しても、率先して自分から実行するタイプではありませんでした。どちらかと言うと人任せであり、特に目標を持つでもなく、今振り返るとそんな気がしています。

自分の性格で人によく言われたこととして、「まじめだな」「優しすぎる」とかがあります。確かに自分でもそう感じることはあります。ただ自分自身としては生まれてからの育った環境や生活は人それぞれで異なるため、性格・考え方も千差万別、性格なんてそう簡単に変えられるものではなく、それを会社生活の中でいかにうまく活かしていくかの方法を、仕事の中で覚え・実践していくことが大切ではないかと思っています。

入社して右も左もわからない自分に対して、「失敗を恐れるな、失敗してもいいから、まずは自分でやって見ろ。ただし同じ失敗を2回したらわかっているな」と熱く指導してくれた先輩がいました。

この先輩の意図は仕事を任せることによって、仕事に對する自覚と責任感を本人に持たせることでした。私自身、失敗を恐れず日々挑戦し、その都度つまずいても、ひとつひとつ達成できていくこと

により、徐々に自分の自信になっていき、仕事に対する自覚と責任感が備わり、自分自身のスキルも自然に身に付いていきました。

先輩にはいろいろな教え方がいました。指示だけを出して距離を置いて見守る人、全て自分でやってしまう人、人には様々な教え方があり、そんな様々な教え方を経験していく中で、自分にとってどの教え方が適しているのか、経験を通して覚えていくことができたのではないかと思っています。入社して数年は覚えるために、がむしゃらに仕事をこなしてきましたが、自分としては次の2点について信念を持ち取り組んできました。

- 仕事を進める上で誰にも負けない何かを、ひとつは必ず持つ。
- 自分の仕事に誇りを持ち、プロとしての自覚を持って行動する。

この2つの信念を持ってやれば、どんな場面でも負けずにやってこられたのではないかと思います。それと合わせて、入社してから職場で行っている野球の同好会に入り、そこで当時監督をしていた方から自分にとって貴重な話しを聞かせてもらうことが出来ました。私が数年してグループを任せられ、職場運営で非常に困っているときに、こんな話しを漏らしたところ・・・

「自分は人にはつきり言えない性格なので、なかなか相手に対して強く言えないですよね・・・」
そう言うのと、こんな言葉が帰ってきました。自分も同じような経験があるが、それは自分の立場・持ち場で任された役割であり、要するにその時々で役を演じなくてはならないということであり、仕事も同じことだと割り切ってやるのが大切である。自分はそう考えやってきた。とアドバイスを受けました。

自分としては、その時のアドバイスをきっかけにして、自分なりに色々な場面において役者を演じ

て仕事をこなしてこられたのではないか、この時をきつかけに殻を破れた（第2殻を破る）のではないかと今はそう思っています。

△企画に参加して▽

さて参加した企画のそれぞれに貴重な経験・体験をさせて頂きましたが、一番印象に残った企画としては、残念ながら私の班で企画した第2回「あなたの自覚は…？ 阪神・淡路大震災の教訓をあなたはどう活かす！」ではなく、（Cグループの皆さんごめんさい）第5回の保育士体験が印象に残っています。（Cグループの参加は私だけでした）

これは実際に保育士になり、一日保育園の実体験をすることを通じ、企業人・家庭人として、少子対策や次世代育成支援等について考える機会を得ることを狙いとしていました。

私自身は子育ての真っ只中ではあるが、すでに子供は中学と高校であり少しは手から離れた年齢になつてはきました。そういった意味でも、小さな子供と久しぶりに触れ合いの場を直接持つてることを楽しみにしている反面、「どうせおじさんは相手にされないじゃないか」、「疲れそうだな」、そんな思いを抱きつつ企画に参加しました。

まずは子供との初対面です、講堂で全員の前で朝のあいさつをしましたが、その時のひとりひとりの顔を見ると目がキラキラして、全員がしつかりこちらの方を羨望の眼差しで見えてくれました。これには以外にビックリです。次にそれぞれ担当のクラスへ子供たちに手を引かれて連れて行ってもらいました。（担当は5才児クラス）この時すでに子供ひとりひとりの性格の違いが顕著に現れてい

ました。このおじさんを独り占めにしようとする自己主張する子、後ろからこっそりついてくる子、子供たちの様々な行動を最初から見ながら体験は始まりました。

その後、子供たちとグラウンドでかけっこをしたり、プールで水遊びをしました。日々子供たちと接している保育士の方々は大変だなと、直に感じることもできました。子供たちは正直でこちらが本気で接すれば接するほど目をキラキラさせ、何をしてくれるのだろうと期待の眼差しで見えていました。この時思ったことは、こつちが手を抜けば相手もそれなりの対応しかしてくれません。仕事でも同じ様なことが言えるかもしれません。

人は現状を変えることには抵抗を感じ、避けたい、楽をしたいと思います。その方が楽だし、変えることは苦痛を伴うから避けたい、子供たちと接することを通じてそんなことも感じることも出来ました。子供たちひとりひとりの目線で遊び、子供たちと真剣に接することを通じて貴重な体験をさせてもらうことができました。やはり聞くだけではなく、実際に自分の目で見て体験することの大切さも企画を通じ、改めて実感することができました。

△最後に▽

産政塾の企画全てに参加できたわけではないが、どの企画においてもなかなか体験できない貴重な体験をさせてもらうことができました。また基本テーマである「殻」についても、自分にとって殻の外へ踏み出すことはいったいどんなことなのか、この年齢になってから今一度考えることができたことは大変良かったと思っています。

結果的には殻を破れたかどうかは・・・なんとも言えませんが、いいきっかけになったことは確かであり、今後の仕事に役に立てばと思っております。

社会人になって20数年、まだまだ人生はこれからです。これからも好奇心とチャレンジ精神を持ちこの貴重な経験を糧として頑張っていきたいと思えます。私自身ひとつ残念であったのが、唯一の宿泊企画であった北海道の企画に参加出来なかったことである。

短い間でしたが、塾生・事務局の皆様大変有り難うございます。すべての皆様とお話しをすることが出来ず悔やまれることもあります。今後はこの経験を活かすとともに、自分の視野を更に広げ、業務に邁進して行きたいと思っております。

これからも様々な場面で、殻の外へ踏み出さなくてはならないことがあるかと思えます。何度も申し上げますが、この経験をさせてもらえたことは自分自身の財産になるかと思えます。組合専従になつてからは、今までの業務との違いに、日々困惑していますが、今まで全く経験出来なかった事、様々な業種の方々と仕事を一緒にやらせてもらえうるうれしさを感じながら、毎日を過ごしています。貴重な経験をさせて頂き有難うございました。

メンバーの皆さん、またどこかでお会いしましょう。

「産政塾」名前を付けて保存



株式会社松坂屋

棚橋 克成

<プロフィール>

たなはし かつしげ (31歳)

- 1973年 4月 岐阜県羽島市生まれ
- 1997年 4月 (株)松坂屋入社
名古屋駅店和洋酒、缶詰売場配属。その後婦人ドレス、コート売場、婦人カジュアルウェア売場で勤務。
- 2001年 6月 本社人事部へ異動
現在に至る

<家族> ひとり暮らし

<出身> 青森・神奈川・広島・富山・愛知など

△はじめに▽

前回参加した先輩からこのレポートの大変さを聞いていたにもかかわらず、今こうして提出期限ギリギリになって慌てている。過去の塾誌を開いては閉じ、パソコンの前でかれこれ1時間硬直している。この塾誌は卒業生の方たちにも配られ、多くの方に読まれるらしいが、産政塾を振り返って、私が思ったことを肩肘張らずに素直に書き記しておきたいと思う。

△産政塾参加は私にとってタイムリーだった▽

入社7年目。30歳。(参加申し込み当時)

このところ時間のながれるスピードを意識するようになった。年を取ったせいだというと、その程度でと笑われるかもしれないが、本当に20代前半とは明らかに違うスピードを感じている。年齢に意義をあたえることは、まったくくだらないことだと思うが、「30歳」というと何か人生の大きな節目であつて、将来の展望やビジョンといったものをしっかりと持つことが求められる年齢のような気がする。そういったプレッシャーを感じるもの日々の仕事に忙殺され、それを言い訳にして自分の将来を真剣に考えていないのが現状である。入社して7年半。仕事は楽しいときもあれば、苦しいときもあるがそれなりに充実していると思う。しかし、現状に不安を感じ、焦燥感に駆られるときもある。「このままでいいのか。」そんな悶々としていた時に上司から産政塾参加の指名があり、仕事から少しはなれ自分を見つめ直す機会を与えていただくことになった。まさに産政塾参加は私にとってタイ

ムリーな展開であった。

△産政塾は自分たちで作り上げるからおもしろい▽

産政塾では、誰からも指示・命令を受けることは一切ない。企画をすべて自分たちで考え（リーダーに依存するところが大きい）、自分たちで体験し、自由に意見交換をするという自主的な活動であるから有意義であった（事務局の竹川さんにはご心配をおかけしたが）。企画内容・結果はどうあれ、自分たちで考えたことに意義があると思っている。私が産政塾で学び、体験したことは、知らず知らず自分の血となり肉となり、これからさまざまな壁にぶつかった時にその力は発揮されると信じている（希望的観測である）。ゼロからスタートし、自分たちで自由に考え、企画を形にしていくは本当に大変なことであり、エネルギーを必要とすることであったが、やり遂げたあとの快感も大きかった。

私が参加した企画について振り返ってみたい。

【3月企画】

「あなたの自覚は？ 阪神・淡路大震災の教訓をあなたはどうか活かす！」をテーマに、神戸の「阪神・淡路大震災記念館 人と防災未来センター」の視察。

今年は台風・地震をふくめ各地で天災が相次いでいる。環境破壊による異常気象が叫ばれて久しいが、これからは何が起こるかわからない、そんな気がする。自分の身は自分で守らなければならない

と再認識すると同時に、備えは必要であることを痛感した。恥ずかしいが、これまでは何の備えもなかった。近頃、防災グッズの類が売れているらしいが、この訪問をきっかけに我が家では、2リットルのペットボトルの水が12本常時完備されるようになった。

【4月企画】

「愛知のお国自慢」をテーマに、愛知万博長久手会場および中部国際空港セントレアの建設現場の視察。

この2大プロジェクトを視察できたことは貴重であった。愛・地球博は是非とも成功してほしいと思う。商業イベントとしての採算をもつての成功ではなく、万博のテーマである「自然の叡智（自然が有している素晴らしいしくみ。生命の力）」に学び、新しい文化・文明の創造の実現によって、21世紀、世界中の人々が豊かで幸せになれるように願いたい。私は万博をみたことがないので単純に楽しみである（35年前大阪で開催された時は私は生まれていなかった）。

【6月企画】

「時にはママの気持ちになって」をテーマに、豊田市内の竜神保育園を訪ね、保育士体験。

私は2歳児を担当。園児たちにチャホヤされて気分がよい一日であった。プールで水遊び。紙芝居。お昼寝。一緒に昼食・おやつ。外で好きな遊びをする。とメニューは盛りだくさん。先生たちが作成した緻密なレッスンプランを読んでいると、園児たちへの愛情をひしひしと感じた。2歳児というと自己主張が強くなる時期という説明をうけ、ビビリながらのぞんだが、実際そのとおりで、完全に私

は彼等のおもちゃであった。ひとつわかったのは、保育士の仕事は体力と精神力がいること。何をしでかすかわからない園児たちを相手に奮闘する先生たちの姿にたくましさを感じた。この仕事は好きでないといけないと思った。

【7月企画】

「新たな発想・創造を追求する」をテーマに、犬山市の博物館明治村を訪問。

明治村に対するイメージは、小学校の遠足でいく場所、デートコースのどちらかしかなかったが、ここは博物館であり社会教育の場であった(笑)。国の重要文化財に指定されている歴史的建造物、日本初のカクテル「デンキプラン」など、明治時代の建築・文化にふれ、古いことから学ぶべきことがたくさんあり、新たな発想・創造へのヒントになるということに気づき、大変有意義であった。

【5月企画】「地域活性化への取り組みを学ぶ」をテーマに、北海道庁、雪印乳業(株)、札幌ドームの視察に参加できなかった。

私がつた1つ参加できなかった企画は、最も参加したかった企画であった(笑)。残念。

△産政塾で得たものは多かつた▽

産政塾で得たものは数多いが、大きく3つある。これらを心に刻みたい。

★外はひろい。

産政塾は同年代の異業種の集まりであるから新鮮だった。普段から少なからず同業のことは意識しており、そのフィルターがあるので自然と情報を集めることはできる。しかし、異業種のことには新聞ですら、読まずにとばしてしまうことが多い。はじめのころは、塾生のみなさんが発する言葉の意味がわからないことがよくあった。考えてみると今日、業種・業態をこえた競争が激しい。同業だとか異業種だとかそういう発想がまったく時代遅れなのかもしれない。

入社7年半の私は自分なりの仕事のすすめ方・ペースを多少なりとも持っていて、それなりに自信もあった。けれどもそれは極めてせまいフィールドではなしであった。自分は甘っちょろい。塾生のみなさんと話をしているとそう感じるが多かった。外はひろい。このことを思い知ることができたのは良かったし、仕事をする時もこのスタンスでいこうと思う。閉塾式のとき、塾長が紹介された言葉「障子をあけてみよ。外はひろいぞ」が強く印象に残っている。

★何事も体験してみる。

実際に自分の五感で体験してみることが大切である。その体験は多ければ多いほど、また困難で苦痛が大きいほど、これから社会人としてものごとを考え、判断するときに役立つような気がする。そういえば、私は入社して配属されたのは、和洋酒売場だったが、チーズを片手に毎日のようにワインの試飲ばかりしていたのを思い出す。確かに本を見れば、ぶどうの産地についての説明、味についての説明が書いてあり、知識を身につけることはできるし、それをお客様に伝えることはできる。しかし、説得力がないのである。実際飲んでみなければ、その味を体験しなければ、本質をとらえることはできないのである。

★自分の意見をもち、主張すること

産政塾では、企画実施後、グループ討議・意見交換の場が毎回あるが、その場で塾長は必ず持論をのべる。「僕はこう思う。君たちはどう思う。」これをみて、「かっこいい」と素直に思った。私もこれから使わせてもらおう。仕事において、自分の意見をもち、主張することは、簡単そうで実は大変難しい。それは日頃から常に高い問題意識が必要とされるからである。私も意見を聞かれることが多くなった。そのときに自信をもって答えられるように、訓練していきたい。

△おわりに▽

2004年1月にはじまり、7カ月間あつという間の第15期産政塾であったが、これで終わりではなく、塾生のみなさんとはこれからも末永く交流をつづけていきたいと思う。塾生のみなさんと知り合えたこと、各企画での体験を通じて学んだことは、すべて私の貴重な財産である。いつまでも私の胸の中に「産政塾」という名前で保存しておきたい。少し大げさだが。

最後になりましたが、小田桐塾長、事務局の竹川さん、第15期塾生のみなさん、7ヶ月という短期間でしたが、大変お世話になりました。そして今後ともよろしく願います。

産政塾活動を振り返って



トヨタ車体株式会社

奈須克昭

<プロフィール>

なす かつあき (33歳)

- 1970年11月 愛知県名古屋市に生まれる
- 1993年4月 トヨタ車体(株)入社
経理部原価管理課へ配属
- 2001年1月 人材開発部人事室へ異動
- 2001年11月 同 人事企画室へ異動
現在に至る

<家族> 妻、長男

<趣味> 野球(草野球・プロ野球観戦)、
ゴルフ、スキー、釣り

1、はじめに

自己研鑽の場として、「殻の外へ踏み出そう」をテーマに2004年1月に第15期産政塾の活動が始まりました。入社して11年が経過し、会社にどっぷりと漬かっていた日々が今一度、新鮮な気持ちで自分を見つめ直す機会が与えられ、またとないこの機会を必ずや今後に生かすべく、積極的に取り組む心構えで第1回目の産政塾に参加しました。

2、産政塾への参加に当たって

まずは、会社生活を振り返ってみると、スタートは経理部でした。自分の希望は人事部だったのでとても残念な思いをしたのを覚えています。しかし、会社のしくみや企業活動を勉強するには、うつつのところで仕事をする事ができました。会社の活動を把握するには、人・物・金とよく言われますが、金という側面からの知識を身につける事ができたと思います。また、仲間にも恵まれ、仕事に打ち込み、吸収できることは何でも前向きに取り組みました。その後約8年間、経理部で勉強し、念願かなって人事への異動となりました。ロケーション的には、ちよつとした環境の変化（本社事務本館の4階から3階への引越し）でしたが、仕事の仕方や人を機軸にする仕事の進め方など、思考面での変化は大きいものでありました。

今回、会社の枠を越えて、幅広い視野の発想や判断、価値観とはどういうものかを実践を通じて磨

く場として、期待を膨らませて産政塾に参加しました。加えて、社外・他業種の人と出会う稀有な機会でもあり、新たな出会いも楽しみでした。

3、殻の外へ踏み出すということ

「殻の外へ踏み出そう」という産政塾のテーマは、実践することがあまりにも難しいテーマだと感じていました。では、自分にとっての殻とは何かを考えた場合、以下の観点から捉えることが可能と思われます。

一つ目は、自分が築いている殻、すなわち自分自身で作っている「限界」ではないでしょうか。これまで自分の不得意としていたところには、なかなか積極的に踏み込めませんでした。未知の領域への挑戦を苦手にしている自分にとって、今回の取り組みをきっかけに、今後へ生かしていかなければと思っていました。

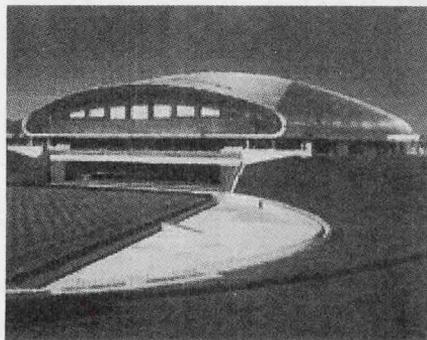
二つ目は、「自分の知らない世界」。日常では見たり、聞いたりすることの全くできない場所やそうした人との出会いです。今回の産政塾への参加で自分が一番意識し、重点的に取り組みたいと考えていたところでは、今回のような機会でもないと、なかなか実現できない非日常を経験してみたいと考えていました。昨年の企画で言えば、簡単に訪れることができないメーテレ訪問がそれに当たるのではないのでしょうか。

4、産政塾への参加を通じて

「殻の外へ踏み出す」ために、各グループが知恵を出し合いいろいろな企画が提案されました。われわれDグループの企画は、製造業を中心に景気が好調な愛知を飛び出し、他の地域での活性化に向けた取り組みを学ぶ企画としました。行き先は、本州を飛び越え、まだまだ厳しい状況にある北の大地、「北海道」です。今回の産政塾で唯一飛行機に乗り出張する企画となり、産政塾のメンバーの期待をひしひしと感じながらの準備となりました。このプレッシャーは、自分だけではなく、Dグループ全員が感じていたことは言うまでもありません。

それにしても、「北海道」企画のひと月前まで、具体的な内容が固まっておらず、本当に実現できるのか危機的状況で、実際に企画の準備が終わるまでは、冷や冷や・どきどきの連続でした。5月27日の出発日を無事に迎え、名古屋空港の出発ロビーでメンバーと話をしていた時には、まだ終わっていないにもかかわらず、何かやり遂げた達成感を感じていました。

実際に北海道へ入り、事前にアポイントメントを取った各見学先へ訪問した際に、お願いした内容以上の手厚い対応をして頂いたことに驚きを覚えました。先ず1日目は、札幌ドームを訪れた際に、大幅に時間を超えて、熱のこもった話を伺うことができました。世界のどこにもないホバリングサッカーステージ（移動式天然芝サッカーフィールド）

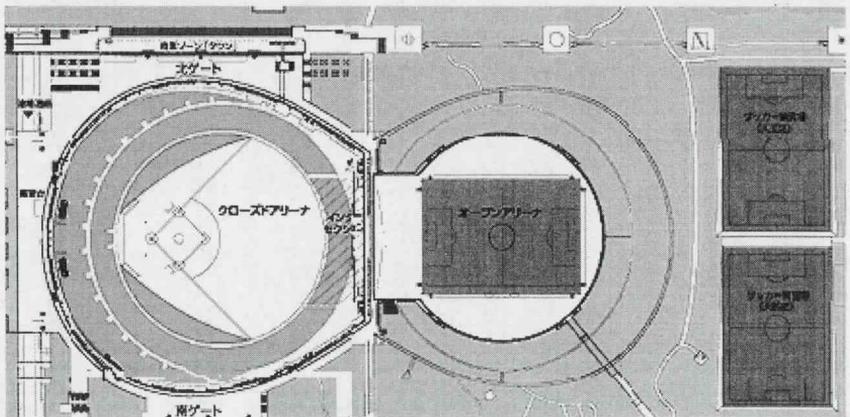


左側の天然芝がドームへ移動

ルド)に愛情を持って仕事をされている担当者や北海道日本ハムファイターズ誘致に取り組まれた島津取締役事業部長の話など、参加者全員が楽しく、かつ真剣に話を聞くことができ、とても勉強になったと思います。特に、日本ハムファイターズ誘致の裏話(球団が日本ハムに決まるまでの経緯)や新庄選手にまつわるエピソードなどは、野球好きの自分にとっては、非常に興味深く話を聞くことができ、ある意味で感動してしまいました。

翌日の2日目は、雪印と北海道庁を訪問しました。

雪印では、過去2度の不祥事を全従業員一体となって乗り越えようとする真摯な取り組みについて、貴重な話を伺うことができました。不祥事を境に、会社の規模(売上高や従業員)は、ほぼ半分に縮小し、大変厳しい状況の中、必死に取り組んでいるとのことでした。新生雪印への復活に向けて、消費者に視点を置いた行動改革、従業員の意識改革など、企業体質の変革に向けやらなければならないことが山積している状況が、ひしひしと伝わってきました。と同時に、同じ製造業に身を置く者と



野球場・サッカー場の位置関係

して、今一度肝に命じなければならぬと身の引き締まる思いでした。今回、このような社外に話し辛い内容にもかかわらず、我々とオープンに意見交換をされる姿勢に、復活に懸ける思いの強さと真剣さを感じられました。1歳半の息子を持つ親として、毎日子供が口にする乳製品の問題だけに関心が強い内容でした。引き続き新生雪印に向けて、頑張ってもらいたいと思います。

最後に北海道庁を訪問しました。30分と限られた時間の中で、北海道の地域活性化への行政施策の説明と意見交換をさせて頂きました。具体的なテーマは、経済部の「産業活性化プログラム」（北海道産業が有する潜在能力を顕在化させ、競争力のある企業を形成する取り組み）、「一村一雇用おこし支援」、知事政策部の「産消協働」（地元の生産物・サービスを地元で消費しようという運動）、企画振興部の「道州制の取り組み」の4つ。北海道の厳しい経済環境を回復させるための雇用創出プランなど、活性化への施策にいろいろと知恵を出し、前向きに取り組もうとしている状況を感じ取ることができました。当然のことながら説明頂いたのが、北海道庁職員の方だったので、堅い話になるのではと心配したのですが、ある職員の方から、「今、絶好調の愛知からなぜ北海道の取り組みを勉強しに来たのか。不思議ですね？」と冗談がでるくらい、ざっくばらんに意見交換ができ、有意義な時間とすることができました。

今回、自分の「北海道に行こう！」から始まった企画を無事終えることができ、ほっとしています。竹川さんには、本当に行けるのだろうかとか心配をお掛けしましたが、多大なるご支援を頂き何とかやり遂げることができました。今から思うと行き先を北海道にしたことは、すごく旬だったように思います。野球に関してだけでも夏の甲子園での駒大苫小牧高校の優勝や、新庄の活躍による北海道日本

ハムファイターズのプレーオフ進出といった明るい話題により、北海道に活気が戻ってきています。当然、北海道経済にとっても、好転する材料になっているに違いありません。

5、最後に

今回、産政塾に参加して、「殻の外へ踏み出す」というねらいをどこまで達成できたかを評価するのは、正直いって難しいところです。しかし、各企画への参加や、Dグループの企画を通じて、日常では経験することが難しいことを実体験できたことは、自分にとって今後の人生の中で必ずプラスとなると思います。特に北海道企画では、自分の「限界」や「知らない世界」について考える機会になったことは間違いありません。また、「挑戦することの大切さ」を体験できたし、「やればできる」という言葉を改めて思い出すこともできました。これからも、「殻の外へ踏み出す」努力を続け、より広い視野を持って取り組めるよう頑張っていきたいと思えます。

一方、今回評価できることとしては、当初のねらいでもあった会社の枠にとらわれず、今までの交流範囲を越えた新たな人とのつながりができたことです。今後もし引き続き、第15期のメンバーとのつながりを大切にしていきたいと思っています。最後になりますが、産政塾へ参加する機会を与えてくれた会社や上司、そして数少ない皆勤賞としてすべての企画に参加できたことに対し、職場の仲間へ感謝申し上げます。

今から思うとあつという間の期間でしたが、小田桐塾長をはじめ塾生の皆さん、事務局の竹川さん、

いろいろお世話になりありがとうございます。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。
いました。

PS、Dグループの皆さんまた飲みに行きましょね。

日本人であることの再認識



株式会社豊田自動織機

野々垣 一

<プロフィール>

のがき はじめ (37歳)

- 1967年11月 愛知県一宮市生まれ
- 1990年4月 (株)豊田自動織機製作所入社
- 2000年9月 人事部人材開発室配属
～現在に至る

<家族> 独身

<趣味> 音楽、映画、読書

① イチローとラストサムライに見る日本人

渡米して4年目の今年2004年、イチローはジョージ・シスラーの持つ大リーグ記録257安打を8年ぶりに更新し262安打を達成した。感情を静かに抑え何事にも動じず泰然と仕事をこなす姿には米国人も感服し低迷するチームにあつてシアトルだけでなく全米中が注目した。米国のメディアも「イチローは歴史になった」「不滅の偉業」とこぞつて称賛した。日本人が海外で活躍し海外で本物と認められることは同じ日本人として素直に嬉しい。好き嫌いは別にして、極めて日本的なスタイルを貫くイチローは侍とも比喻され、米国社会で認められた。

侍と言えば、今年ヒットしたハリウッド映画「ラストサムライ」の撮影の前に主演のトム・クルーズは新渡戸稲造の「武士道」を読んで役作りに臨んだという。私は何の知識も持ち合わせていなかったのだが、たまたま書店のベストセラーに名を連ねたこともあり、「武士道」を読んでみた。著書の中には武士の社会だけでなく日本人全般にあてはまる（あてはまった）精神性について記されており、なানাあでも過ぎていつてしまいうい加減さ、喉もと過ぎれば熱さ忘れるといった性質、日本人の特徴の中にはこんな部分も確かにあるのだが、寛容さ、卑劣な行動や不正な行為を忌み嫌うストイックな道徳観念・品性、礼儀正しさ、親切さ、我慢強さ、勤勉さ、潔さ、勇敢さなど、世界の中でも誇らしい部分が多いことを改めて実感した。

はつきりと態度を表さないなど、とかく誤解されることも多い日本人ではあるが、イチローの活躍やラストサムライのヒットなどをきっかけに、米国社会を中心に日本人のイメージが過去とは異なり毅然としたものに変わってきたのではないかと感じている。また日本人の本来持ち合わせてきた高潔

な精神性はグローバルイズムが進展する中にあつても実は普遍の美德なのかもしれない、もつと日本人であることに自信を持つて良いのではないかと感じた。

② 現実の日本人

では最近報道される実際の日本の現状はどうだろう。卑劣な犯罪が毎日のように伝えられる。中でも老人を狙ったオレオレ詐欺や新潟の地震被災者救済を謳い文句にした詐欺など、人の弱みにつけこんだり、善意を逆手にとるような恥ずべき事件が多く、先に取り上げたような日本人の精神性がそこには微塵も感じられない。

日本は他から侵略されることもないまま今日を迎えている世界でも稀有な恵まれた国である。それがために自分たちが日本人であるということを意識する機会が少なくて済んできたのか、その結果、日本人の精神性を引き継いでいくことが希薄になってしまったのか。あるいは経済が発展し、またアメリカの文化・資本が流入し、その物質的な豊かさの享受と引き換えに日本人のすばらしい精神性を過去に置いてきてしまったのか。いずれにしても日本人には本来持ち合わせているはずの精神性が希薄になってしまっている。

自分を振り返ってみても、先に誇らしいと取り上げた日本人としての高潔さを持ち合わせているかと言うと、甚だ疑問である。易きに流れていないか、言い訳をしていないか、漫然と過ごしていないか、思い当たる節がいくつもある。

③ 日本人としてこうありたいという生き方

先日、祖母の何回忌かの法事で檀家寺の和尚さんと話す機会があった。「人は生きていく上で耐えがたい苦しみや思いがけない不幸に見舞われることがしばしばある。それは避けては通れない。文明が発展して昔味わった苦しみが消えたとしても、過去にはなかった新たな苦しみが現れる。これは人間が極楽浄土へ行くために与えられた試練である。」和尚さんの説く説法の中の一説なのだが、宗教がどうかとは別に、楽しいことや幸せなことばかりで一生が終わることなどないのは万人にあてはまる真理だろう。

迷ったら基本（原理原則）に立ち返れと先輩から教えられたことがある。では困難が待ち受ける人生を生きるために何が原理原則かと考えた時に「感謝」「誠実」「努力」この三つが自分の中では生きる上での基本だと考えてきた。実はこれは近所の食品スーパーのモットーで、その店が出す新聞の折込チラシにはいつもこの三つの言葉が印刷されている。初めてそのチラシを見たときに、なるほどこれは商売だけでなく正しく生きる上での基本だなあと大変印象に残り、その後、いろんな局面でそんな事など忘れてしまったような行動・言動をしてしまうと、「いかん、いかん」とたまに思い出すようにしている。なおたいへんお値打ちなその食品スーパーは庶民の強い見方となって極めて繁盛している。

今回、産政塾の卒業に際して、殻の外に踏み出すために何が変わらなければならぬか、何を変えたいのかを改めて考えてみた。「感謝」「誠実」「努力」この気持ちの基本があれば、人生のたいいていの場面で上手に生きていける生きる上での基本だと考えてきた。しかし今回産政塾卒業にあたり、思

いをめぐらせてみるとう一つ「勇気」が必要だと改めて感じる。

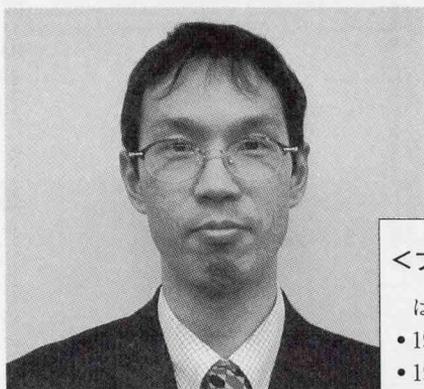
現状に甘んじることなく夢や正しいと思うことに向かってリスクを負いながらも一步を踏み出す勇氣。先にイチローの大リーグ記録の話題に触れたが、実は私個人としては日本人大リーガーの中で一番偉いのはイチローでも松井でもなく野茂ではないかと思っている。未知の世界である大リーグに飛び込んだ野茂の活躍に刺激を受けて、日本のプロ野球選手が続々と海を渡っていった。野茂がいなければイチローの大リーグ記録更新はなかったかもしれないのである。それだけ野茂の勇氣は尊い。

「感謝」「誠実」「努力」さらに加えて「勇氣」。簡単に身につくはずもないけれども、つつい安易な道を選んでしまいがちな自分を戒め、これらを意識した行動を繰り返しながら自分の心と体の中に刷り込めていけたらと思う。さらには日本人が本来持ち合わせてきた高潔な生き方に近づけるよう日々精進していきたい。

④ 最後に

イチローの活躍、ラストサムライや武士道のヒット、2004年は日本人として誇りの持てる一年であった。そんな年に産政塾を通じて自分の生き方を改めて考えることができたことに感謝している。塾長、事務局、塾生みなさまにお礼を申し上げ、これからの人生に勇氣を持って新たな一步を踏み出していきたい。

産政塾を振り返って



豊田工機労働組合

早矢仕 環

<プロフィール>

- はやし たまき (33歳)
- 1971年 7月 岡山県生まれ
 - 1998年 4月 豊田工機㈱入社
部品海外事業部配属
 - 2003年 8月 豊田工機労働組合 専従執行委員
現在に至る

<家族> 妻(33歳)、長男(6歳)、長女(3歳)

<趣味> 釣り、ゴルフ、スポーツ、アウトドア、ドライブなどいろいろ

やっぱり最終週にまで持ち越してしまった。分かっていたのだが……。

○ はじめに

約8カ月に及ぶ産政塾の活動を振り返ってみて、「もう1期やつてみたい」と素直に感じている。産政塾は、様々な人と出会い、様々な企画を通じて議論し、その中で何かを感じたり心に刻んだりすることができるところだよ、と上司・先輩から教えられていた。そしてこれらが必ず将来役に立つとも。過去の塾誌もいくつか読んだが、なるほど大変有意義な集まりだと思った。それは単に企画そのものではない。うまく表現ができないが、何か今後の産政塾の活動に期待を寄せるものがあつた。

さて、私は今の会社に入社して6年半ほど経過している。そして1年ほど前から縁あつて労働組合という大変大きな組織に身を置くことになった。私は人と接することは億劫ではない。むしろ好む方ではあるが、自ら何かをしゃべろうとすると途端に緊張し頭が真っ白になる。何をきっかけに、何をどう喋ればよいのか、相手からの質問をあれこれと空想したり、そうこうしているうちに行動に移せなくなったり、といった始末である。どこか完璧主義なのか、何かの型にはめようとしている自分がある。石橋を叩いて渡るところではない。岩盤を幾度と叩いて確かめながら渡りようとする性格である。そんな自分の性格が良い時もあるが、どちらかというと、そういった几帳面で慎重な性格を崩したいと思うことの方が多い。

今思うと産政塾はそのことを少しでも変える事ができる1つのチャンスだった気がする。このよう

に書く結論が見えた気もするが、それは最後に取っておくとして、さっそく参加した企画を中心にその内容と、自分の実生活も織り交ぜながら感じたこと、思ったことなどを綴っていききたいと思う。

○ 産政塾の活動

第1回 産政塾 開塾式

産政塾一回目の集まりだったが、残念ながら業務の都合で参加することができなかった。このことが後々の産政塾への出席率の低さにつながってしまったかと思うと、この産政塾に対する後悔の1つである。何事も始めが肝心である、と改めて感じた。

翌日、事務局の竹川さんから前日の様子が書かれたメールとともに、15期生の名簿、企画一覧が送られてきた。私はBグループ、メンバーは石原さん、原さん、棚橋さん、千田さん、そして私の計5名。(よろしくお願いしまっす!)企画は「CSから学ぶ(オリエンタルランド)」。自分にとって非常に関心のある企画を立案してもらったと思った。(どうして何年も続けてあれだけの人を惹きつけることができるのか?単にキャラクターの強みなのか?あるいはもっと他に?)それにしてもわがBグループの企画は大掛かりになりそうだ。でも今回のグループの中で最後の担当ということで7月まで約半年あり、なんとかなるのだろうと……。

当日またしても社内業務と重なっていたが、さすがに連続欠席はできない、と思い神戸に向かった。この企画は、結果として私にとつて15期の活動の中で最も印象に残ったものであった。ちょうどこの頃、東南海地震の発生が叫ばれていた頃であり、職場の中でも、地震に対する意識付けや防災準備の心掛けに対して取り組んでいた時期でもあった。(偶然にもこの塾誌を書いている間、新潟で大きな地震が発生し、たくさんの方の死者・負傷者があり、大きな被害が起きている。地震発生日はしばらくテレビに釘付けになり、神戸(記念館)に行つてからしばらく薄れていたあの記憶や興奮が少しずつ頭によみがえつてきた。)

さて記念館に話を戻そう。現地集合後さっそく見学が始まった。はじめのシアターでいきなり度肝を抜かれた。震災を再現した映像が約7分間上映されたが、あまりのリアルさに圧倒されたと言ふような言ひがなかつた。スクリーンを見る手にも自然と力が入つた。震災を語り継ぐコーナーや震災からの復興をたどるコーナーを見学し最後に阪神・淡路大震災を語り継いでいるボランティアの方からの話を聞いた。特に印象に残つた言葉が、「自分の命は自分で守る」ということ。当たり前のことだが、とかく最近のものごとを人のせいに行したり、人任せにする風潮があると思う。少なくとも自分の身の回りのことぐらひは自分でしなければならぬ。

震災当時、私は九州に住んでいたため、神戸の様子はテレビでしか知る由もなく、自分の中では、どちらかというとその悲惨さを実感することは回りで騒がれていたほどではなかつた。いまやこの愛知県に住まいを構え、2人の子供も持ち、永住しようとしている中、一方では東南海地震は確実に来るとも言われており、このままで本当に自分の家族が守れるのか、と本気で心配になつた1日であつ

た。さっそく防災用品を買ってきました、と書きたいところだが、ある程度の準備が揃ったのはそれから半年後であった。

第5回 竜神保育園&トヨタチャイルドケア ぶうぶらんど

私は6歳の息子と3歳の娘をもつお父さんです。年休の時には幼稚園の送り迎えもします。この子供達が幼稚園で1日どのように過ごしているかいつも気になって仕方ないんです。透明人間になつてとは言わないが、幼稚園での様子を陰に隠れて覗いてみたいものだ。いわゆる「親ばか」ですね。会社ではそんな素振りは見せないが、この子羊達がかわいくて仕方がない。と言いつつも、仕事から家に帰ると毎日が戦争状態で大変なんです。親ばかであるはずの自分がどこかへ行つてしまっている時もある。

「子供」というのはとても正直です。こちらが目線を合わせ、面と向かつて話をしたり態度に表せば、相手が慣れ親しんでいる先生でなくとも、彼らを惹きつけることができる。どこか今の仕事にもあてはまりそうな気がした。

それにしても、今の日本を見ていてこの子供達の将来は大丈夫なのかと思うことが最近が多い。自然界に起因することや社会的な出来事など、何かと不安だらけである。本当は私たちのような若い世代がもつと声を上げ、そんな社会を変えていかなければならないのだろうと思う。自分のことが精一杯で周りのことまで考えられない世知がない世の中なのだろうか？

第6回 博物館明治村

あれ、ミッキーはどこ？ドナルドは？いえいえ、これから明治時代へタイムスリップです。（リーダーの石原さん、本企画の調整や実行にあたり最初から最後まで一手に進めて頂きありがとうございます。）

いよいよ最後の企画、わがBグループの担当である。私は愛知県に住んで6年半になるが、明治村を訪れたのはこれが初めてである。さすがに存在は知っていたが、小さな子供がいるとどうしてもモンキーパークとかビーチランドで足が止まってしまう。

それはさておき、この企画のテーマは「新たな発想・創造を追及する」であった。重たいテーマではあったが、今の自分にもつながるものと思い、企画側ではありつつも参加者としても何かを得ようと館内を歩いた。明治村所長の話では、ここ10年ほどの入場者数は減少の一途を辿っており、最近では最も多かった頃の4分の1近くにまでになってしまったと。何とかしてこの減少を食い止めたいと奮闘しておられる様子でした。しかし、客寄せのために単発的に何かを仕掛けても結局は変わらない。枯れた木にいくら水や肥料をやっても根っこが腐っていてはどうしようもない。現状把握、要因解析、対策といったどこかで聞いたことのあるサイクルがここでも効いてくるのだと思った。またその中に「発想力・想像力」が織り込まれることによって中味の充実した方策が得られるのだろう。新たなことを始めることは大変難しいことだと思う。しかし、どれだけたくさんの発想力や想像力を持っているかでその幅の広がりが変わってくるのだろう、とも感じる事ができた。今の自分に足りない最も必要なものの1つである。

所長の話の中で「一番古いということは一番はじめにやった」という話があった。何か狐につままれたような言葉だが、やけに心に残った一言であった。

残念ながら第3回の愛知万博会場・中部新国際空港（セントレア）、第4回の札幌ドーム・雪印乳業・北海道庁へは、業務の都合上参加できなかった。いずれも時流にあった、話題になったものとしては是非とも参加したい企画だった。

第7回 産政塾 閉塾式

ここでは産政塾参加のまとめとして少し書こうと思う。

入塾当初は、塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」ということはあまり考えていなかった。それは企画の中のディスカッションや塾生との話の中で少しずつ意識するようになった。「殻を踏み出す」とはどういうことか？私は、卵からひよこが生まれ鶏となるのと同じように、殻を踏み出すことで自分が一回りも二回りも大きくなれることだと解釈している。先にも書いたが、自分には、思っていることがなかなか口に出せない、思っていることを先に考えてしまい行動に移せない、という性格がある。必ずしも消極的というわけではない。またどうかするとつつきにくい人と思われるがちではないかと感じている。今の職場の自分に求められるものは正反対にあるではないか。直したい、そこから一步先に進みたい、と昔から思っていた。さて産政塾に参加してどうだったか。気づきや意識の面では成果はあったが、残念ながら結論はノーだろう。まだまだである。

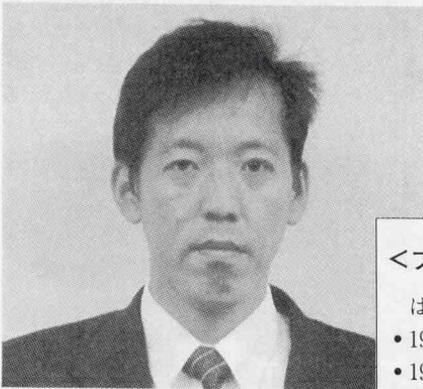
「とにかく思い立つたらやってみよう」産政塾参加後の思いである。はじめから完璧にできるはずがない、とは思いつつもまだまだ自分にとってハードルの高い目標である。幸いにも実践できる環境が回りにある。地道に頑張っていきたい。

○ 最後に

この産政塾に参加することで、小田桐塾長や事務局の竹川さんをはじめたくさんの人に出会い、自分の宝物が増えたことには間違いありません。ありがとうございます。またメンバーの皆さまとも今回だけでなく、これからも交流を持っていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

(納期が明後日に迫り焦りながら綴ってきましたが、何とか規定数に届いたようです。)

自分を取り巻く“殻”について



アスモ株式会社

原 誠 治

<プロフィール>

はら せいじ (37歳)

- 1967年 宮崎県児湯郡高鍋町生まれ
- 1974年 小学1年のとき、長崎県佐世保市へ転校
- 1976年 小学3年のとき、静岡県浜松市へ転校
- 1991年 アスモ株式会社入社、人事部給与課配属
- 1994年 人事部人事課労務係（現人事総務部人事室）へ異動
現在に至る

<家族> 妻、長男（8才）、次男（4才）、父、母、妹

<趣味> 車（現在はファミリーカーのため停滞中）、映画（アクションもの）

〔はじめに〕

十月二十三日（土）十七時半頃、会社から帰宅。この原稿の締め切り日まで、残り一週間をきってしまったことにあせりを感じ、何を書こうかと考えていたところ、十八時頃、家がわずかではあるが揺れた。（私の家は浜名湖の北、静岡県引佐郡細江町という田舎にあるが、来年は市町村合併により、曙れて、他県の人でもわかる浜松市となる予定である。）「地震か？」と思い、テレビをつけたところ、新潟県中越地方震度6強という地震速報のテロップが流れ、あつという間にテレビでは各局で緊急特番が組まれていった。私はそこから翌日の日曜日の就寝時間まで、テレビにかぶりつくことになる。

（第二回目の産政塾で訪問した神戸の人と未来の防災センターを思い出すとともにこの原稿に全く手がつけられていない状態をマズイと思いつつも、貴重な土日が過ぎ去ってしまった！）

それ以降一日一日、何を書こうかと迷った挙句、とりあえず何かを書き始めなくてはと思い、パソコンに向かったのは締め切り直前の前日。頭の中で考えがまとまらないまま、見切り発進となつてしまった。

〔産政塾参加の経緯〕

さて、私の産政塾への参加は、突然決まった。もともと仕事が労働組合の窓口を行っていることも

あり、産政塾の存在自体は以前より知っていたが、三十五歳を超えている私に声がかかるとは思ってもみなかった。今思い返すと上司から声をかけられた際、参加を拒むことも可能であったと思うが、私自身が参加を決意したきっかけは、本論文のテーマでもある「殻の外へ踏み出そう」という問題提起に惹かれたからである。

あらためて「殻」という単語を辞書で調べてみると「(比喻的に)自分の世界を外界と隔て守るものをいう」とある。自分の世界を守るという意識は、自分にとって少々違和感があるが、会社に入ってから十四年目に突入、人事関係の業務オンリーでやってきた自分が、急激に変化する世の中の状況に流されて、仕事をしていることをつくづく感じるが多くなってきたところに、この話が舞い込んだ。自分自身の環境に何か変化が欲しい、現状を打開したい、そのきっかけづくりとなればと期待し、申し込みを決意した。

「自分を取り巻く“殻”」

辞書に載っていた「殻」のニュアンスとは少し異なるかもしれないが、自分を取り巻く「殻」で、自分自身その外へ踏み出したいと考えているものは、主に以下の3つがある。

1つ目は自分の性格という「殻」。性格には、天性で備わっているものと子供のころからの生活環

境による影響から形成されたものがあると思うが、この子供のころから幾重にも重なって形成されてきた「殻」というものは非常に硬く、成人となってからこれを破ることは非常に困難なことであるとあらためて感じる。

仕事をする上での自分の性格を考えてみる。全てがそうではないと信じたいが、悪い面として挙げられることは、保守的な部分、面倒くさがりな部分、石橋をたたいて渡るような慎重な部分といった性格が見え隠れするときがあることである。今現在、世の中や会社の中でも求められている変革や挑戦というキーワードとは、まさに相反する部分である。そんな性格が自分の中に湧き出してくるときがあると、相当嫌気が差し、自分の性格を腹立たしく思う。この感情を取り除くことが出来れば、性格という「殻」を破ったと言えるのだと思うが、残念ながらその答えはまだ見出せないのが現状だ。

2つ目は会社という「殻」。プライベートとなれば、結婚や子供の誕生等、人生における大きなイベントにより、刻々と変化していく過程が明確であるため、そう「殻」というものは感じない。一方会社生活の方を考えてみると、そもそも私は学生るとき、社会人になって、何をしたいのか、何が自分に適しているのかを真剣になって考えることもないまま、就職活動に突入してしまった。今の会社を就職先として選んだのは、もともと自動車が好きで、自動車の何らかに関わっている地元の企業に入ることで、自分のやりたいことが見つかるのではという希望を抱いたためである。そのため、プロフィールにも書いた最初の配属先である人事部という部署は、自分の人生にとって、自分が期待した

こととはかけ離れた、偶発的なものに他ならない部署ではあるが、その人事部にどっぷりとつかって十四年目となる。人事の仕事が、自分に合っているかどうかを考えてみると、どちらかといえば合っていないと思うことも多いし、人のことは面倒なことが多いと思うことも少なからずある。その一方で、世の中には自分の好きなことを楽しみながらやって、そのこと自体が生活の糧となっている羨ましい人々も実際にいるわけで、自分も会社という“殻”の外へ出ることそのものである転職を夢見ることも正直あるが、他にこれといった取柄もなく、家庭を背負っている私にとっては、そのような度胸も勇気もない。長年人事畑にることによって、社内のいろいろな人や会社内の全体の動きは他の職場に比べると接触する機会は多くあると感じるが、社外との接触はほとんどない状態にあり、そんな状況からも限られた狭い枠組みの中に閉じこもっている気がしてならない。このこと自体は、自分にとって安住感となっていることも事実としてあるが、その一方で変化に乏しく、刺激のない状況となってしまうている。

3つ目は人間関係という“殻”。特に人と付き合うことが苦手という意識はないが、やはり自分の置かれている環境下では人との出会いやその範囲については、狭く限られたものでしかない。家族、親族、会社の上司や同僚、学生時代からの友人、近所の人等、自分の周りの世界には限界があり、社に出てからは、自らが進んで、積極的に外の世界の人との出会いを求めていく時間も余裕も乏しくなってしまう、人間関係の範囲を自らが“殻”をつくって囲ってしまっている感がある。さまざまな人との関わりは、仕事をする上でも、また生活をしていく上でも非常に大切なものであることは自分

でも十分に理解しているつもりである。一人ではできない物事を進めたり、自分の知らないことを教えてくれたり、自分では気づかないことを気づかせてくれたりと、その有難さを実感できるのは、人脈の広さと良好な関係を築き上げることで実現する。その上でも人脈を積極的に広げることを意識した行動を取ることが望ましいし、自分でもいつも心掛けたいと思っていることの一つである。

〔産政塾への参加がもたらしてくれたもの〕

先に述べた自分自身を取り巻く3つの「殻」については、決して受身の姿勢では破ることができないであろうし、もし外的な要因で「殻」が破られたとしても、決して外に踏み出すという行動に移すことにはつながらないであろう。その意味では自らが産政塾への参加を決意したこと自体が、少なくとも2つ目の会社という「殻」の外と人間関係という「殻」の外へ踏み出すきっかけを十分に与えてくれたものと感じている。まず普通に生活をしていたら全く接点がない未知の世界(第五回目の保父体験は自分にとってその最たるものであった)を体験することが出来たし、また製造業とは離れた他業種の塾生の皆さんとの出会いから自分の見識の狭さを実感し、学ぶことも多かった。本当に貴重な体験をさせてもらったことに感謝している。

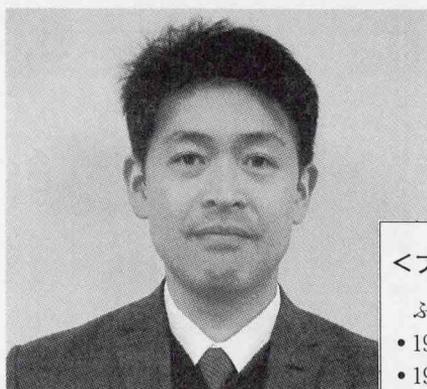
〔最後に〕

結局自分を取り巻く1つ目の性格という「殻」を破ることにについては、前述のように答えを見出せないでいる。しかしながら、閉塾式の際に小田桐塾長がおっしゃられた「『殻』を破るのはこれからだ」という言葉は、これから必ずやその答えを見出すチャンスが見つかるとの期待を抱かせる非常に心強いものであった。しかし、やはり何事にも受身の姿勢では事が始まらない。これから自分が心がけていきたいことは、自らが「殻」だと思ふものを破ることに果敢にチャレンジし、またそうではなく、外的な要因により「殻」が破られたものであったとしても、外の世界を覗くチャンス逃すことなく、積極的に殻の外へ踏み出していきたい。その行動こそが自分の人生をより豊かなものができるのではないか。

自分自身の責任ながら締め切り日に追われ、取りとめのないことをまともなくズラズラ綴ってしまい、非常に稚拙な文章となつてしまったことは恥ずかしい限り（塾誌に掲載されるものを、自分で二度と読み返すことはないであろう）ではあるが、ここに書きとめた思いはこれからもずっと心の中にしっかりと刻むこととしたい。

最後に短い期間ではあったが、小田桐塾長をはじめ、事務局の竹川さん、そして第15期の塾生の皆さんに、大変貴重な体験をさせて頂き、お世話になつたことを感謝したい。本当にありがたうございました。今後ともご指導のほど宜しくお願い致します。

2004年に思ったこと



中部電力株式会社
藤 牧 知 広

<プロフィール>

- ふじまき ともひろ (35歳)
- 1969年 6月 愛知県生まれ
 - 1994年 4月 中部電力(株)入社
岐阜支店加茂電力センター送電課配属
 - 1998年 8月 長野支店長野電力センター送電一課勤務
 - 2001年 8月 静岡支店工務部送電課勤務
 - 2003年 8月 人材開発センター総括G勤務
現在に至る

<家族> 妻 (10月に結婚)

<趣味> ゴルフ・スキー・水泳

1、「スポーツマンシップにもっこり？」

今年の夏に開催されたアテネオリンピックでは日本人選手の活躍が目立ち、毎晩のTV観戦で寝不足気味の方も多かったと思います。その中で柔道や水泳でのメダルラッシュが目されていました。中年の星、アーチエリー銀メダリスト山本博選手が含蓄ある題記名言（迷言？）を残されました。

これは、帰国後のインタビュで披露した『おやじギャグ』で、同席していた数名のメダリスト達の中にいた谷亮子選手も（ちよつと困りながらも）微笑んでいたのが印象的でした。

さて、冒頭より「産政塾と無関係では？」と思われるかもしれませんが、個人的に、その関連性を大いに（あるいは強引に）アピールしたいと思えます。

特に近年の世代間ギャップを考えると、この『おやじギャグ』は一つのコミュニケーションツールと言えなくもありません。それを聞いた人の反応は様々ではありますが、家庭や職場などいろいろな場面で、少なくとも自分から垣根を壊し相手との距離を縮める効果をねらったものといえます。また、本人の能力・経験・体調・常日頃からの人間関係などに左右されますが、成功する確率は極稀だと思われず。

「サブルー！」とか「このおやじー！」とか言われ（思われ）、人格そのものまで否定され、煙たがられるという可能性を秘めた非常に危険な行為であります。そのリスクを負った上で更に挑戦し続ける勇氣ある人々が後を絶ちません。

世間からは阻害され、会社から見ると生産性の無いこの行為は、実は常人が計り知れない奥深さを

秘めているのでは？と密かに私は思っています。

具体的に説明するために冒頭の銀メダリスト山本選手に再登場願いたいと思います。

実際に題記名言を適用する場面を（かかってに）想定しますと…、

オリンピック開催前、日本アーチェリー協会会長○×△男氏開催の出陣式での山本選手の決意宣言にて、

「このたびは、私のためにこのような盛大な出陣式を開いていただきまして、感激しております。

前回のシドニーでは、残念ながら出場する機会がございませんでした。その時の悔しさをバネに生徒共々日々精進してきた結果、晴れがましくもこの舞台に立つことができました。日本アーチェリー協会会長はじめ様々な方の期待に応えるべく、また日の丸を背負い、恥をかかぬよう、初心に戻って、いわゆる『スポーツマンシップにもつこり』…、」

自殺行為であります。ブッシュ大統領のお面をかぶり、イラクの危険地帯ファルージャの通りを闊歩するのと等しい行為であります。JOCも出場辞退を通告する羽目に…。

これは間違った使用方法であります。

正しい適用場面を（かかってに）想定しますと、山本選手が教員として勤める大宮開成高校アーチェリー部にて、大会での選手宣誓を控えて緊張気味の生徒の前に、

「○○君（生徒の名前）、今日は晴れの舞台だね。先生が緊張しないおまじないを教えよう。暗記した宣誓文を忘れないためにも、この言葉を声に出さないように10回唱えてから宣誓し始めればいいから。（生徒達に向かつて）じゃー円陣を組んで！先生に続いて叫んでみよう！『スポーツマンヒップにもっこり！』、はい！（生徒）スポーツマンヒップにのっとり？、良く聞いて！『スポーツマンヒップにもっこり！』、はい！……」

適切な使用方法であります。極限の緊張状態の生徒に聞きたくもない『おやしギャグ』を叫びた瞬間、その生徒は自分の殻を破り、新たなコミュニケーション手段を会得するに違いないでしょう…。

突拍子もないこと、つまり「殻を破る」とは、他人の評価や今までの経験から得てきた教訓や価値観を覆すことであり、一歩踏み出すことが大変困難であり、一歩間違えたと屈辱の体験が待っているかもしれない高尚な行為とも言えます。

誰しも簡単に「殻を破る」ことはできません。しかし「殻を破る」のは自分自身です。他人を変えることよりも自分を変えることの方が遙かに実現性が高い行為であると思われれます。

「他人と過去は変えられない」、さる高名な方が言われた言葉ですが、（個人的には）心に残る言葉でもあります。言い換えると「自分と未来は変えることが可能である」、前向きな言葉ですね、ポジティブですね、しかしなかなか実行しようと思うと難しいことでもありますね。

自分を変えること、自分の殻を破ることは、自分の常識、生き方、人生観までを変えることかもしれません。しかし、努力しようとする心を持ち続けることが大切ではないかと思えます。

※山本選手ごめんなさい、有りもしない話を脈絡もなく書きつづってしまいました。これも、山本選手の手を越えてなお輝きを増す『おやじギャグ』に感動した…、いやもとい、輝きを増す人生に感激した、いちサラリーマンの独り言ですので…。

来る北京オリンピックや学校教育においても是非活躍を期待しております。

2、モチベーションあれこれ

今年の秋頃、「中国との国境線近く北朝鮮北部の両江道にてキノコ雲を伴う大爆発があった。」との報道がありました。

現時点(事故発生から5日目)では「核爆発ではない」との見解が専門家の中では支配的でしたが、「軍施設(ミサイル基地)での燃料や火薬の爆発ではないか?」と推測する人達もいます。その中の一人のコメントが興味深かったため紹介しますと、

「北朝鮮では、今まで軍関係者はエリートであった。しかし近年軍に入っても昇進できない、生活が豊かにならない、と言われていきます。このことが北朝鮮軍全体の士気にも関係し、兵士のモチベーションを下げている。このような状態が影響して、通常考えられないようなミスが発生して今回の爆

発に至ったのではないのか？」とのことでした。(後日、ダム建設時の爆破と結論づけていただきましたが、その真相は????)

では、日本の現状はどうか、と省みますと、確かに「人間系スキル不足」が原因と思われる設備事故が起きています。

スキル不足とモチベーションの低下との関連は一概には言えませんが、「検査項目に載っていないかつた」とか「委託業者から報告があつたが反映していなかつた」という話から想定しますと、設備を安全に維持するという目的を忘れ、ただマニュアルに沿って実施していただけではないか?と疑われてもおかしくない状況でもあります。

今までの日本企業では「モチベーション」という言葉は余り用いられませんでしたが。しかし、「やる気」とか「意欲」という概念では一般的に(誰でも)認識しているものでもありました。近年日本の成長が鈍化し(又は現状維持、あるいは低下)、冒頭の北朝鮮ではありませんが、仕事をしても見合つた給料がもらえない、お金に加えて見合つた地位が得られない、等々何のために仕事をしているかということに疑問を感じるような事象、つまりモチベーションの低下が指摘されています。

サラリーマンは会社のために人生を捧げ、会社は社員を養うという時代は既に過去のもの(?)であり、能力や成果にあつた報酬を払う(賛否両論ありますが)能力成果主義に移行されてきております。このような時代にモチベーションを維持するためには、各自の考え方を転換するしかないのでは

ないかと思えます。

仕事はお金や地位を得ることよりも、個人が人間として成長する場と認識する考え方があります。会社で働くことにより、今まで自分が持っていないスキル等を得ることができ、自分が成長することに価値を見いだすというもので、これを個人的に言い換えると「人の役に立てること」に喜びを感じることが、モチベーションアップに繋がるのではないかと思われまます。

またこれは、昔の日本ではごく普通に出来ていたことでもないでしょうか。

新聞には毎日信じられないような事件が載っています。これらが全て、日本の高度成長がもたらした歪みとは思いませんが、人間としての成長を重視した社会が今後進んでいくことにより、世の中が良い方向に向かつていくのではないかと思っています。

3、最後に

産政塾では、他業種に渡りいろいろな方と知り合うことができました。また、いろいろな考えをお聞きすることが出来ました。この「人との出会い」を大切にすることはもちろんですが、「人との出会い」は受け身では得ることが少ないとも感じました。

人との出会いは、自分から進んで初めて身になる。自分から努力して広げていく重要性を痛感しました。

「殻を破る」を自分で実行するならば、この「進んで人と出会う」ということが、私の手始めの殻

破りではないかと思っています。

この産政塾最後の企画「塾誌原稿作成」を、殻破りの始まりにしたいと思っています。

中部産政研の小田桐理事長を始め、大変ご迷惑をおかけした竹川主任研究員、各塾生のみなさま、今後ともよろしく願います。

「やれ！」と言われれば・・・



丸栄労働組合

別 宮 健一郎

<プロフィール>

- べつみや けんいちろう (33歳)
- 1971年 愛知県蒲郡市に生まれる
 - 1990年 株式会社豊橋丸栄入社
 - 1998年 丸栄労働組合 豊橋支部執行委員
 - 2003年 丸栄労働組合 本部執行委員(専従)
- 現在に至る

<家族> 妻

<趣味> 嗜む程度のお酒・ゴルフ少々

△塾？ 殻？▽

昨年の12月だったと記憶している。「書いて、FAXしておけ」という上司からの指示。渡された物のその内容は、「産政塾 第15期塾生募集」という案内状でした。「産政塾」というものの存在は、諸先輩方から聞いて名前くらいは知っていました。しかし、実際に何をやっているのか、塾生とやらになったら何をしなければならぬのかという詳しい内容は知りませんでした。

「塾」と聞くと幼少のころよりあまり（ほとんど？）勉強というものに力を注いだ記憶がない私にとって、ちょっと引いてしまう言葉ではありません。また、内容を詳しく読んでみると、「殻の外へ踏み出そう」ということでした。「殻」という言葉、私自身あまり意識したことのない言葉であり、「殻」の中にいるつもりもなかったし、かといって破ったという意識もなく、益々わからなくなる中、申込書の文中にあった「仲間をつくる」という言葉に惹かれ、申込書に記入したような気がします。

△ヒーロー▽

突然話は変わりますが、こういった自分自身について文章にするとという機会はありませんことなで、今までの自分を振り返ってみたいと思います。

この世に生を受けて30数年、なんて偉そうなことは今までに何もなく、幼少のころより、特に人より何かが出来るといってもなく、逆に劣っているわけでもなく、何をやらせても上の下（ちよっ

と言い過ぎました、中の上) くらいでありました。どちらかというところ、勉強より、運動をしているほうが好きで、成績も運動の方が良かったと思います。経歴で少し人に誇れることがあるとすれば、クラスの級長や児童会の役員、中学校の時は生徒会長に選ばれた(決して自分から手を上げたわけではない、体と声は大きかった、態度も?) ことくらいです。また、小学校のころより、剣道(兄がやっていた)と野球(当時仲良くしていた友達クラブに入った)を始めました。これもレギュラーにはなれるが、エースでも4番バッターでもない選手でした。

幼少のころ好きだったものは、ヒーロー物の番組で、ウルトラマン、仮面ライダー等テレビにかじりついて見ていました。後に母親から聞いたのですが、保育園に通っていたころ、先生に「将来何になりたい」と聞かれて、「ウルトラマン」と答えたそうであります。そのヒーロー好きは今でも変わらず、この年になっても見る映画、好きな番組はそういった系統(今はMr.インクレディブルに興味あり)のものが多く、恋愛物やサスペンス、SFなどは見てもすぐに寝てしまいます。きっと私にも、あぁいった潜在能力がどこかに隠れていると今でも信じていたのです。

△野球やってた? V

小学校、中学校から引き続き高校に入っても、野球部に入部しました。激戦区愛知県において、私の通う高校は夏の甲子園大会予選では1回勝てるか、2回勝てるかといったレベルでした。(優勝まではない6・7回勝たなければいけない) 入部して1年生の時は球拾い、雑用ばかりです(当たり前)。

同級生の中にも突出した力を持った者はおらず、みんな同じように雑用をこなす毎日でした。

余談ですが、甲子園大会の開会式の入場行進の際、アナウンサーが「全国何万人の球児の夢」なんてことを言っています、夢にもならない人がたくさんいます。(私も夢と考えられませんでしたが、どんな競技でもそうだと思いますが)

話は戻って、夏になり、最上級生が引退すると新チーム結成です。そんな中、同級生の中から1人レギュラーに選ばれました。私はどうかという背番号「14」をもらい見事ベンチ入りを果たしたのです。同級生の中からは、レギュラーになった1人を加えて、4人がベンチ入りしました。そのときの私の思いは、「ベンチに入れてよかった」程度であり、レギュラーとして活躍している同級生にライバル心を抱くとか、嫉妬するとかそういうことは感じませんでした。そして、そのまま1年間特に活躍するわけでもなく(練習試合で少し出させてもらえる程度)補欠として過ぎていきました。

そして、いよいよ最上級生としての年がやってきました。私は、私なりに熱い思いを持っていたつもりでありましたし、練習にも休まず出ていましたし、何よりも昨年一年間ベンチ入り(最終的には同級生が5人)していたのですから、当然レギュラーのポジションが確保されていると思っていました(そう思いますよね)。

しかし、我々が最上級生としての新チーム最初の大会で、監督が私にくれた背番号は「10」(高校野球では基本的に1〜9の背番号を付けた人がレギュラー)でした。私のポジションは三塁手であり、昨日まで、いや今日の今までライバルとも思っていなかった同級生が背番号「5」(高校野球の三塁手のレギュラーは基本的に5を付ける)を手にしたのです。そして、その大会の中で私の出番はあり

ませんでした。

△燃えた!!青春ドラマみたいにな

その大会が終わってからのは、私の中には何か感じるものがありました。もちろん、悔しいという思いです。そして、密かにチームメイトとは別メニューの練習を始めました。季節は秋から冬に向かつていくころであり、野球の練習としては、ボールを使った練習が出来なくなります。日も短いということもあり、ランニング、ウエイトトレーニング中心の練習は夏の練習と比較して、早い時間に終わるので、その後、チームメイトには内緒でトレーニングジムに、冬の間休むことなく通いました。

そして、暖かくなり、ボールを持って練習できるようになりました。そこでも私は、新たに行動を起こしました。早朝練習です。ベンチ入りできずに悔しい思いをしていた後輩を誘って、「俺はレギュラー、お前はベンチ入り」と目標を掲げ2人きりで始めたのです。

青春ドラマのような話はこちらからです。私の通った高校は、前で述べたように、野球の名門校ではありません。ごくごく一般的な、どこにでもある公立の野球部であり、早朝練習などやっています。そんな中、2人で早朝練習を始めたのです。強制ではありません。2人の間での約束も、例えば寝坊してどちらかがこられなかったら、1人でランニングだけで済ませよう。また、体調が悪いような時は「自分が行かないと1人ではたいした練習が出来ないから」などと無理をするのはやめようといった具合でスタートしたのです。

しかし、2人は毎日出てきました。私が冬の間1人でジムに通ったのとは違い、学校のグラウンドでたとえ2人だけとはいえ練習をしていけばみんな見て行きます。ある日「一緒にやらせてほしい」という部員が現れました。もちろんOKです。そして1人、また1人と増えていったのです。そして、最終的には全部員がそろったのです。全員自主的に集まってきたのです（少し感動しませんか）。

そんなことが、30数年生きてきた中で、唯一出来る自慢話です。夏の大会の結果は、ご想像にお任せしますが、近年にない好成绩でありました。

△そして、今▽

これまで書いてきた話は自慢したくて書いた話でもなく、情けない話をしたいわけでもありません。今回産政塾でいただいたテーマ「殻の外へ踏み出そう」の「殻」とは何かといったことを自分なりに考えてみたということです。

自分なりに、これまでの仕事のやり方を見てみると、言われたことだけをこなしてきたということですね。しかし、これは自分自身で意識してきたことで、「やれと言われればやりますよ」という姿勢で仕事をしてきたのです。謙遜しているとか、控えめとかいうことではなく「何も出来ないけど、言われたことぐらいは出来ます。」ということですね。言われたことぐらいはこなしたいという思いで、姿勢で仕事をしてきたのです。それがもししたら「殻」なのではないかと感じたのです。もちろんそれだけではないと思いますが。

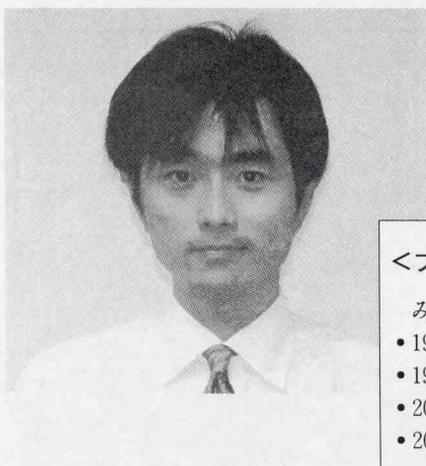
そして、この産政塾に参加させていただいて何か結果が残ったかといえば、目に見える形で表すことは出来ていません。グループの企画についても、メンバーの皆さんにおんぶに抱っこで付いていくのが精一杯という状況でした。しかし、気づくことは出来ました。これからが重要です。高校時代の早朝練習ではありませんが、自らの意思で自ら行動を起こしていきたい、そして、架空の想像上のスーパーヒーローではなく、身近な頼りになるちよつとしたヒーロー目指して、努力していきたいと考えています。

△終わりに▽

現在は、さまざまな技術の進歩によって、ほしい情報がすぐに手に入るそんな時代になってきています。しかし、直接会って話すことで初めて伝わる気持ち、考え方というものがあるのではないかと 생각합니다。

この機会にたくさんの方と出会い、たくさんのお話を聞かせていただけたこと、本当に感謝しています。特に、Dグループの皆さんには、本当に良くしていただきありがとうございました。またゆつくり呑める機会があればと思っています。

「そっ啄の機」



デンソー労働組合
水越宏明

<プロフィール>

みずこし ひろあき (35歳)

- 1969年2月 愛知県生まれ
- 1994年4月 日本電装(株)(現(株)デンソー)入社
- 2000年9月 デンソー労働組合執行委員
- 2004年10月 (株)デンソー復職、(株)デンソーウェーブ出向
現在に至る

<家族> 妻

<趣味> 旅行

○「そつ啄（そつたく）」

「そつ」は、正しくは、「くちへんに卒」と書く漢字であるが、私が今この文章を作っているパソコンには、そういった文字は登録されていない。むろん、「そつたく」という言葉もそうだ。あまりお目にかからない難しい漢字、言葉ということになる。

もう10年以上前のことになるが、学生時代にお世話になっていたバイト先の上司の机に、「そつ啄の機」と大きく書かれた葉書が飾ってあった。その頃の私は、当然のことながら、この含蓄のある言葉、その深い意味を受け入れる器はまったくなかったが（今もそうであるが）、どういうわけか、その言葉を鮮明に記憶していた。

「そつ」とは、鶏の卵がふ化しようとする時、雛（ひな）が殻内からつつくことをいい、「啄」とは、母鶏がそれに応じて外から殻をつつくことである。

鶏は、二十一日で卵をかえすという。母鶏は、卵の位置を変えたり転がしたりしながら、卵を温め続ける。しかし、生まれる一日、二日前になると全くといっていいほど動かなくなり、卵の中から雛が殻をつつく音をじっと待つ。そして、雛が殻をつつく音が聞こえてくると、母鶏はすかさず外側から同じ個所をつつくようである。この「そつ」と「啄」とが機を同じくすることで元気な雛が生まれてくるというのである。

このことは、われわれの人生の中で起きる、いかなることにあてはまるのだという。逃してはならない「タイミミング」を大事にし、内からの「そつ」と、外からの「啄」が同時に行われる時、内と

外とで響き合いが生まれ、すばらしい効果が現れるというのである。

産政塾への参加が決まり、その基本テーマが「殻の外へ踏み出そう」であることを知った時、学生時代に見ていたこの「そつ啄の機」という言葉がふつと頭に浮かんだ。

○「殻の外へ踏み出そう」に思う

私自身、「今の自分を変えたい」とか「壁を乗り越えたい」とか思ったことは、これまで何度もあった。しかし、何をしたらいいのか、何をすべきか、分からないまま時は流れ、いつの間にか、そういった気持ちも薄れてしまっていた。流れに身を任せているうちに、自分の「殻」が作られ、だんだんと厚く強くなっていったに違いない。

前述した「そつ啄」に照らして考えてみると、殻の外へ踏み出すためには、殻を破りたいという意思、そして内から「つつく」という行動がまず存在して、次に外からの手助けがタイミングよく加わることが大切ということか。いくら、外から殻をつつこうが、内からの意思、行動が無ければ殻は割れない。産政塾において「殻の外へ踏み出そう」というテーマでいろいろな機会を与えて頂いても、参加する側に、まずもって「殻の外へ踏み出したい」という意思がなければ、殻の外どころか、殻を割ることさえできないということになる。いくら内からつつこうが、外からの助けがなければ、なかなか割れないとも取れる。要は、内と外との響き合いが大切なのだ。

○「アフリカの大地」に思う

「そつ啄の機」の「心」は、われわれの人生の中で起きる、いかなることにもあてはまるのだという。

私がこの5月に結婚したこと、そして、その新婚旅行としてアフリカに行ったこと、これらも思えば、「そつ啄の機」の心をうまく生かしたものだたと私は思う。

アフリカの大地は広い。しかも、北海道に行つて広い広いと言っているのとケタが違う。そういう広いところに行つて、大自然の風に吹かれ、手が届きそうな星の光に照らされ、メラメラと燃える巨大な太陽の日の出を目のあたりにすると、人生観が変わるとよく言われる。

「ぜひとも変えてみたい」

あまり気の進まない様子の彼女、心配する親族一同を説き伏せて、私たちはアフリカの地にやつてきたのだつた。

ここは「一望千里」が決して大げさじゃない。360度が地平線で、一国全土が本当に見渡せる。

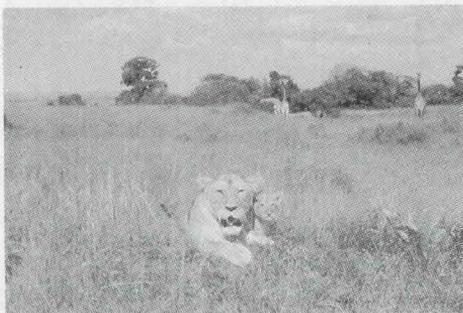
空は果てしなく広く大きく、高く青く、目に飛びこんでくる風景の半分以上は空である。ところどころに、ぼかり、ぼかりと白い雲が浮かび、風に吹かれてゆつたりと移動している。その下には、黒くて巨大な影が大草原を生き物のように移動していく。その影におびえたトムソンガゼルの群れが、影に追われて走っていく。

アフリカの夜明けはすごい。大草原の果てに1点の光が見えたかと思うと、その光は瞬く間に押し寄せて、あたり一面を真っ赤に照らした。アフリカの太陽は大きく日本で見るのと同じ太陽とは思えない位、巨大だ。その内部で黄色や赤の炎が重なりあい、ゆらゆらと揺れて燃えているが手に取るように見えた。

すごいのは大自然の雄大さだけではない。こういった大草原に、動物図鑑をぶちまけたように動物たちが駆け回っている。それも、誰かに飼われているわけではなく、もちろん「野良」なのだ。野良キリン、野良ライオン、野良ワニ、野良象・・・そういう連中がゴツチャになって棲息しているが、またすごい。

アフリカでのアトラクションと言えば、やはりサファリである。大草原に棲息している動物の日々の生活を垣間見ることができる。それも、庭先にいるライオンを、縁側から眺めるような感覚で見ることができる。

確かに、ライオンは数頭で狩りを行い、チーターは単独で狩りをした。テレビ番組で見たとおりの光景がそこにはあった。しかし、私が抱いていたイメージと違ったことがあった。それは、どの動物も、簡単には食べ物にありつけていないということだ。百獣の王ライオンといえども、何も食べられない日が1週間以上続くこともあるらしい。どんなに腹が減っていても、誰もえさを与えてくれない。力を絞り出して走り、獲物を捕まえないければ、生き残ることはできない。



狩りの場面に何度か遭遇したが、傍から見ている限りでは、全く成功する気がしなかった。＼圧倒的大差で、肉食獣の負け＼そんな狩りばかりだった。

草食動物にしても、生き残ることは大変なことだ。肉食獣に捕まらないように、常に周りに気を配っていた。数秒間、首をさげて草をついばむと、さっと首を上げて周りを見渡す。見渡してはまた数秒間ついばむ。草食動物にとっては、一瞬首をさげることさえ危険なのだ。命がけの食事なのだ。食事だけでなく、一生を通して、くつろいで何かをするということは一度もないに違いない。

＼ラクして生きているやつはいない＼

＼日本に帰ったら、しつかり働こう＼なんとなく、そう思わせる旅となった。

○「保父体験」に思う

やはり、「そつ啄の機」の＼心＼は、われわれの人生の中で起きる、いかなることにあてはまる。子供の扱いを苦手とする私が、産政塾を通して「保父体験」をする機会に恵まれたことも、またそうだ。

苦手だと気付いたのは、最近のことだった。妹の子供が生まれ、身近に子供の存在を感じるようになって、そう思った。妹の子供が遊びに来て、どういうわけか、挨拶さえまともに交わせない。どう話をすればいいのか、どう接すればいいのか分からないのだ。こんな私であったからこそ、我がE班の企画に「保父体験」を強く推したのだった。

保育園には、当然のことながら、たくさんの園児たちがいた。そして、子供との遊び方さえ分からず、おどおどしている私もいた。一人だけ、その場の雰囲気溶け込んでいない気がしていた。一人だけ、一步後ろに下がっている気がしていた。"こんなことでは・・・"と思っても、やはり、どうすればいいのか分からなかった。そんな時だった。小さな女の子が私のところに寄ってきて「一緒にあそぼ」と言ってくれたのだ。本当にうれしかった。そして、ホッとした。

「一緒にあそぼ」と言ってくれたこの女の子は、べつに良い子ぶって、そう言ったのではなく、私のことがかわいそうに思ったからでもない。彼女は、何のかけひきもなく無心に「あそぼ」と言ったはずだ。私は心の底からうれしかった。計算のない無心な人間関係が、保育園にはあった。

子供は、無心だからすごい。無心のまま、行動できるからすごい。

「絵本を読んで」園児たちは、自分のお気に入りの絵本を片手に、次から次へとやってくる。一通り読み終わると、次はおままとだ。その次は、積み木遊びに鬼ごっこ。もちろん私自身、今となつては、こういった遊び自体には、あまり楽しさを感じないが、園児たちは本当に楽しそうな顔をしている。本当にうれしそうな顔をしている。私も気合いが入ってくる。気合いが入ってくると、園児たちもさらにうれしそうな顔を見せる。そんな顔を見ていると、私さえもうれしくなってくる。

たわいないことではあるが、「小さなしあわせ」の見つけ方を一つ知ることができた気がした。



子供は、素直だからすごい。素直さが顔に表れているからすごい。

「自分も昔はこうだったんだな」

いつまでもこの「心」を忘れずにいたいものだ。

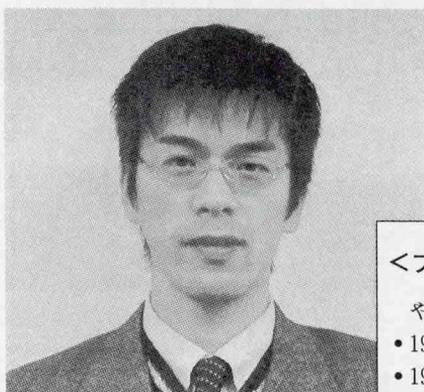
〇おわりに

アフリカでの滞在、保父体験、そして、産政塾の他の企画への参加を通して、「殻の外へ踏み出すことができた」とまでは言えないが、その都度、その都度の体験が「そつ啄の機」の心を知るための一助になったことは、紛れもない事実である。いずれ「そつ啄の機」の真髄に達して、思い感じ、いずれ殻をも破る時期が来るのではないだろうか。

産政塾の小田桐塾長、事務局の竹川さんをはじめとする事務局の方々、第15期塾生、そして我がE班の方々、心から「すごい」と思える人ばかりであった。皆さんのおかげで、本当に有意義な時を過ごすことができたと思う。感謝の気持ちでいっぱいである。

そして、今後も引き続き、第8回、第9回、第10回と、企画を続けて行きたいという思いでいっぱいでもある。感謝

バレーボールと私



トヨタホーム(株)

山 浦 宏 行

<プロフィール>

- やまうら ひろゆき (32歳)
- 1972年10月 大阪府 八尾市に生まれる
 - 1995年 4月 豊田合成(株)入社
人事部配属
 - 2004年 8月 トヨタホーム(株)出向

<家族> 妻、娘1人、息子1人+3人目妊娠中(現在9ヶ月)

<趣味> スポーツ、読書

△始めに▽

突然、上司から呼ばれ「産政塾に参加して見ないか?」「良い勉強になるんじゃないか」と言われ、「第15期塾生募集」の案内に目を通しました。そこには、「新たな次代を担う活力ある若人の派遣を・・・」また「将来のリーダーとなる人材に・・・」などの文句が書いてあり、いったいどんな事をする集まりなのか?自分が行っても大丈夫なのかと少し不安になりました。

そこで、産政塾についてホームページで調べたり、過去の参加者から情報収集を行いました。すると参加者が各班に分かれ、各班毎にイベントを企画し、感じたことなどをディスカッション形式で議論する場があり、夜は懇親会が毎回あると言うことが解り、少し安心しました。もともと断る理由もなく、異業種の皆さんと出会い、いろいろ勉強できるのではないかなと思ひ、参加をすることになりました。

△殻とは何だろう?▽

第15期産政塾のテーマは、これまで同様に「殻の外へ踏み出そう」であったが、このテーマの意味について考えてみることにします。ここで言う「殻」とはいったい何なのだろうか、よく「自分の殻」なんて表現をしますが、これは比喩的表現であり、言葉を変えれば自分の価値観みたいなものではないかと思ひます。今までに経験してきたなかで形成された自分の中の常識や判断基準と言えるかもしれません。

では、自分の価値判断を理解しているかと言うと今までに真剣に考えたことが無かった為、答えができません。そこでまず、「自分の価値観」は何か？と言う観点で改めてこれまでの自分を振り返ってみることにします。

△バレーボール競技▽

◇バレーボールとの出会い

今までの自分を振り返る上で外せないのが、中学時代から17年間続けてきたバレーボールです。始めたきっかけは入学した中学のバレーボール部が盛んで、たまたま担任になった先生がバレーボールの顧問をしていたことです。年少の頃から野球が大好きだった私は中学に入学したら野球部に入部しようとしていました。しかし身長が高かった私に目をつけた担任の先生は半ば強制的にバレーボール部に入部させたのです。最終的には私自身が入部すると言ったのですが……。

◇自分との葛藤

しかしながら小学校時代から習い事をしてもすぐに飽きてしまい長く続かなかった私ですから、今回の部活も半ば強制的に入部させられたという意識もあり半年と続かないのではないかと思っていました。入部したての頃は、ボール拾いや基礎練習ばかりで何の楽しみもありません。(何をするにも、基礎は大切なのですが……)でも毎日の練習のなかで、先輩達の強烈なアタック、レシーブまたは、試合で活躍する姿を見るにつれ「いつかは素晴らしい技術をつけレギュラーになりたい」と、思うよ

うになりバレーボールは長く続くのではないかと確信したのでした。しかし現実はそのなかに甘いものではなく、土日も厳しい練習は続き遊ぶ暇も無い日々が続くなか、周りの友達は楽しそうに遊んでいました。意志の弱かった私は、楽なほうへ逃げたいと思うようになり、自分との葛藤をしていたのです。でもあの時の思い「いつかは素晴らしい技術をつけレギュラーになりたい」と胸に秘めた事を思い出し踏みとどまる事ができたのです。

◇初めて体感した喜び

そんななか夢が叶ったのは、中学2年生の時でした。日々の練習でもレギュラーチームに入れるようになったのです。ある試合の前日に試合に出場するメンバー発表が監督からあり、その中に私の名前が入っていたのです。試合当日、実際にコートに立った瞬間は緊張のあまりに体がうまく動きまわることができませんでした。結果は初の公式戦で勝利することができました。いろいろな意味で苦しんだ分、喜びも大きく、今までに味わった事の無い喜びを手にしたのです。

◇目標の重要性

その喜びも手助けしたのか、飽き性だった私がバレーボールだけは中学、高校、大学、実業団と長く続けることができました。長く続けるうちにあることに気付きました。それは「目標の持ち方によって、そのチーム力が大きく変わるのではないか」ということです。あたりまえのことと言えはあたりまえの事なのですが・・・。例えば、県大会優勝を目指しているチームでは、全国大会優勝を目

指しているチームとでは選手のモチベーションも違いますし、練習内容もまったく異なるものがあるでしょう。目標とは「チームがこうなりたい、選手個々がこうなりたい」と意識統一することだと思えるのですが、これは言葉を換えれば「自分の殻」と言えるのではないかと思えます。

バレーボールは、団体スポーツのため一人一人の力の結集がチームの向上またはチーム力になります。一人でも目標と違う方向を向いていると目標達成は非常に厳しいものになるわけですから、個々の目標の持ちかたも重要になってくるわけです。

◇仕事はバレーをすること

大学を卒業し、実業団に入ると学生時代のクラブ活動と違うのに戸惑いました。学生のところから高い目標を持ち考えながらやってきたつもりですが、練習の質、量がけた違いなのです。もちろん仕事もするわけですが、仕事といっても午前中だけなので実質バレーボールをして給料を貰っていると、言っても過言ではないわけですから、かなりのプレッシャーを感じていました。もちろんそれだけの環境を会社が用意してくださっているわけですから結果をださなければその環境にいれなくなり、そんな環境でしたので「バレーボールをして結果をだしていれば他には何もしなくても良い」と言う考えをもつようになりました。実際にそのプレッシャーの中で、当時の私達のチーム目標は、V1リーグからVリーグというバレーボールで最高位のリーグへ上がることでした。苦勞のたいもありません。の夢も叶う事ができました。

◇引退

28歳の時でした。練習試合中に大きなケガをしてしまったのです。それが原因で引退することが決まりましたが、私の場合はコーチとして残る事ができました。今までは違い、指導する側になったわけですが選手のうちはプレーだけをしていればよかったです。コーチとなると指導はもちろん、スタッフと選手のパイプ役という役目もはたさなければなりません。そんなことで、2年間コーチをやり、いろいろなことを学んだわけですが、30歳を迎え少しバレーボール以外のことを考えるようになりました。今までは大好きなバレーボールをしていればよかったです。一生バレーボールをするわけにもいきません。あくまでもプロスポーツではないのですから。そんなことで31歳を迎える年に、きっぱりバレーボールを引退することを決めたのです。

◇バレーボール人生から仕事人間に

引退したことにより今まではまったく違う生活リズムになりました。今まではバレーボールが中心の生活をしていたので、同期入社の人たちとは仕事の面ではかなりの開きがあったわけです。実際には仕事では、新入社員みたいなレベルですが、会社側はそうは見えてくれません。32歳ならこの位のことではあるだろうというような感じでした。始めは戸惑いだらけで何をして良いのか解らず、精神的にかなり悩みもりましたが、こんな事ではいけない、自分に負けてはいけないと自分自身に言い聞かせました。それに、私には今までどんなに辛くても頑張ってきたからこそ、夢もかなったし、自信もついたのだ。だから仕事も一緒だと考えるようになりました。ましてや引退した先輩達も仕事でも結果をだしているし、後輩達にも私が挫折してしまっただけは不安を与えてはなりません。

◇産政塾に参加して

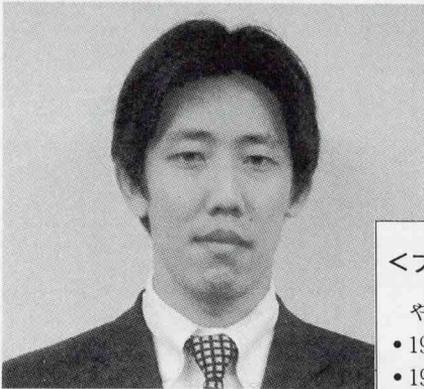
今まではバレーボールという小さな組織で自分を磨いてきましたが、今回産政塾で、いろいろな企画（イベント）に参加することにより、今までに味わった事の無い世界があり、またそこで活躍する方たちは、私とまったく違う価値観を持っていました。その人たちの価値観を受け入れること。その上で良いところは吸収し、自分自身の成長に繋げていきたいと考えています。「殻の外へ踏み出す」ことは、私にとって一生のテーマになるかもしれませんが、そのことを念頭において日々成長していきたいと思えます。

◇終わりに

今回大変お世話になりました事務局の皆様、15期生の皆様には本当に感謝しております。短い期間ではありましたがいろいろと学ぶ事もたくさんあり、また楽しい時間をすごせることができました。

愛知のお国自慢

～私の思いと感想～



(株)デンソー人事部

山添 勇 人

<プロフィール>

やまぞえ いさひと (29才)

- 1975年3月17日東京都生まれ
- 1998年4月 (株)デンソー 人事部人事2室
- 2004年10月 グローバル人事室に異動
現在に至る

<家族> 妻

<趣味> ヨット・ビール

1、はじめに

私が所属させていただいた第15期Aグループの企画は、「愛知のお国自慢」愛知万博・中部国際空港の見学」であった。グループの中では、ジャンケンに勝利し、栄光の副グループ長というぬるま湯に漬かりつきりで、何もお役に立てることはできなかったが、折角の機会なので、この企画に寄せた私の思いと稚拙な感想を纏めさせていただきたいと思う。

2、愛知県

国土の中央部に位置し、古くから関東と近畿を結ぶ交通の要衝として栄え、戦国時代には、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康といった人材を輩出。大都市圏でありながら空間的にゆとりがあり、豊かで多様な自然が大都市に近接して残る。自動車産業を中心に、国際競争力のあるモノづくり拠点を形成しており、製造品出荷額は26年連続で全国1位。また、花き・野菜生産など農業についても全国屈指の生産県。県内総生産は世界経済の約1%を占め、台湾のGDPに匹敵する。

(ホームページより引用。「yahoo japan」―「日本の地方」―「東海」―「愛知県」)

何とも素晴らしい地域である。自然・産業に恵まれており、古くから人材にも恵まれ、他の都道府県を検索してみても、これほど賞賛される地域は見当たらない。

3、私と愛知県

愛知県の県民となって7年が過ぎようとしている。私は、生まれてから父親の転勤で各地を転々としてきたため、7年間も一定の地に住んだということになると、これは非常に長い。東京都保谷市1年、静岡県静岡市6年、静岡県焼津市5年、山梨県甲府市2年、茨城県北茨城市1年、神奈川県津久井郡8年、そして愛知県に7年ということであるから、私の29年という短い人生の中では、愛知県が大きな比重を占めはじめている。そして、会社が愛知県にあり、今後家族を持ち、家を建てるのも愛知県だろうから、ますます身も心も愛知県化していくはずである。

ところが、正直なところ、私は愛知県のことをあまりよく知らない。恐れずに書けば、愛知県を特に誇りに感じたこともないし、ドラゴンズやグランパスにも、今のところ特に関心を持っていない。車に乗るとZIPFMが自然と耳に入ってくるが、テレビのリモコンは未だに関東スタイルで、「1」は総合テレビ、「3」は教育テレビで、愛知県の放送局については、チンプンカンプンである。(ちなみに、会社には誇りと忠誠心を持っている。)

なんとも寂しいことである。折角ご縁があつて既に6年間も住んでいる地域をよく知らず、誇らしく語ることができないのである。会社に入ってから仕事中心の生活が続き、愛知県の名所巡りをしたり、見聞を広めることがなかなかできなかったのも原因であろう。1才まで過ごした東京については、全く記憶に無いが、何と言つても日本の首都であるから、歴史や現状について感覚も知識もある。その後の静岡・山梨・茨城・神奈川では、学校に通っていたため、地域の歴史や産業などについて、授業を通じて知る機会も多く、それぞれの地域の素晴らしさを知り、今では心の故郷になっている。し

かし、社会人になってから住みはじめた愛知県については、学ぶ機会も少なく、あまりにも無知で無関心であったと思う。これまで7年間住み、そして今後もお世話になる愛知県をもう少し詳しく知りたい。これが、最近1、2年の私自身の問題意識であった。

4、愛知県を知るチャンス（企画に寄せた私の思い）

今年の年初、産政塾に参加することになり、第1回目の開塾式の案内が手元に届いた。「これから半年間5回に分けて、企業や人を訪問して、見学したり話を聴く機会を作るので、企画を練って、開塾式に参加するように」との内容であった。

参加者名簿を見ると、初めてお目にかかる会社の方が大半であり、これは真面目に考えて参加しないと恥ずかしい。過去の企画リストを見ると、座禅により心の安定の大切さを知る、テレビ局の裏側を見る、自衛隊の訓練を体験する：どれも興味深い内容であり、先輩達がよく吟味して企画したものがずらりと並んでいる。私もこの機会に皆の記憶に残るような、面白い企画を提案したいと意気込んだが、結局非常に地味な提案をさせていただいた。自分の最近の問題意識を素直に捉え、地元愛知県についてもっとよく知るきっかけを作りたいと考えたのである。しかし、グループ全体で企画し、塾生皆で興味を持って参加できる内容にしなければいけないので、名古屋城や、みそかつ工場を見学しても、もともと愛知県に住んでいる方には物足りなさ過ぎる。そこで、今のところ馴染みは薄いですが、将来的には確実に我々に大きな影響を持つであろう「愛知万博」と「中部国際空港」の見学を提案しようと考えた。

地味な企画であり、他のメンバーに受け入れてもらえない自信は全く無かったが、右記のように考えて、開塾式に臨んだ。ひと通り自己紹介を終え、グループに分かれて各自の企画を発表した。私が割り振られたAグループでは、引退したプロ野球選手やプロレスラー訪問、刀・そば職人訪問、リニアモーターカー見物等、やはり面白そうな企画案が出されたが、他にも「愛知万博」と「中部国際空港」の見学を提案する方がおり、予算や日程等現実的な問題も話し合う中で、結局「愛知万博」と「中部国際空港」を見学することになった（我々が地味な企画をする一方で、北海道や神戸への遠征、幼稚園での保父体験等、他のグループが刺激的な企画をしてくれて、嬉しかった）。そして、目的を「わが愛知は万博・空港の2大イベントによって、全国・世界の拠点として発展する未知なる可能性を秘めている。今回の企画を通して、これからの愛知を支えていくことを改めて自覚し、愛知が全国・世界に何をアピールできるか考える」とし、少々大袈裟であったかも知れないが、皆さんにとっても、私にとっても、愛知県をもっとよく知るきっかけづくりができたと思う。

5、愛知万博見学の感想

愛知万博のメインテーマは「自然の叡智」である。これまで日本で開かれた大阪万博や筑波万博が、イケイケ・ドンドンの大産業展覧会であったことや、歴史の教科書で習った第一回万国博覧会（ロンドン）が産業革命の成功を世界に発信することが目的だったこと、または、愛知万博後に恐らく大々的に開催されるだろう中国万博等考えると、誠にさらりとしていて印象に薄いテーマである。一方、各方面で指摘されるように、使用後に自然を元に戻すとはいえ、自然豊かな名古屋の東部丘陵に、わ

ざわざ建物をたくさん建てて、人を呼び込み、生物に影響を与えるだろうに、「自然の叡智」というテーマはおかしいのでは？という意見もあり、なかなか難解なテーマであると感じた。しかし、聞いたところによると、「環境に配慮したエキスポ」「地球大交流を目指すエキスポ」「市民が参加するエキスポ」「IT時代のエキスポ」という4つの柱を軸に様々な企画が立てられており、この難解なテーマを噛み砕いて表現するれば、「21世紀の地球環境という大きな課題に対して、世界のみんなで知恵を出し合って取り組んでいこう」ということであつた。

話は若干それるが、先日新婚旅行でモルディブに行つた。地球最後の楽園と称され、その自然環境、特に珊瑚の美しさに、先進国を中心とする世界の人々が憧れ、その保護に関心を持っている。リゾートホテルは、自然の素材を使って建てられており、お客に対しては、ペットボトルや缶など、ホテル内で再資源化できないゴミは、自国に持ち帰るように促すような徹底ぶりであり、美しい環境を残そうと、皆で努力しているムードがあつた。ところが、少し離れたところにあるモルディブ人の島に行つてみると、そこは、工場用地拡張のための大埋め立て工事の真つ最中。隣の島まで300メートルくらい（目測）を一気に埋め立て、工場を建設し、これから発展していこうという意気込みなのだ。更に、島にはあまりモノがない割には、空き缶や紙などのゴミもあちらこちらに散らかつていた。

また、もう少し地球環境的な視点では、中国やインドを中心とする巨大な開発途上国の二酸化炭素排出量の増加も著しい。中国は今や世界第二位の二酸化炭素排出国であり、このままの勢いだと、環境汚染に深刻な影響を与えかねないということだ。

少々無責任な発言かも知れないが、別にそれが悪いことだとは思わない。チャンスが来た時に、立

ち止まることなく成長したいと思うのは当然である。これに対し、「愛知万博」では、長い目で見ると人間と自然の共生が大切だと一部の人が気づきはじめ、形にしようとははじめているのだと思う。今回の万博は、こんな思いを大切に、人間が立ち止まることなく成長しながら、自然と共生できる仕組みづくりを考える場を提供しようとしているのではないだろうか。

目標来場者数は1500万人と、過去の万博に比べるとひっそりしており、間違いなく見た目の迫力にはかけるが、「21世紀の人類が直面する地球規模の課題の解決の方向性と人類の生き方を発信するため、自然の叡智をテーマとした新しい文化・文明の創造を目指す」という、万博の歴史の中では新しく、非常に難しいテーマにチャレンジしている。ここ愛知県を舞台に、たとえ少数であってもそこに参加する意識ある人々や企業を通じて、新しい価値観を提供することができればいいと思う。

6、中部国際空港見学の感想

中部地方は、その経済規模は、カナダやイタリヤ一国に匹敵する（愛知県は台湾一国に匹敵）にも関わらず、輸出入の約80%を成田や関空に頼っており、先端技術の集積地で、世界との交流が活発な割には、空の事情があまり思わしくないということだ。

現在建設中の中部国際空港は、日本でもトップクラスの滑走路を持ち、24時間離着陸可能あるだけでなく、アクセスが便利で、コンパクトで機能的（わかりやすく使いやすい）な空港を目指しているということだ。また、単なる「空港」ではなく、利用するお客様全てが満足できる「まち」づくりを目指しており、環境にも配慮して、工事期間中から、監視システムにより、大気・水質・生物への

影響や、騒音・振動にも細心の注意を払っているということだった。

新聞報道等を見ても、離着陸料金の大幅値下げ等により、貨物便の契約数は好調のようであり、明るい話題が多く、今後の中部の世界への玄関として、中部の新しい物流の拠点として、牽引してくれることは間違いないと感じた。

7、2つの現場を見た感想

この2つのイベントの現場を見学して感じたことは、愛知県は既存産業の優位性をベースに、「世界」と「環境」をキーワードに、新しい価値観を生み出そうとしているということだ。この2つのワードは、何も目新しいものではなく、色々なところで語られているが、これほどまで大きな規模で体系的に語られることはなかなか無かったと思う。そして、2005年のこの2つのイベントが成功し、新しい価値観を愛知県から発信できれば、大変誇らしいことだと思う。

8、終わりに

塾長をはじめ、中部産政研の皆さん、特に事務局の竹川さんには大変お世話になりました。毎回、我々の意見や要望に丁寧に応えていただき、本当にありがとうございました。

また、他の産政塾メンバーの皆さんからは、色々と刺激を受けました。人前で話すのが上手い方、仕事関係の話に非常に詳しい方、いつも真剣に取り組む方、宴会ネタに尽きない方：皆さんとお話する度に、感銘を受けました。是非これからもお付き合いをお願いします。

35年間の人生を振り返って



全ユニー労働組合
山本 浩 晃

<プロフィール>

- やまもと ひろあき (35歳)
- 1969年5月 愛知県岡崎市生まれ
 - 1993年3月 サークルケイ・ジャパン(株)入社
(現株サークルKサンクス)
 - 2000年10月 全ユニー労働組合 サークルケイ支部 執行委員長
 - 2001年9月 全ユニー労働組合 中央執行委員 (2003年9月より専従)
現在に至る

<家族> 長男 (3歳) ・長女 (1歳)

<趣味> ゴルフ

はじめに

2003年9月より労働組合の専従者となり、単組内で書記局を担当することになった。何から取り組んで良いのか右も左もわからないまま第15期産政塾の塾生となった。第15期産政塾塾生募集概要のパンフレットに「殻の外へ踏み出そう」という今期のテーマが書かれており、このテーマを見たときまず頭に浮かんだことは、今まで歩んできた自分自身の人生はどうだったかということだった。

誕生から保育園時代

プロフィールにある通り愛知県岡崎市で生を受けた。岡崎市の有名人と言えば、日本人初の元F1ドライバー中島悟（兄貴が市内でガソリンスタンドを経営しているが流行ってなさそう…）、「待つわ」でお馴染み元あみんの岡村孝子（最近までお父さんの会社が国道1号線沿いでラブホテル八名称：リーベンVを経営していたが業績は良くなく廃業？今は別の名前でリニューアルして営業しています）古くは「あずさ2号」だけヒットした狩人（兄弟デュオで最近はたま〜に弟だけモノマネ番組に出ています）、もつと古くは徳川家康誕生の地でもある（岡崎の中心地は家康誕生から文字を取った康生町である）。また、岡崎市は八丁味噌が有名で市内の小学校は必ず工場へ社会見学に行く。どうでもいい話ですが…。

保育園の記憶はあまりない。ただ入園時は行くのを泣いて嫌がっていた記憶があり、証拠写真もある。今考えられると思いつきり殻に閉じこもっていたようだ。しかし現在でも少なからずこのような子供

はいるし、その少ないうちの一人が自分だった。学芸会や楽器の演奏会でも必ず脇役で、「自分が・」という率先して行動することがまったくなく、親からも悲しがられていた記憶だけがよみがえってくる。また初恋もこのときだった。女の子の名前は今でもはっきり憶えている。築瀬〇世ちゃん。

小学校・中学校時代

小学校に入学してからは喧嘩ばかりして相手の子を泣かしてばかりいた。何で喧嘩ばかりしていたのか今でもわからないが、しばらくしてからは1年2組のみんなとは仲良くなった。このころから少しずつだが自分を出すようになっていった。勉強は大嫌い、でも体育だけは得意で当時目覚めたものは月並みながら野球で、当然親父の影響だ。大のドラゴンズファン。親父は町内ソフトボールチームの監督を務めており、4年生以上のチームの中で私だけ唯一3年生で加わっていた。肩の強さだけは上級生の誰にも負けなかったという理由でポジションはキャッチャー。その後は学年が上がるごとにショート、サード、ピッチャーとポジションが変わっていき、バッティングはあまり得意ではなかったが5年生ではクリーンアップだった。そして6年生の2学期に最初で最後の転校を迎える。1学年に2クラス、1クラスには25人程度の児童しかいなかった。田舎の小学校だが運動場の広さは市内でも3本の指に入った。何故かこの学校に馴染めない。少しだけいじめにもあった。そして中学へ……相変わらず勉強が嫌いだった私は、部活動を何にするかの興味しかなかった。まず入ろうと思ったのは野球部。けど先輩たちは体の大きな怖い方ばかり・やめた。そこでこれも家族の影響で姉が別の中学で器械体操をやっていた。私の入学した中学にも体操部があり、小学5年生からバック転を

身に付けていたこともあって器械体操部に入った。種目は3つ。床・鉄棒・跳馬。そして入部して知ったことは先輩以上に顧問の先生が恐ろしいことであった。日体大出身（専門はハンドボール）で妥協は絶対許さなかった。跳馬の練習中着地に失敗し右足太ももを肉離れしたり、鉄棒で大車輪の練習中には毎日のように手の皮がむけテーピングをグルグル巻きにして練習した。3年生の時にはキャプテンにも選ばれ、中学生では禁止されているバック宙2回転や2回ひねりも練習させられたが、おそらく先生は禁止されていることは知らなかったのであろう。禁止されていることなど先生には恐ろしくて言えなかった。また先生からは何度も愛のムチを受けた。しかもグー&ケリで。怒られるときの体制は「正座して手を後ろに組めっ！」これが先生の口癖のように思えるほどであった。日体大は骨が折れるまでやるらしい（先生談）。という厳しい先生のもとで3年間器械体操に打ち込み、3年生の時、岡崎市長杯という大会では見事、床運動で優勝することができた。ということであつという間の3年間は過ぎ高校へ進学・・・

高校・大学時代

部活動に打ち込んだ中学3年間。しかし勉強には打ち込まず私立高校へ入学した。私立高校だけに運動は盛んだ。この高校には体操部がないので、何をするか悩んだ。勉強を頑張ろうという気はこれっぽっちもなかったのである。入学して間もなく放課後のクラブ見学で体育館に行った。練習していたのは、バレーボール部、卓球部、そしてバドミントン部。これが最初のバドミントンとの出会であった。入部のきっかけは初速300キロにもなるスマッシュを打つてみたいという単純なもの

きつと楽なスポーツだろうという認識からだった。部員は2年生、3年生を合わせて9人。生徒2000名を超える学校にしては少ないなあという印象。入部初日の練習、集まった新入生は60名。ほとんどがバドミントンというスポーツをナメテいるという感じ。最初から最後までラケットは握らせてもらえず、外に出ての長距離走と筋トレばかり。休む暇もない。2日目の練習では半分以下の人数しか来なかつた。3日目、4日目と同じような練習が毎日続き、約1週間後、最終的に残ったのは4名だけだつた。ここに私も残つていた。監督は中京大学体育学部出身。またこの方も恐ろしく厳しい。そして本格的な練習が始まつた。当然朝練もあつた。毎日朝5時起き、夜は9時ごろまで練習し、家に帰るのは毎日夜10時をまわつていた。盆、正月、テスト期間中以外はバドミントン漬けの毎日。授業中は当然睡魔との闘いになる。クラスの生徒を見てみると何で自分だけこんな厳しい練習をしているんだという葛藤もあつた。しかし決めたことは最後までやり抜く、途中で辞めることは自分に負けることだと思ひ死にも狂いで練習についていった。バドミントンはストップ&ゴーのスポーツで、軽いシャトルを軽いラケットで打つためパワーも必要。また館内はシャトルが風の影響で流されるので、窓は閉め切りエアコンは禁止、日差しもカーテンでシャットダウン。一番反射神経は必要なスポーツと言われている。夏はたまらないくらい辛い。サウナで試合している感じ。でもスマッシュが決まつたときの快感は今でも忘れない。自分が入部したころは創部6、7年目くらいだつたと思うが、中学からの経験者は一人としておらず初心者ばかりの集まりで全国大会（インターハイ）初出場を目指して日々練習に励み、その瞬間は私が1年生のときおとすれた。3年生のダブルスペアが県予選で2位になりインターハイ初出場が決まつた。翌年は経験者（いわゆる特待生）も入つてくるようになり、この年は団体戦も県大会を制し、ダブルス1組を含めて2年連続で出場を決めた。私が3年生に

なつた年にはもう特待生しか入部せず初心者で入るものはマネージャー的なことしかさせてもらえないほど部内は変化していった。初心者の中の学年は自分らの年で最後となり、レギュラーは下級生ばかり、3年生の中で唯一のレギュラーはキャプテンである自分だけ。下級生の方が上手いため扱いは非常に悩んだ。しかしこの年も団体戦でインターハイ出場を果たし、もう当たり前のようになっていた。開催地は北海道・登別市。団体戦1回戦の相手は高校野球でもお馴染みの常総学院で、結果は0-3のストレート負け。この年、常総学院は全国3位となった。そして敗れたあとは自然と涙が溢れてきた。これで終わつたという悔しさと3年間の厳しい練習が頭の中をよぎつた。その後、校内の体育大会での選手宣誓、卒業式で卒業生代表「誓いの言葉」を述べて、大学へと旅立つて行つた……

大学は名古屋市天白区塩釜口にあるところに進んだ。バドミントンの特待生で行かせていただいた。この大学は当時、東海、北陸地区ではNo.1の強さを誇っており、関西の高校を中心にメンバーが集まっていた。監督はいたが、練習メニューはすべてキャプテンが組み立てていた。大学では遠征も多く北は北海道、南は九州鹿児島まで毎年各地で試合を行つたが、大学2年時の西日本大会（名古屋開催）ではダブルスで5位に入賞し、翌年の大会では第2シード。（結果は3回戦敗退）大学4年間の中で大きな大会では最高の成績だった。学生時代はこのスポーツを通じて全国各地でいろんな人と出会ふこともできた。（毎回遠征費を出してくれた両親に感謝！）そして無事に5年間（留年）の大学生活も終わり、晴れて社会人……

就職そして現在

大学生生活5年間で4年半もの間、今の会社が展開するお店（名古屋、岡崎など）でアルバイトをしてきた。当然就職もこの会社1本で試験を受けた。最初の配属は静岡県浜松市。ここでは直営店勤務3年、加盟店を指導するスーパーバイザーを4年半務め、岡崎に戻ってからは1年間スーパーバイザー、その後は2年間本社にてコンビニATMの導入・運用管理の仕事をしていただいた。そして今の組合専従者という大変責任の重い役割を担っている。

終わりに

簡単に35年間で振り返ってみた。自分では高校時代の3年間で辛かったけど一番充実していたし、輝いていたと思う。当時は監督に対して憎しみを抱いたことも少なからずあった。でも今では指導していただいたこと心から感謝している。だから今の自分があると思う。仕事で辛いこと、悔しいことがあってもそのとき養われた精神力で乗り越えられている自分がある。誰よりも厳しい練習に耐えてきたという自負もある。産政塾ではこのことを思い出させてくれたような気がする。「殻を破る」簡単なことではないし、誰もができることではないと思う。残りの人生の中で自分自身を成長させるために一瞬だけでもいいから「殻を破る」瞬間を多く創っていきたい。第15期生、産政塾の皆さん、そして竹川さんありがとうございました。

～人生の変化点～



豊田自動織機労働組合

吉川 浩二

<プロフィール>

よしかわ こうじ (35歳)

- 1969年2月 愛知県にて生まれる。
- 1991年4月 (株)豊田自動織機製作所入社
(現在は、(株)豊田自動織機)
- 1992年4月 本社生産技術部配属
- 1993年7月 メカトロ事業室技術室に組織変更
- 2002年9月 豊田自動織機労働組合
(専従) 執行委員
現在に至る

<家族> 妻(34才)、長男(6ヶ月/12月時点)

<趣味> 旅行、料理

<夢> 海外でのんびりと過ごしたい

△はじめに▽

2004年の1月から始まった第15期産政塾ですが、私はこの25名の中の一員として参加することができたことを、あらためて良かったなあと、この塾誌を書きながら感じている。開塾式当日は、一体これから7ヶ月の間、何をやるのかと少し不安を感じていたと記憶しているが、早いもので始まってしまふとあつと言う間の出来事だった気がする。残念なことは、後半の第5回、6回の企画に参加できなかったことが、今でも悔やまれる。閉塾式の時に感じた寂しさ、今あらためて思うのは、私にとって「産政塾」は、心のオアシスだったような気がする。

この塾誌では、私の人生の中での変化点を紹介しながら「殻の外へ踏み出そう」について綴っていきたいと思う。

△開塾式▽

肌寒い1月27日、それぞれの立場で新たな希望に満ち溢れた25名の若者(?)が、集まってきた。因みに私はその時すでに34才と若くはなかったが、他のメンバーを見て少し安心した。みんな話とは少々違い意外に人生経験の深い兵(つわもの)達がいたためだ。

その日は私にとって、もう1つ大切なイベントがあった。私は当時、労働組合の中で賃金・一時金などの労働条件全般を担当する重要な任についていた。勿論、1月末ということは、まさしく「春の

取り組み」の真っ只中で、当日はいよいよ執行部（案）を執行委員会に諮る日であった。ここまでは、例年どこでも同じような立場の人がそういう役目をするのは不思議なことではない。しかし、この日は私にとって、そして豊田自動織機労働組合にとっても、後で考えれば大切な節目の日であった。少し専門的なことを書かせてもらうが、これまでの「春の取り組み」時における賃金引き上げの要求については、平均賃上げ方式を採ってきた。これは組合員ひとり平均で〇、〇〇〇円の昇給を要求するものです。しかし、この方式では、個別企業労使間での話し合いでは純粹に決まらない部分が多分にあるのだ。であるがゆえに、我々としては、議論を重ねてこの「04年春の取り組み」では、敢えて「個別賃上げ方式」を前面に出した要求（案）を準備したのだ。これは、ある銘柄（職種、年齢、資格）を設定し、その対象者の賃金水準を〇〇〇、〇〇〇円にするよう要求するものだ。これまでに「個別賃上げ方式」についてトヨタグループの中でも、ほとんどの労働組合がメインで取り上げたことが無かった中で、の取組みだった。そんな各労組・企業が模様眺めの中、私はこの産政塾開塾式の自己紹介の中で、思わず喋ってしまったのだ。はつきり言えば、この日は開塾式よりもむしろ夕刻から予定されていた執行委員会でのことで頭がいっぱいだった。冒頭、小田桐塾長のあいさつの中で、もっと労働組合がしっかり機能しないと会社がダメになってしまう。会社を良くするために労働組合が十分に役割を果たさなければならぬと、ご自分の経験からも力強く話をされたことに共感した私は、執行委員会に提案する前に、他の労組・企業から参加している塾生の前で興奮しながら自己紹介をしてしまったわけだ。私の中では、影響があることは十分に分かっていただけれども、言うなれば自己宣言／有言実行の「よし、一丁やってやる！」気持ちが強くはたらいってしまった。今、思えば

あの時宣言しなかったら、最後の会社回答引出しまで粘り強くやれなかった気がする。

△我が人生の変化点PART1▽

これまで35年間の人生を振り返ってみると、大きな変化点がいくつもあつた。これは誰でも多かれ少なかれあるものだ。他人から見れば、実にたわいのない出来事かもしれないが、個人の人生に大きな影響を及ぼすことがあるのも事実だ。

私の場合、まずは高校時代の学園祭での出来事がそうだった。中学・高校と野球をやっていたこともあり、体格も人より恵まれ、見てくれもかなりゴツイと自分で言うのも何だが、はつきり言えば硬派だった。そんな私が高校3年生の夏に親友の1人から「映画を撮りたいから、是非参加して欲しい。勿論、それなりの役を用意するから、頼むよ!」と言われた。私は、夏の高校野球県大会に敗れ、いよいよこれから遅れていた受験勉強をしようと思っていた矢先だったので、「お前の頼みだから分かったけど、受験勉強もあるから夏休みの撮影は、極力少なくしてくれよな!」と詳しい話も聞かずに、安請け合ひしたのだった。しかし、私に用意された配役は、この映画の中で大変重要な役周りだったのだ。夏目漱石の「こころ」をアレンジした「現代版こころ」と銘打ったこの映画の中で、私は主人公K君に恋する女性役をするはめになっていたので。衣装は、クラスの女の子にお願いし、特注で可愛いピンクの花柄模様のワンピースを用意してもらい、カッラは演劇部から借用、ストッキングはお袋の新品を勝手に拝借し撮影当日に臨んだのだ。撮影現場は、校内はもちろん、今は無き伏見

の名宝スカラ座の前、栄公園の噴水の中、TV塔周辺、地下鉄内と多岐に渡ったのだが、この親友は撮影日をたった1日に集約し、大スターのために調整してくれていたのだ。本来、こういった人前で敢えて笑われることをやる人間ではなかった私が、親友を通して別の可能性、自分が気付いていない能力を引き出されたわけだ。まさしく私の人格形成の中で非常に大きな出来事だった。彼とは今も交流があり、その後はTVプロデューサーとしての地位を築くまでになった。本人曰く、この時の面白さが今もここに残っているから頑張っているのだと・・・。

この内容は、これがきっかけで女装が趣味になってしまったというものではなく、第三者から殻の外に引き出されてしまった例として紹介した。ちなみに、今もその時の衣装は実家の押し入れに眠っている。

△我が人生の変化点パート2▽

高校卒業後は、大学へ親友と共に進み、まさに順風満帆の4年間の大学生活を謳歌し、今の会社に就職をしたわけだが、まさに私は労働市場がまだ売り手市場の1991年入社。いわゆる「バブル入社世代」。当時、会社業績も右肩上がり、作れば売れる時代。同期が何百人もいて、顔と名前がまるで一致しない。世の中を少し甘く見ていた私が、大きな試練に立たされたのは入社して3ヶ月ほど経ったある日。いつもの実習先の工場から寮に戻って、夕食を摂っていたらメシがおいしくないのだ。味がしなくなり食べていても口の中で違和感が残る。急いで部屋に戻って鏡の前で見た自分の顔に驚

いた！左の顔半分が垂れていた。

正式な病名は、左顔面神経麻痺。神経や筋肉が麻痺して左側だけ動かないのだ。まさか自分がなるはずがないと最初は疑っていた。入社以来、工場実習で疲れがピークに達していたので、一晚眠れば治ると信じたが、症状に変化はない。良くなる気配もなかった。人生最初に最大の挫折をこのとき味わった。なぜ自分が、どうしてこんな目に遭うのかと毎日泣いていた。時には、周囲に八つ当たりもした。しかし、この時支えてくれたのが両親と結婚する前の今の妻だった。病気のことには全く触れず、これまで通り私に接してくれた。毎日、ネガティブなことばかり考え、焦って自暴自棄になっていた私だが、周囲の支えで気持ちはずが前向きになっていった。病状も、まさしく薄皮が少しずつ剥離するかのようになり、見失っていた将来への希望も少しずつだが持ち始め、いつしか恩返しができたらと、日々感謝しながら、ありとあらゆる手段をつくして9ヵ月後に職場復帰した。この時の苦しい時間、経験が今の私の大きな底力になっている気がする。病気に克ち、自分自身の弱さに克ち、色々な苦難を乗り越えられたのは、周囲の人たちの支え以外の何ものでもない。そこには、人はひとりでは生きていけない弱いものだと感じた自分がいるから、相手を認め、感謝する気持ちが持てるのだろう。

幸いにしてその後結婚し、妻との間に今年の6月8日待望の長男が誕生した。結婚9年目の遅咲きではあるが、私にとってこれまでの人生の中で、最も大きな出来事だ。産政塾に参加した1月時点で、既に我がジュニアは妻のおなかの中で生命を宿していた。父となろう私が、産政塾での企画・活動を通じて自らの殻とは何かを考え、殻の外へ踏み出すことを考えていた時、ジュニアも順調に妻の

おなかの中で成長し、自らも殻の外へ（母のおなかから人間界へ）踏み出そうとしていた。

妻の妊娠期間中を振り返ると、まず私はこれまで以上に妻にやさしく接するようになっていた。それは、ようやく授かった生命を大事に思う気持ちからなのか、妊娠・出産という女性にとつて、とても大変な仕事を果たしてもらう下心からなのか理由は分からない。ただ、とにかくやさしくしてないと、自分自身の存在感がなくなるような気がしていた。要するに今にして思えば、断然女性が主役で、男は皆脇役だというこの事実を無意識に感じていたのだ。

出産当日は、陣痛が激しくかなりの出血で、医師からは母子共に危険な状態だと聞かされた。それまでの妊娠期間中はとても順調で、おなかの子も健やかに育っていたのに何故だと、まさしく晴天の霹靂とはこういうことを言うのだろうか。すぐに緊急オペが始まるうとしていた。手術による多くの悪い結果への可能性の説明を受けたが、自分ではどうすることも出来ず、医師を信じて同意書に冷静に押印したのを今も覚えている。男は、最後まで脇役である。手術中も、1人で心細く待っていた。せめて名前だけはしっかりと親の気持ちを込めてつけようと、出産前に考えていたことを思い出し静かに待った。いくつかの候補はあったが、最終的には生まれた赤ん坊の顔を見て決めた。6月8日、午前8時43分に航平（コウヘイ）が無事に誕生した。人生という大海原を平和に、そして穏やかに航つてほしい。そんな願いから名付けた。

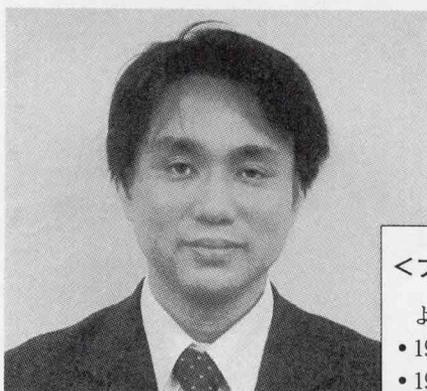
とにかく子を持つ親としては、みな同じ思いだと思うが、無事に育って欲しいと願うのみ。今は、生命の大切さ・尊さを何よりも感じているし、そして何より新しい生命をこの世に誕生させてくれた妻に感謝している。

＜やういふ＞

息子は、母のおなか（殻）の外へと大きな未来・希望と共に踏み出した。私は、いったいこの一年で何が変わったのだろうか？父親としての自覚は当然芽生えた。でも、何か踏み出したのだろうか？最大のテーマである自分の殻は何かを、この産塾を通じて考えてきたが、閉塾式を終えた今日に至っても分からない。ただ自分の殻を意識することが、殻の外へ踏み出す成長への第一歩だと思う。自分の殻が分かっていたら、対処するのは簡単だから。

全国のパブル入社世代の仲間たちよ！我々の世代が、各々の殻を破り、一歩外へ踏み出せば、日本はものすごいポテンシャルを持った国になるはずだ。まずは行動し、結果が出なくても無駄だと思わず、そして新しいことに取り組んでみよう。そして未来の日本のために！

殻とは？



トヨタ自動車株式会社
吉本雅教

<プロフィール>

よしもと まさゆき (36才)

- 1968年 愛知県岡崎市 生まれ
- 1986年 トヨタ自動車株式会社 入社
元町工場 工務部 配属
- 1990年 人材開発部へ異動
- 1992年 元町工場 車体部へ異動
- 1993年 人事部へ異動
現在に至る

<家族> 妻、長男

<趣味> 下手なスキー、
上手くならないスノーボード

『無い!!』

「無い!!」 何度見てもそこにはなかった。

10月25日午前10時、岩手県で開催された第42回技能五輪全国大会の結果が発表された。目標にしてきた金メダルは愚か、銀、銅メダルも取ることができなかった。結果は、3名が敢闘賞。1名が賞外だった。選手の一点を見つめる姿が目に入った。すぐに声を掛けることができなかった。

『10年前の出来事』

今思えばなぜ自分が選ばれたのか、もっと適任者がいたのではないかと思ってしまう……。今から10年ほど前、私は上司に呼ばれ「技能五輪の電子機器組立て職種の指導員をやってもらうことになった。」と突然言われた。技能五輪とは、21歳以下の青年技能者が、全国から予選などを通じて選ばれ、技能レベルの日本一を競う大会で、その当時トヨタは7職種にエントリーしていた。そこに新たに電子機器組立て職種を参加させるとのことだった。無論、自分には技能五輪の経験もなければ電子関係の仕事をしてきたわけでもない。しかし、その時自分はなぜか非常に前向きに捉える事ができた。逆に上司から「訓練生と同じ様にはできないと思うが、指導ができればいい。」などと半ば期待していないような発言に「ムッ」としたことを覚えている。自分自身モノを作るセンスは少しだけ自信があり新入社員の若僧に負ける訳がないと思っていた。数ヵ月後、訓練が始まった。やって見せ

て、やらせて見るのは、トヨタの「仕事の教え方」の基本である。しかし、私がやってみせるモノよりうまく作れるようになるまでそう長く時間はかからなかった。上司が言った言葉が思い出された。だが、そのレベルでは当然満足いくものではなかった。そこからは、試行錯誤の繰り返しだった。

『初めての愛知県大会』

その年の6月、初めての愛知県大会を迎えることになった。参加する選手はトヨタ2名とデンソー3名の計5名。デンソーは20年以上全国大会へ参加し、2回日本一になっている先輩企業である。当然勝てる相手ではないが、全国大会への参加資格を得るためには同等の製品に作り上げる必要があった。選手はこの日のために3ヶ月以上の訓練をしてきた。制限時間4時間の製品を毎日繰り返し、繰り返し作った。何とか同じ土俵に上られる製品を作れるようになったと思っていた。

午前8時いつもとは違い、社外の競技委員が見守る中競技がスタートした。合図とともにプリント基板同士を接続するワイヤーハーネスを作る作業が始まる。束線板と呼ばれるベニヤ板に釘を打ち付け、釘に電線を引っ掛け紐で束ねる作業だ。競技最初の作業でもあり、選手はかなり緊張していた。しかし、釘を10本も打たないうちに二人の釘打ちのリズムが揃ってきた。いつもの調子の戻ってきた。合図だ。電子部品の取り付けや、はんだ付けも順調にこなしていた。3時間が経過し、いよいよ電源を入れるところまで来た。何度も訓練してきた大きなミスをするはずはないと信じているものの、この時ばかりは天にも祈る気持ちになる。できればその場にいたくないほどだ。祈りが通じたか、選

手の実力か、二人とも練習どおり問題なく動作した。肩の荷がおりた。ここからの1時間は手直しや、見栄えを美しくするための作業で、成否にかかわる作業はない。二人とも無事に終了のコールをした。不安のまま審査会場へと製品を運んだ。審査を行うのは中立の競技委員と参加企業の補佐員2名ずつである。私は一補佐員として採点に加わった。採点会場は大きな緊張感もなくリラックスしたムードであった。参加選手の製品が並んだ。私は啞然とした。明らかに違う外観。社内で訓練をしていた際は、外観もこれなら大丈夫と思っていた。しかし現実は違った。実力の差をまざまざと見せ付けられた。採点を公平に行うため、受験番号を隠して採点を行うが、その必要がないくらいの違いがあった。不安なまま採点が進んだ。採点が中盤に差し掛かった時一人の補佐員がひとつの製品をみて、問題を指摘した。プリント基板同士を接続するワイヤーハーネスの接続部が基準の寸法に満たっていないというものだった。この接続部は全部で20ヶ所以上あり、仮に全部減点であれば10点以上引かれることになる。言うまでもなくトヨタの製品だった。私の指導ミスだ。少しの間、採点が手に付かなかつた。接続部すべてを確認した。最悪の状況は免れることはできた。約半数は基準に満たっていないものの、残りは減点を免れることができた。競技の厳しさ、指導員の責任の重さを痛感した。すべて採点が終わった。集計をすることなく順位は見えていた。

『自分自身の殻』

その時から10年の月日が経った。延べ20人の選手と一緒に日本一をめざし歩むことができた。この

経験、出会いは何より代えがたいものであり、貴重な財産である。19、20歳の訓練生と共に仕事をすることは自分にとっても学び得ることが多い。文頭で技能五輪の指導員をやることになった10年前の前向きな気持ち、何事にもチャレンジしてみようと思える気持ち。訓練生にはそんな意識に満ち溢れている。年齢を重ね、経験も豊かになった反面、自分自身に殻をかぶせている様に思える。殻は、元々あるものではなく、自分自身がある限界を決めてしまいそこに作ってしまうものかもしれない。

「金メダルと銀メダルには大きな差がある。金メダルを取るためには銀メダルの何倍もの努力が必要になることさえある。」と多くの方から言われてきた。昨年、9年目にして初の金メダルを取る事ができた。このことで自信がもてるようになったことは言うまでもない。反面、「これくらいがんばればメダルが取れる」と言う一線を引いてしまった様にも思える。毎年どの企業も金メダルを狙い人一倍努力してきていることは間違いない。そのゴールは毎年遠くへ延び、自分自身で決めてしまうものではないと気づいた。来年10月の第43回技能五輪全国大会に向け、すでにスタートを切った。今年より遠く、高い目標に向け殻を破り続けたい。

『最後に』

札幌ドームの話からスタートした私たちDグループの企画は、「地域活性化への取り組みを学ぶ」をテーマに、北海道庁、雪印乳業(株)、札幌ドームを訪ねることができ、苦労した分、大きな達成感を味わうことができた。メールボックスにある100通を超える産政熟関係のメッセージは、企画立

案に四苦八苦していたころの様子が思い出される。

最後に、短い期間でしたが、小田桐塾長、事務局の竹川さん、15期生の皆様に出会い、貴重な経験をさせて頂き有難うございました。また、このような機会を与えてくれました上司の方、快く送り出してくれた職場の皆様感謝します。



2004.10.25 第42回技能五輪全国大会を終えて…

裏方からみた産政塾
(産政塾を運営して)

産政塾事務局

竹 川 智 雄

第15期産政塾が修了しました。1月の開塾式で各組織、団体から派遣された塾生が初めて顔を合わせ、月1回の会合ではありましたが、今期もあつという間に8月の閉塾式を迎えました。産政塾は30代前後の若者が集い、「殻の外へ踏み出そう」をテーマに、人材交流する場です。30代といえれば仕事にも慣れ、仕事の進め方もプロフェッショナルになっているはずの一方で、新鮮な問題が希薄化し、既存の「殻を破る」ことへのチャレンジ精神が減退し、広い視野での独創的な発想や判断ができなくなっているのではないかと誰しもふと考えてしまう頃だと思えます。だからこそ、この「殻の外へ踏み出そう」というテーマに塾生の誰もが大きな小なり共感を覚え、自分を見つめ直す機会を欲しているのだと思います。

事務局の私自身も今期で2期目を迎え、1期目の経験も活かしよりよい産政塾の運営を陰ながら心掛けました。引き継いだ当初は、産政塾とは何をするところかもわからず、「法律に触れる以外のことは何をしてよい場」とだけ聞いていたこともあって、「何か好き勝手に楽しんで交流を深めればよいところ？」といった程度に受け止めていました。しかしながら、募集の企画を進めていく中でこれまでの活動を見てみると、少しずつ産政塾の意義を理解するようになり、「13年間続いてきた産政塾の灯を絶やさぬように」と感じるようになりました。同時に各組織から多忙の中、業務時間中に派遣いただくことになるので、塾を「単なるお楽しみ会」にしてはいけない、各塾生が「胸を張って出張できる中身」にしなければならぬといったようなプレッシャーを時間の経過とともに感じ、「これは大変なことになったぞ」と思うようになりました。その結果、1期目の運営にあたっては少々肩に力が入りすぎたかもしれません。塾生が立案する企画に対してもそれなりに事務局としてチェックも入れた（いろいろと注文をつけてしまった）し、その反面いっしょに楽しんではいけなさと一歩下

がつてあくまで裏方に徹することを少々意識しすぎたかなと思いました。事務局の自分も塾生の中に入ってもっともっと議論すればよかったかなという反省点です。

ところで1期目の産政塾を運営するにあたって「企画に対する私の思い」とは、日常では味わえない貴重な、あるいは変わった体験すること、またそういった体験を持つ方（講師）の話を聞くことで、自分の知らなかった世界を知り、そのことが経験の幅を広げることにつながるのだと思っていましたし、殻を破ることにつながるのだと思っていました。したがって1期目の企画は、体験や見学などが主体となった気がします。しかしながら、実際に1期目の産政塾を運営してみても、産政塾の意味合いを自分なりにより理解するようになり、反省点も見えてきました。また塾生の皆様からも活動をふり返り、多くのご意見をいただきました。

まず一番の反省点と思えたのは、全体を通して体験や見学などの企画主体となり、「議論の場が比較的少なかった」かなという点でした。

「殻を破る」ということは、それぞれの組織で育ってきた塾生が他の組織で育ってきた塾生と話すことで自組織の常識が必ずしも世の中の常識とは限らないということに気づくことだと思いました。だから塾生同士が「お互いに議論する場がまずは必要なんだ」と思いましたし、この点で2期目の産政塾を運営するにあたって産政塾の「企画に対する私の思い」とは、まずは議論する場が必要であり、議論するネタが必要であり、企画はそのためのきっかけ、内容も議論できるための企画であればよいのではないかと考えるようになりました。つまり、企画自体は、貴重な経験ができるというだけのものではなく、塾生みんなが賛同でき、みんなが企画にも議論にも参加できる内容であればよいのだと

思うようになりました。企画を通して「議論することが主目的（主）」であり、企画はその議論のネタを提供するための「きっかけ（従）」であるということです。

そこで2年目の産政塾を運営するにあたっては、企画の後に毎回、「みんなで議論する場」を設けていただくようにしました。多少議論の進め方に工夫が必要だったかもしれませんが、それでもお互い感じたことを話し合うことで自分が考えもしなかったことを聞いたり、考えさせられたり、数々の発見があったことと思います。同時にお互いをより知り合うこともできたと思います。企画が中心であると、どうしても塾生たちの目が企画に向いてしまいがちですが、話し合うことでお互いに向き合い、交流という点においても良かったのではないかと思います。月に一度きりの会合ですので、塾生が全員の方と交流を深めるのは難しいのかもしれませんが、少なくとも塾生たちは各チームで企画を練っていく際に事務局の知らないところで、何度も電話やメールで連絡を取り合ったり、業務が終わった後に集まって打ち合わせをしたりしていくうちに交流を深めていました。

また企画の内容にしても、何もつてのないところから始めて（たとえ先方に断られても）何度もチャレンジし、大変中身のある企画をいくつも実現していただきました。議論のネタであればいいという少々安易な事務局の思いとは裏腹に、議論のネタには十分なことはもとより、タイムリーで大変意義深い企画が多かったです。業務多忙の中、ここまで企画を練り上げていただいた塾生の皆様には本当に頭の下がる思いです。

また、産政塾を単なるお楽しみ会にはいけないと当初から考えていましたが、この2期間、塾生の企画立案にあたっては少々事務局のチェックも入れさせていただきましたが、結果的にはそのよ

うな心配は全く不要でした。しかしながら今期の閉塾式を終え、塾生の方々の意見を聞いてみて、「産政塾を単なるお楽しみ会にはいけない」という私の考えも少し変わりました。それは、日常の組織の中で仕事に行き詰まり、産政塾に来て他の組織の人と話をして（組織の）外の空気を吸うことで気分も楽になったり、あるいは何かヒントをつかんだりして、「また明日から仕事に打ち込める」といった気持ちになれたことを塾生の方からお聞きしたからです。事務局の立場ではわからなかった点でした。

その他、今期も塾生の方々から「今後のよりよい産政塾」に向けてご意見を幅広くいただきました。いただいたご意見を見てみるとそれぞれが多忙の中にもかかわらず、みんな真剣な思いで、塾にご参加いただいたことが読み取れ、今さらながら改めて感謝している次第です。いただいたご意見は、さらなる産政塾の発展に向け、今後の塾運営に活かしていきたいと思えます。

人は現状を変えることに抵抗を感じ、できれば避けて通りたいと思う一面があるでしょう。前例踏襲でいる方が楽だし、変えることは苦痛を伴うからです。それでも一方で、これではいかんとか、壁を乗り越えたいとか、視野を広げたいとか、現状の自分を変えたいと欲求しています。同じ組織にいて異なる組織の人と触れ合うことによって、自分を見つめ直したい、別世界にいる方の話を聞くことも刺激を受けるよい機会です。事前に塾生の方々からいただいていた入塾の志望動機には上記のような声（視野を広げたい、自分を変えたい）をいただいておりますが、しかしながら終わってみて塾生の欲求は満たされたのかと自問自答しています。

「殻を破る」こと、さらにはそのことを「実感できた」ということは、決して容易なことではあり

ません。それでもまずは自分の「殻」を認識することが重要であり、立ち止まって考える機会を持つことがその第一歩といえるでしょう。そういう意味においては今期の25名の塾生はその第一歩に立てたと思います。立ち止まって考える機会を持たったと思います。閉塾式での塾長の言葉にもあったように「各企画で体験したことを通じて、自分はこれからどうするかと考えることが重要であり、もの見方が多少でも変わってきたことがこれからの自分の幅につながる」のです。

この塾誌が発刊される頃は、私自身も他の組織に異動しておりますが、産政塾がこれからも永年にわたり、集う塾生たちは毎年変われども、「殻の外に踏み出そう」という一つのテーマの下に、塾生達の「殻を破る」きっかけ、交流する場としてありつつづけることを願い、次の事務局の方にバトンタッチをしたいと思えます。

集まり散じて人は変われど仰ぐは同じき理想の光

また、すべての15期生が無事塾誌を書き上げ、第15期産政塾の塾誌が無事発刊され、私の手にも無事届き、次代の塾生にも無事受け継がれることもあわせて祈っております。

最後に、ご多忙の中、業務のスケジュールを調整し参加いただいた塾生の皆様、また送り出しいただいた職場の皆様をはじめとする関係諸兄の皆様にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。大変お世話になり、本当にありがとうございました。

產政塾活動記錄

《第1回会合》

期日：2004年1月27日（火）

場所：全労済豊田会館

内容：第15期産政塾開塾式、
塾長挨拶、塾生自己紹介、
グループディスカッション
懇親会



第15期産政塾に集った塾生



自己紹介ではそれぞれ産政塾に臨む意気込みを

グループ討議では議論も闊達に



小田桐塾長を囲んで懇親会

《第2回会合》

期日：2004年3月25日（木）

場所：阪神・淡路大震災記念館

人と防災未来センター（神戸市）

内容：震災記念館を訪ねて

「あなたの自覚は…？阪神・淡路大震災の教訓をあなたは
どう活かす！」

施設見学、講話、討論、
懇親会



語り部ボランティアの長岡さんの実体験から多くの教訓を学びました



臨場感ある講話に聴き入る塾生のみなさん

グループ討議／各自感じたこと、発見したことを話し合い、お互いの考え方や論議を交わしました挑戦意欲をかきたてられ、講話に聴き入る塾生のみなさん



小田桐塾長(真ん中)との議論

《第3回会合》

期日：2004年4月17日（木）

場所：愛知万博長久手会場・中部国際空港

（長久手町、常滑市）

内容：万博会場とセントレアを訪ねて

「愛知のお国自慢」

会場視察、講話、討論、懇親会

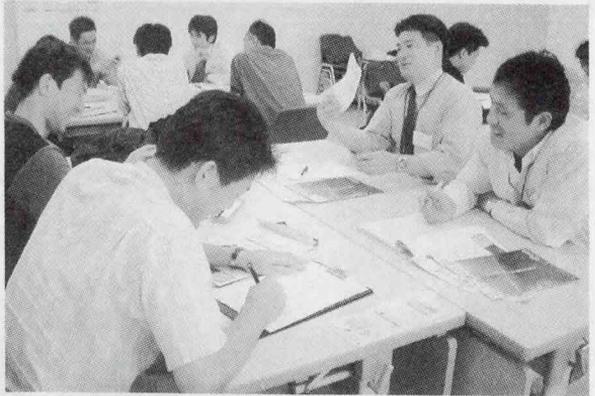


万博の建設現場にて多くの質問が出されました



セントレアでは随所にコストを抑えた工夫や利便性・快適性を追及した工夫を見ることが出来ました

討議模様



万博会場にて記念撮影

《第4回会合》

期日：2004年5月27（木）、28日（金）

場所：北海道庁、雪印乳業(株)、(株)札幌ドーム（札幌市）

内容：北海道を訪ねて

「地域活性化への取り組みを学ぶ」

施設見学、講話、討論、懇親会

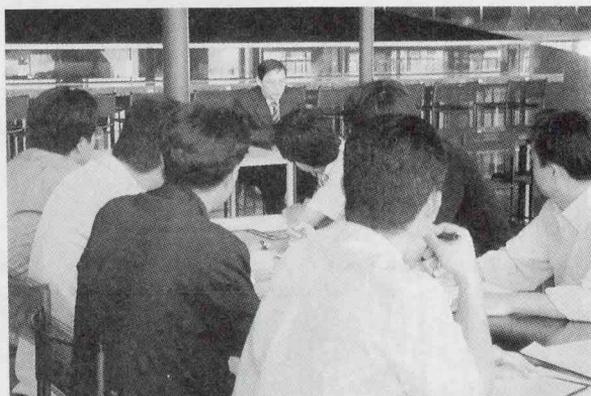


北海道庁では、一村一雇用おこしや産消協働など地域活性化に向けたお話を伺いました



雪印乳業㈱では、工場を見学させていただいた後、コンプライアンス部部長の岡田さん（左から3人目）より「新生・雪印乳業」の取り組みについてお話を伺いました

札幌ドームでは、取締役事業部長の島津さんに取締役部長さん（上部中央）より球団の北海道誘致に伴う経済波及効果やドームの事業運営などについてお話を伺いました



討議模様／最後に、今回の企画を通してお聞きした活性化へのそれぞれの取り組みについて、塾生間で闊達な議論を行いました

《第5回会合》

期日：2004年6月24（木）

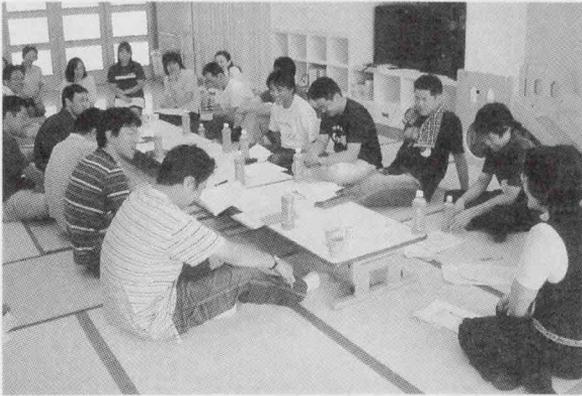
場所：豊田市立竜神保育園、トヨタチャイルドケアふうぶランド
（豊田市）

内容：「時にはママの気持ちになって」

保育士体験、講和、施設視察、討論、
懇親会

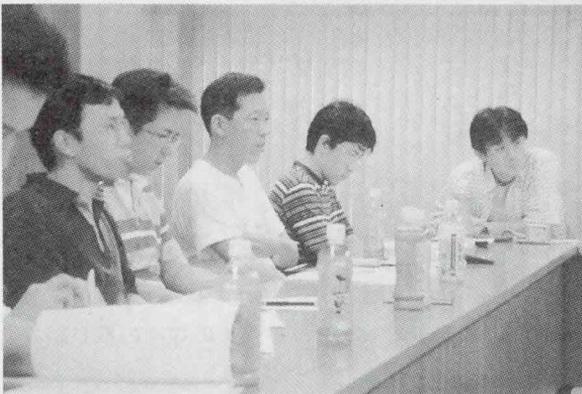


保育園では、保育士として園児に囲まれた一日でした



先生方との懇談会

ぶうぶランドでは、園長先生より子育てと仕事の両立についてお話を伺いました



討議模様

《第6回会合》

期日：2004年7月22日（木）

場所：明治村（犬山市）

内容：博物館明治村を訪ねて

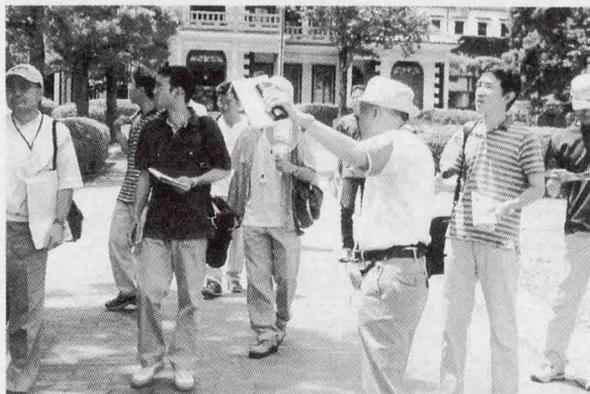
「新たな発想・創造を追及する」

施設見学、講話、討論

懇親会



明治村の黒野友之所長よりこれまでの殻をやぶるための数々の取り組みについて伺いました



ボランティアガイドの山崎茂さんの説明は単純にキャプションを読む解説とは違い、当時の様子が伝わるわかりやすく躍動感あるご説明でした

一番古いということは、見方を変えれば当時一番新しかったということ、明治から変わる、などの黒野所長のお話は印象に残りました



法企画の締めくくりとして最後に自分が所長だったらどのように明治村を変えていくかなどについて塾生間で話し合いを行いました

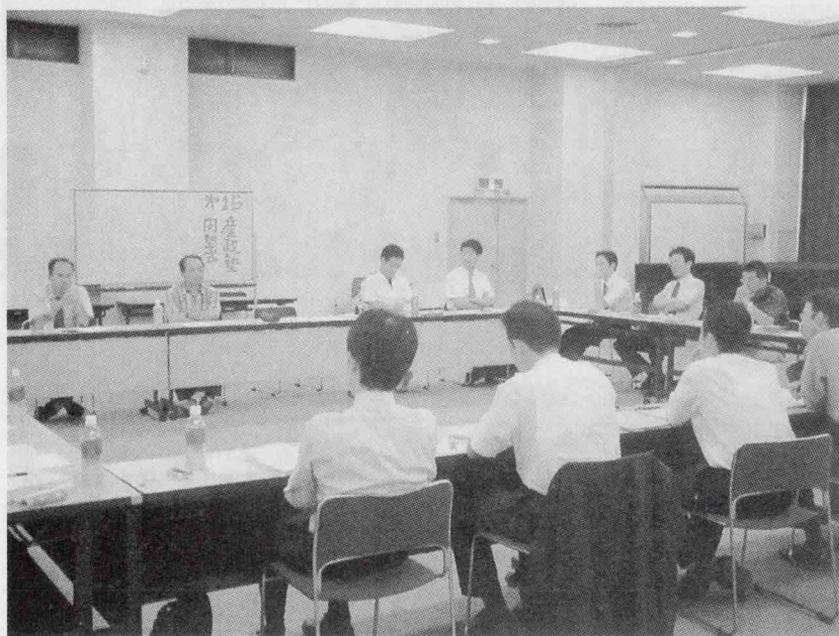
《第7回会合》

期日：2004年8月27日（金）

場所：中部電力労働組合会館（名古屋市）

内容：第15期産政塾閉塾式、

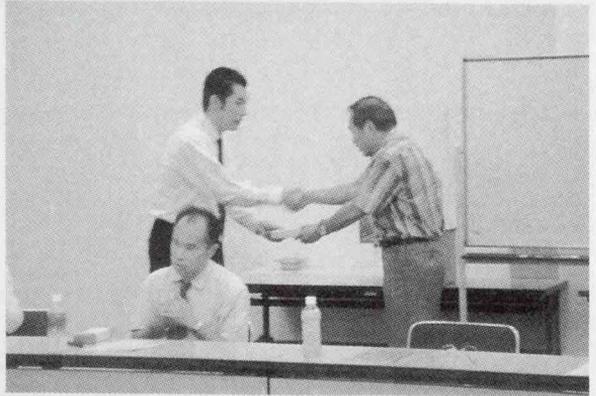
「殻の外に踏み出そう」について討論
懇親会



産政塾のテーマ「殻の外に踏み出そう」についてみんなで議論



小田桐塾長より贈る
言葉



記念品の贈呈



みなさんお疲れ様でした。みなさんの今後の
ますますのご活躍を期
待しております

産政塾歴代卒業生

※ 組織名は参加当時の名称

第2期生 (14名)

朝位 克 トヨタ自動車(株)
 伊藤 哲 全トヨタ労働組合連合会
 太田 雅也 名古屋鉄道(株)
 大町 重人 アイシン精機(株)
 桑山 幸次 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 小西 正晃 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 高橋 恭弘 トヨタ自動車労働組合
 種市 章 豊田合成(株)
 丹羽 漸 中部電力(株)
 松下 恭規 日本電装(株) ((株)デンソー)
 水野 和明 全松坂屋労働組合
 水野 真二 アイシン労働組合
 山内 潔 トヨタ車体(株)
 萬谷 孝之 (株)松坂屋

第1期生 (14名)

江口 光市 全トヨタ労働組合連合会
 尾関 勝隆 (株)松坂屋
 加藤 宏幸 日本電装(株) ((株)デンソー)
 甲村 正男 トヨタ車体労働組合
 清水 和博 松坂屋労働組合
 鈴木 智博 中部電力(株)
 高木 英樹 名古屋鉄道(株)
 土屋 昇大 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 中山 直人 トヨタ自動車労働組合
 平野 富広 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 本田 文利 豊田合成労働組合
 前沼 聡 アイシン労働組合
 宮崎 直樹 トヨタ自動車(株)
 安井 雅章 アイシン精機(株)

第4期生 (16名)

北村 直久 日本電装労働組合
(デンソー労働組合)
竹内 順治 豊田合成労働組合
朝日 和寛 日本電装(株) (株デンソー)
田中 義和 トヨタ自動車労働組合
村田 滋 (株)東海銀行 (株)UFJ銀行)
沢田大八郎 豊田自動織機労働組合
原 年幸 トヨタ自動車(株)
中村 武司 アイシン精機(株)
宮坂 和行 松坂屋労働組合
山田 法夫 名古屋鉄道(株)
秋葉 覚 中部電力(株)
駒沢 修 アイシン労働組合
岡 啓視 中部電力労働組合本部
加藤 秀夫 トヨタ車体労働組合
松野景之介 トヨタ車体(株)
相原 康伸 全トヨタ労働組合連合会

第3期生 (14名)

石鍋 寿久 トヨタ自動車労働組合
大島 一峰 アイシン精機(株)
大西 勝彦 豊田自動織機労働組合
神谷 直 アイシン労働組合
岸田 竜茂 中部電力(株)
雲井 浩 丸栄労働組合
近藤 郁也 トヨタ車体(株)
島川誠一郎 トヨタ自動車(株)
関谷 俊司 日本電装(株) (株デンソー)
竹下 裕之 トヨタ車体労働組合
塚本 和宏 全松坂屋労働組合
遠山 泰弘 日本電装労働組合
(デンソー労働組合)
深谷 修 豊田合成(株)
宮川 学 名古屋鉄道(株)

第6期生 (15名)

林 恭吾 丸栄労働組合
 竹内 秀明 中部電力(株)
 近藤 均 トヨタ車体(株)
 光岡 博 アイシン労働組合
 向井 克行 日本電装(株) ((株)デンソー)
 説田 公人 トヨタ自動車(株)
 中村 文彦 松坂屋労働組合
 高橋 誠 トヨタ自動車労働組合
 本田 武志 アイシン精機(株)
 伊藤 裕章 豊田合成(株)
 大島 秀一 名古屋鉄道(株)
 森 晴哉 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 横田 晴充 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行))
 桑山 完治 中部電力労働組合本部
 石川 勝幸 全トヨタ労働組合連合会

第5期生 (17名)

斉藤 正彦 丸栄労働組合
 橋本 亨 トヨタ車体(株)
 田島 健一 松坂屋労働組合
 稲川 敦之 名古屋鉄道(株)
 荒谷 育三 日本電装(株) ((株)デンソー)
 高井 信弘 豊田合成(株)
 長尾 基晴 アイシン精機(株)
 洲崎 典之 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)
 渡辺 潔 アイシン労働組合
 上田 信也 全トヨタ労働組合連合会
 杉浦 一成 トヨタ車体労働組合
 内田 厚 中部電力労働組合
 加藤 泰孝 中部電力(株)
 荻野 勝彦 トヨタ自動車(株)
 加藤 昭夫 トヨタ自動車労働組合
 磯部 謙二 日本特殊陶業(株)
 二木 芳樹 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)

第8期生 (22名)

有賀 文昭 中部電力労働組合
 伊藤 賢一 トヨタ車体(株)
 伊藤 友博 松坂屋労働組合
 岩城 史憲 名古屋鉄道(株)
 植松 良太 全トヨタ労働組合連合会
 粕谷 浩二 豊田市役所
 川村 淳一 豊田工機労働組合
 栗栖 秀人 (株)東海理化
 佐野 弘忠 中部電力(株)
 杉浦 公紀 アイシン労働組合
 中條 喜之 (株)デンソー
 所 秀樹 関東自動車工業(株)
 丹羽 広志 豊田合成労働組合
 根本 恵司 トヨタ自動車(株)
 服部 健司 デンソー労働組合
 早川 範一 (株)松坂屋
 廣瀬 登 (株)東海銀行 ((株)UFJ銀行)
 船戸 正巳 アラコ(株)
 前田 孝広 丸栄労働組合
 前田 直人 トヨタ車体労働組合
 百瀬 和典 トヨタ自動車労働組合
 森本 浩二 アイシン精機(株)

第7期生 (17名)

川村 博隆 アイシン労働組合
 阿久津正典 豊田市役所
 村瀬 俊 日本電装(株) ((株)デンソー)
 河路 直人 豊田合成労働組合
 小林 雅昭 全トヨタ労働組合連合会
 臼井 満 松坂屋労働組合
 星野 悟 中部電力(株)
 柴田 伸彦 中部電力労働組合
 小倉 克幸 トヨタ自動車(株)
 勝美寿美子 アイシン精機(株)
 西田 明生 トヨタ自動車労働組合
 高橋 剛 日本特殊陶業(株)
 吉田 茂 トヨタ車体(株)
 三川 高市 丸栄労働組合
 高井 康之 (株)東海銀行 ((株)UFJ銀行)
 吉川 篤史 名古屋鉄道(株)
 田中 英司 日本電装労働組合
 (デンソー労働組合)

第10期生 (21名)

石川 輝彦 アイシン労働組合
 奥田竜太郎 トヨタ車体(株)
 糟谷 道広 (株)デンソー
 門 孝裕 松坂屋労働組合
 川上 茂浩 中部電力(株)
 小坂 好伸 アイシン精機(株)
 近藤 理史 豊田市役所
 杉本 道男 日本特殊陶業(株)
 鈴木 亨 トヨタ車体労働組合
 鈴木 康紀 アラコ(株)
 高橋 勝将 デンソー労働組合
 丹下 隆吉 トヨタ自動車(株)
 徳増 達生 アスモ(株)
 戸田 覚 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 西井 俊哉 丸栄労働組合
 船間 淳也 名古屋鉄道(株)
 松田 斉 全トヨタ労働組合連合会
 武藤 成洋 豊田合成(株)
 安田 幸治 トヨタ自動車労働組合
 矢田 勝弘 フタバ産業(株)
 常 兆 名古屋大学

第9期生 (21名)

足立 貴彦 松坂屋労働組合
 石井 直生 トヨタ自動車(株)
 伊藤 裕介 豊田工機労働組合
 宇野 庄一 全トヨタ労働組合連合会
 江口 淳 豊田合成(株)
 見城 篤 中部電力(株)
 榊原 悦人 丸栄労働組合
 坂口 登 (株)東海銀行 ((株)UFJ 銀行)
 柴田 徹哉 豊田市役所
 須崎 辰彦 トヨタ車体労働組合
 玉木 健二 中部電力労働組合本部
 恒川 智行 アイシン労働組合
 中出 裕之 関東自動車工業(株)
 浜口 誠 トヨタ自動車労働組合
 林 克憲 (株)デンソー
 平岡 典明 アイシン精機(株)
 古川 豊 日本特殊陶業(株)
 本多 篤 トヨタ車体(株)
 前川 武治 デンソー労働組合
 山田 泰準 名古屋鉄道(株)
 山本 雅章 アラコ(株)

第12期生 (22名)

内田 幸代 豊田市役所
 江尾 国博 名古屋鉄道(株)
 梶川 拓也 中部電力(株)
 柏谷 幸彦 豊田合成(株)
 加藤 秀人 トヨタ車体労働組合
 後藤 泰司 丸栄労働組合
 近藤 雅人 (株)豊田自動織機
 高橋 正典 デンソー労働組合
 武田 純康 トヨタ自動車労働組合
 竹中 隆志 松坂屋労働組合
 鶴見 実男 アイシン労働組合
 寺西 知雄 東邦ガス労働組合
 中里 浩一 (株)UFJ銀行
 中村 明史 中部電力労働組合本部
 芳賀 章弘 トヨタ車体(株)
 長谷部知英 フタバ産業(株)
 羽根 章人 アラコ(株)
 本田 隆英 アイシン精機(株)
 松尾 正樹 (株)デンソー
 水野 勝博 全トヨタ労働組合連合会
 村瀬 政彦 トヨタ自動車(株)
 若松 真理 全ユニー労働組合

第11期生 (25名)

池浦 芳一 トヨタ車体(株)
 石本 誉 デンソー労働組合
 板倉 智宏 全ユニー労働組合
 上別府伸一 アイシン労働組合
 大寫 隆之 (株)豊田自動織機
 岡本 雅典 アスモ労働組合
 小野田和広 丸栄労働組合
 柴田 博 フタバ産業(株)
 締次 顕治 松坂屋労働組合
 常 兆 名古屋大学大学院国際開発研究科
 杉下 昌明 東邦ガス労働組合
 大東 輝彦 (株)東海銀行 (株)UFJ銀行
 高木 敏光 名古屋鉄道(株)
 高田 学 アイシン精機(株)
 滝野 仁 日本特殊陶業(株)
 武田 和則 中部電力労働組合本部
 鶴岡 光行 トヨタ自動車労働組合
 中村 英行 アラコ(株)
 林 賢士 豊田合成(株)
 三谷 建介 中部電力(株)
 武藤 俊和 トヨタ車体労働組合
 森 崇博 全トヨタ労働組合連合会
 山崎 一生 トヨタ自動車(株)
 横井 雅弘 (株)デンソー
 渡辺 明子 豊田市役所

第14期生 (22名)

浅野 清輝 東海理化労働組合
 大川 博 デンソー労働組合
 奥 丈治 (株)松坂屋
 梶田 進 トヨタ車体(株)
 梶原 昭二 豊田自動織機労働組合
 川崎 貴之 (株)デンソー
 栗原 尚子 アイシン精機(株)
 小嶋 直樹 松坂屋労働組合
 佐藤 源信 アラコ(株)
 白井 崇夫 刈谷市役所
 鈴木 輝行 全トヨタ労働組合連合会
 鈴木 利幸 中部電力労働組合
 苑田 隆之 中部電力(株)
 千種 徳充 トヨタ車体労働組合
 柘植 孝悦 豊田市役所
 長岡 享史 トヨタ自動車(株)
 藤原 誠二 アラコ労働組合
 堀田 大祐 名古屋鉄道(株)
 山口 健 トヨタ自動車労働組合
 山下 邦彦 アイシン労働組合
 吉田 研太 (株)豊田自動織機
 渡辺 憲司 丸栄労働組合

第13期生 (21名)

井上 正勝 トヨタ自動車労働組合
 内田 恭介 中部電力労働組合本部
 梅田 清孝 フタバ産業(株)
 太田 正樹 松坂屋労働組合
 門井 徳孝 デンソー労働組合
 熊崎 俊哉 トヨタ車体(株)
 佐野 智弘 アイシン精機(株)
 鈴木 定晴 トヨタ車体労働組合
 鈴木 武 名古屋鉄道(株)
 田中 亘人 (株)豊田自動織機
 冨和田光紀 豊田市役所
 出口 隆浩 全トヨタ労働組合連合会
 中川 年史 アイシン労働組合
 野坂 利次 トヨタ自動車(株)
 服部 淳二 豊田工機労働組合
 水野 雅通 アスモ労働組合
 宮城 英樹 (株)デンソー技研センター
 村口 文希 刈谷市役所
 森 章浩 (株)UFJ銀行
 森 勝 東邦ガス労働組合
 山本 徹真 アラコ(株)

産 政 塾

2005年1月 第6刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471-0833

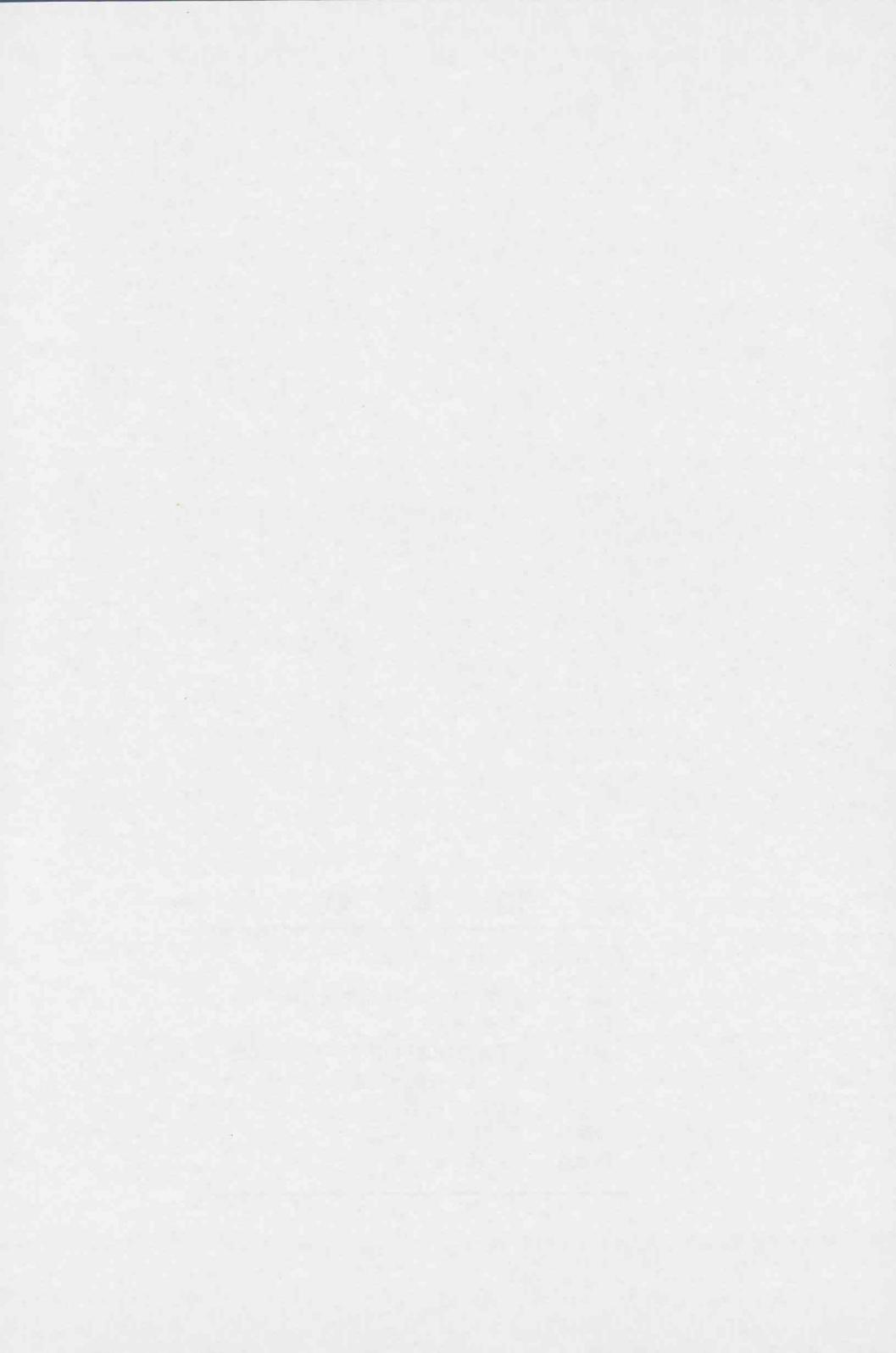
愛知県豊田市山之手8丁目131番地

全労済豊田会館 3F

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本





塾 政 塾

塾 長 小田桐勝巳

塾 生

刈谷市役所	池田 真生
名古屋鉄道労働組合	石原 英児
アイシン精機株式会社	海野 孝宏
松坂屋労働組合	越田 弘幸
アラコ株式会社	大河原宏樹
全トヨタ労働組合連合会	大橋 一之
豊田市役所	片山 伸子
中部電力労働組合本部	倉沢 範行
アイシン労働組合	洲崎 浩一
豊田合成労働組合	洲崎 晃嘉
トヨタ車体労働組合	千田 路征
トヨタ自動車労働組合	立松 学
株式会社松坂屋	棚橋 克成
トヨタ車体株式会社	奈須 克昭
株式会社豊田自動織機	野々垣 一
豊田工機労働組合	早矢仕 環
アスモ株式会社	原 誠治
中部電力株式会社	藤牧 知広
丸栄労働組合	別宮健一郎
デンソー労働組合	水越 宏明
トヨタホーム株式会社	山浦 宏行
株式会社デンソー	山添 勇人
全ユニー労働組合	山本 浩晃
豊田自動織機労働組合	吉川 浩二
トヨタ自動車株式会社	吉本 雅教

中 部 産 政 研 竹川 智雄